A CHRISTMAS CAROL

アイッケンス

Dickens

田草平訳



第一章

マアレイの亡霊

がない。彼の埋葬の登録簿には、僧侶も、書記も、葬儀屋も、

た喪主も署名した。スクルージがそれに署名した。そして、ス

クルージの名は、取引所においては、彼の署名しようとするい

かなる物に対しても十分有効であった。

老マアレイは戸の鋲のように死に果てていた。

私自身の知識からして、戸の鋲に関して特

直喩にある。そして、私のような汚れた手でそれを掻き紊すべ

鉄物と見做したいのであった。けれども、我々の祖先の智慧は紫緑の 私一個としては、むしろ柩の鋲を取引における最も死に果てた に死に果てたような要素を知っていると云うつもりではない。

カロル

注意せよ。私は、

ジと彼とは何年とも分らない長い歳月の間組合人であった。 果てていたと繰り返すのを許して下さいましょう。 いた。どうしてそれを知らずにいることが出来よう。スクルー スクルージは彼が死んだことを知っていたか。もちろん知って

きではない。

から諸君も、

私が語気を強めて、マアレイは戸の鋲の様に死に そんなことをしたら、この国は滅びて仕舞う。だ

唯一の会葬者であった。そして、そのスクルージですら、 クルージは彼が唯一の遺言執行人で、唯一の財産管理人で、唯 の当日卓越した商売人であることを失うほど、それほどこの悲 い事件に際して気落ちしてはいなかった。そして、万に一つ の財産譲受人で、唯一の残余受遺者で、唯一の友達で、

また

の間違いもない取引でその日を荘厳にした。

マアレイの葬儀のことを云ったので、私は出発点に立ち戻る

気になった。マアレイが死んでいたことには、毛頭疑いがない。

この事は明瞭に了解して置いて貰わなければならない。そうで

とも出て来る訳に行かない。あの芝居の始まる前に、ハムレッ これから述べようとしている物語から何の不思議なこ

ければ、阿父さんが夜毎に、東風に乗じて、自分の城壁の上を の阿父さんは死んだのだということを充分に呑み込んでいな

すなわちスクルージ・エンド・マアレイと云うように。この商

その後幾年もその名は倉庫の戸の上にそのままになっていた。

スクルージは老マアレイの名前を決して塗り消さなかった。 やみくもに出掛けるよりも、別段変ったことは一つもない。 風の吹く所へ――まあ例えばセント・パウル寺院の墓場へでも にその弱い子息の心を脅かしてやるために、日が暮れてから微 ふらふらさまよい歩いたのは、誰か他の中年の紳士が文字通り

絞り取る、捩じ取る、掴む、引っ掻く、かじりつく、貪欲な我 返事をした。彼にはどちらでも同じ事であったのだ。 の商会へ這入って来た人はスクルージのことをスクルージと呼 ああ、しかし彼は強欲非道の男であった。このスクルージは! 時にはマアレイと呼んだりした。が、彼は両方の名に

会はスクルージ・エンド・マアレイで知られて居た。新たにこ

鼻を痺れさせ、その頬を皺くちゃにして、歩きつきをぎごちな 彼の心の中の冷気は彼の老いたる顔つきを凍らせ、その尖った を好む、人づき合いの嫌いな、牡蠣のように孤独な男であった。 利々々爺であった! どんな鋼でもそれからしてとんと豊富な 火を打ち出したことのない火燧石のように硬く、鋭くて、秘密

の耳触りの悪い嗄れ声にも冷酷にあらわれていた。凍った白霜

また目を血走らせ、薄い唇をどす蒼くした。その上彼

は頭の上にも、眉毛にも、また針金のような顎にも降りつもっ

聖降誕祭にも一度といえど

もそれを打ち解けさせなかった。

部の暑さも寒さもスクルージにはほとんど何の影響も与え

いかな暖気も彼をあたためることは出来ず、

彼よりは厳しいものはなく、降る雪も彼ほどその目的に対して 寒空も彼を冷えさせることは出来なかった。どんなに吹く風も

受け容 一心不乱なものはなく、どんなに土砂降りの雨も彼ほど懇願を

すべきかを知らなかった。最も強い雨や、雪や、霰や、霙でも、

れないものはなかった。険悪な天候もどの点で彼を凌駕

かりであった。それはこれ等のものは時々どんどんと降って来 ただ一つの点で彼に立ち優っていることを誇ることが出来るば

た、然るにスクルージには綺麗に金子を払うと云うことは金輪

て、「スクルージさん、御機嫌はいかがですか。何日私の許へ会 何人もかつて往来で彼を呼び留めて、嬉しそうな顔つきをし

いに来て下さいます?」なぞと訊く者はなかった。乞食も彼に

未だ一度も、こうこういうところへはどう行きますかと、スク と彼に訊いたことがなかった。男でも女でも、彼の生れてから 一文遣って下さいと縋ったことがなく、子供達も今いつです?

ルージに道筋を訊ねた者はなかった。盲人の畜犬ですら、彼を

ですよ、盲人の旦那」とでも云うように、その尾を振ったもの 「丸っ切り眼のないものはまだしも悪の眼を持っているより優し 知っているらしく、彼がやって来るのを見ると、その飼主を戸

口の中や路地の奥へ引っ張り込んだものだ。そして、それから

そ彼の望むところであった。人情なぞは皆遠くに退いておれと だが、何をそんな事スクルージが気に懸けようぞ! それこ

警告しながら、人生の人ごみの道筋を押し分けて進んで行くこ

方々で今し方三時を打ったばかりだのに、もうすっかり暗くなっ がら、あちらこちらと往来しているのを耳にした。街の時計は 煖くなるようにと思って敷石に足をばたばた踏みつけたりしな

――もっとも終日明るくはなかったのだ。――隣近所

ていた。

噛みつくような日であった。おまけに霧も多かった。彼は戸外 ジは事務所に坐っていそがしそうにしていた。寒い、霜枯れた、

の路地で人々がふうふう息を吐いたり、胸に手を叩きつけたり、

とが、スクルージに取っては通人の所謂『大好物』であった。

ある時――日もあろうに、聖降誕祭の前夜に――老スクルー

くのを見ると、自然がつい近所に住んでいて、素敵もない大き 部屋で、 な烟の雲を吐き出しているんだと考える人があるかも知れない。 よりした雲が垂れ下がって来て、何から何まで蔽い隠して行 スクルージの事務所の戸は、大桶のような、向うの陰気な小 沢山の手紙を写している書記を見張るために開

かと見える位であった。でも、彼は、スクルージが石炭箱を始

なっていた。スクルージはほんのちっとばかりの火を持って

け放し

が、書記の火はもっともっとちょっぽりで、一片の石炭

ぼんやり幻影の様に見えたほど、戸外は霧が濃密であった。ど

霧はどんな隙間からも、

、鍵穴からも流れ込んで来た。

向う側の家並はただ

赤

の事務所の窓の中では、手にも触れられそうな鳶色をした空気

い汚点の様に、蝋燭がはたはたと揺れながら燃えて

御主人様は、どうしても君と僕とは別れなくちゃなるま 予言したものだ。それが為に、書記は首に白い襟巻を巻きつけ 蝋燭で煖まろうとして見た。が、元々想像力の強い人間で

なかった。

終自分の部屋にしまって置いたので、それを継ぎ足す訳に行か

書記が十能をもって這入って行くたんびに、きっと

なかったので、こんな骨折りをして見ても甲斐はなかった。

始めて彼が来たことに気が附いた位であった。 意にスクルージの許へやって来たので、スクルージはこの声で 叫んだ。 「聖降誕祭でお目出とう、伯父さん!」と、一つの快活な声が 。これはスクルージの甥の声であった。彼は大急ぎで不

クリスマス・ は霧と霜の中を駆け出して来たので、身体が煖まって、どっ

からどこまで真赤になっていた。スクルージのこの甥がですよ。

馬鹿々々しい!」とスクルージは言った。

顔は赤く美しく、眼は輝いて、ほうほうと白い息を吐いていた。 ルージの甥は云った。「まさかそう云う積りじゃないでしょうね 「聖降誕祭が馬鹿々々しいんですって、伯父さん!」と、スク

とうだって! お前が目出たがる権利がどこにある? 目出た 「そういう積りだよ」とスクルージは云った。「聖降誕祭お目出

くしていらっしゃる権利がどこにあるんです? ていらっしゃる理由がどこにあるのですよ? 立派な金持ちの がる理由がどこにあるんだよ? 貧乏しきっている癖に。」 「さあ、それじゃ」と甥は快活に言葉を返した。「貴方が陰気臭

癖に。」

機嫌を悪くし

と云った。そして、その後から「馬鹿々々しい」と附け足した。

スクルージは早速に巧い返事も出来かねたから、また「何を!」

地面に埋めてやるんだよ。是非そうしてやるとも!」 などと云って廻っている鈍児どもはどいつもこいつもそいつの ば」と、スクルージは憤然として云った、「聖降誕祭お目出とう 金持にはなれない時じゃないか。お前の帳面の決算をして、そ 時じゃないか。一つ余計に年を取りながら、一つだって余計に ちゃ聖降誕祭の時は一体何だ! 金子もないのに勘定書を払う 聖降誕祭お目出とうがちゃんちゃら可笑しいわい! お前にとっ な馬鹿者どもの世の中にいては。聖降誕祭お目出とうだって! プディングの中へ一緒に煮込んで、心臓に柊の棒を突き通して、 ることを知る時じゃないか。俺の思う通りにすることが出来れ の中のどの口座を見ても丸一年の間ずっと損にばかりなってい 「ぷりぷりせずにいられるかい」と、伯父は云い返した、「こん 「伯父さん、そうぷりぷりしなさんな」と、甥は云った。

「甥よ!」と、伯父は厳格に言葉を返した。「お前はお前の流儀 「伯父さん!」と甥は抗弁した。

で聖降誕祭を祝え、俺はまた俺の流儀で祝わせて貰おうよ。」

「祝うんですって!」と、スクルージの甥は相手の言葉を繰り

返した。「だが、ちっとも祝っていないじゃありませんか。」 「では、

俺にはそんな物打遣らかして置かせて貰おうよ」とス

これまでも大層お前の役に立ったからねえ!」

クルージは云った。「聖降誕祭は大層お前の役に立つだろうよ!

が、

対する崇敬の念から離れて、いや、聖降誕祭に附属しているも

て云いますがね」と甥は答えた。「聖降誕祭もその一つですよ。

私はいつも聖降誕祭が来ると、その神聖な名前や由来に

敢てそれをしなかった事柄がいくらもありますよ、

私は敢

「世の中には、私がそれから利益を掴もうとすれば掴めたんだ

期だと思っているのですよ。親切な、人をゆるしてやる、慈悲心 に富んだ、楽しい時期だと。男も女も一様に揃って、 それから切り離しても、聖降誕祭の時期というものは結構な時

のが何にもせよ、その崇敬の念から切り離せるとしたらですよ、

ていた心を自由に開いて、自分達より目下の者どもも実際は一

閉じ切っ

中でも、私の知っている唯一の時期だと思っているのですよ。 掛ける別の人種ではないと云うように考える、一年の長い暦の 緒に墓場に旅行している道伴侶で、決して他の旅路を指して出

ですから、

の中へ金貨や銀貨の切れっぱし一つだって入れてくれたことが

私を益してくれた、またこれから先も益してくれる 私は信じているんですよ。で、私は云うのです、神

ねえ伯父さん、この聖降誕祭というものは私の衣嚢

よ

聖降誕祭を祝福し給え! と。」

ものだと、

その不穏当なことに気が附いて、火を突っついて、最後に残っ 大桶の中にいた書記は我にもなく拍手喝采した。が、すぐに

CHRISTMAS CAROL た有るか無いかの火種を永久に掻き消してしまった。

「もう一遍手を叩いて見ろ」とスクルージは云った。「君は地

不思議だよ。」

の宅で一緒に食事をしましょうよ。」

スクルージは、自分は相手が地獄に落ちたのを見たいものだ

「そう怒らないで下さい、伯父さん。いらっしゃいよ、私ども

方へ振り向いて附け足した。「貴方が議会へお出にならないのは 中々大した雄弁家でいらっしゃるね、もし貴方」と、彼は甥の 位を棒に振ることに依って、聖降誕祭を祝うだろうよ。貴方は

まで漏さず云ってしまった。そして、(自分がお前の宅へ行くよ と云った、実際彼はそう云った。彼はその言葉を始めから終い

りは)先ずお前がそう云う怖ろしい目に遭っているのを見たい ものだと云った。 「だが、何故です?」スクルージの甥は叫んだ。「何故ですよ?」

「お前はまた何故結婚なぞしたのだ?」と、スクルージは訊い

た。 「あの女を愛したからでさ。」

「愛したからだと!」と、世の中にお目出たい聖降誕祭よりも、

もっと馬鹿々々しいものはこれ一つだと云わんばかりに、スク ルージは唸った。

「では左様なら!」

さらない理由にするんですよ?」

たことはないじゃありませんか。何故今になってそれを来て下

「いや、伯父さん、貴方は結婚しない前だって一度も来て下すっ

「私は貴方に何もして貰おうと思っちゃいませんよ。何も貰お 「左様なら」と、スクルージは云った。

うと思っちゃいませんよ。どうして二人は仲好く出来ないので

すかね。」

「左様なら」と、スクルージは云った。

降誕祭の気分を保って行くつもりですよ。ですから、

聖降誕祭

お目出とう、伯父さん!」

「そして、新年お目出とう!」

「左様なら」と、スクルージは云った。

表して、仲直りをして見ようと思ったのです。私は最後まで聖

とは一度だってありません。ですが、今度は聖降誕祭に敬意を 二人はこれまで喧嘩をしたことは――私が相手になってしたこ 「貴方がそう頑固なのを見ると、私は心から悲しくなりますよ。

「左様なら」と、スクルージは云った。彼の甥はこう云われて

彼は表側の戸口の所で立ち停って、書記に時節柄の挨拶を 一語もつっけんどんな言葉は返さないでその部屋を出て行っ

いた。と云うのは、彼も丁寧に挨拶を返したからである。

書記は冷えていたが、スクルージより温かい心を持って

「まだ一人居るわい」と、スクルージは彼の声を聞き附けて呟

カロル

「一週間に十五シリング貰って、女房と子供を養っている書記

聖降誕祭お目出とうだなんて云っていやがる。俺は瘋

の奴が、

いた。

癲病院へ退き込もうかな。」

あった。そして、今や帽子を脱いで、スクルージの事務室に立っ

を導き入れた。彼等は見るから気持の好い、恰服のいい紳士で

この狂人はスクルージの甥を送り出しながら、二人の他の男

委任状を差出しながら云った。 間に依って代表されているので御座いましょうな」と、紳士は は答えた。「七年前のちょうど今夜亡くなったのです。」 がら貴方はスクルージさんでいらっしゃいますか、それともマ の中の一人が手に持った表に照し合わせながら訊ねた。「失礼な アレイさんでいらっしゃいますか。」 ていた。彼等は手に帳簿と紙とを持って、彼にお辞儀をした。 「こちらはスクルージとマアレイ商会で御座いますね?」と、そ 「もちろんマアレイさんの鷹揚なところは、生き残られたお仲 「マアレイ君は死んでから七年になりますよ」と、スクルージ

神であったからである。鷹揚なところという気味の悪い言葉を かにその通りであった。と云うのは、彼等二人は類似の精

聞いて、スクルージは顔を顰めた。そして、頭を振って、委任

状を返した。

が有り触れた生活の慰楽に事を欠いているので御座いますよ、 何千という人間が衣食に窮しているのです、何十万という人間 と云うことは、平日よりも一層願わしいことで御座いますよ。 と、紳士はペンを取り上げながら云った。「目下非常に苦しんで いる貧窮者どものために、多少なりとも衣食の資を拵えてやる 「一年中のこのお祝い季節に当たりまして、スクルージさん」

カロル 貴方。」 「監獄はいくらもありますよ」と、紳士は再びペンを下に置き 「監獄はないのですかね」と、スクルージは訊ねた。

「あれは今でもやっていますか。」

「そして共立救貧院は?」とスクルージは畳みかけて訊いた。

ながら云った。

「おお! 私はまた貴方が最初に云われた言葉から見て、何かそ 「踏み車や救貧法も十分に活用されていますか。」 「両方とも盛に活動していますよ。」

いと申上げられると好う御座いますがね。」

「やって居ります、今でも」と、紳士は返答した。「やっていな

心身の慰安を供給してやることが出来ないと云う所信の下に」 う云う物の有益な運転を阻害するような事が起こったのではな てすっかり安心しました。」 いかと心配しましたよ」と、スクルージは云った。「それを伺っ 「そう云う物ではとてもこの多数の人に対して基督教徒らしい

力しているので御座います。私どもがこの際を選んだのは、そ なり、飲料なり、燃料なりを買ってやる資金を募集しようと努 と、その紳士は返辞をした。「私ども数人の物が貧民のために肉

れが特に、貧乏が痛感されていると共に、有福な方々が喜び楽

御寄附はいくらといた

「皆無」と、スクルージは云った。

「いや、私は打遣っといて貰いたいのだ」と、スクルージは云っ 「匿名がお望みで?」

ような造営物の維持を助けている――それだけでも随分費りま 怠惰者を愉快にしてやる訳には行きません。私は今挙げた 私は自分でも聖降誕祭だって愉快にはしていない。ですも 「何が望みだとお尋ねになるから、こう御返辞をしたので

多くの人は(そんな所へ行く位なら)いっそ死んだ方が優しだ

「多くの人がそこへ(行こうと思っても)行かれません。また

すよ。暮しの立たない者はそこへ行くが可いのさ。」

た。「人間は自分の仕事さえ好く心得てりゃ、 よ。それに――失礼ですが――そう云う事実は知りませんね。」 した方が可い、そして、過剰の人口を減らす方が可う御座んす と思って居りましょう。」 「いっそ死んだ方がよけりゃ」と、スクルージは云った、「そう 「いや、そりゃ私の知った事じゃない」と、スクルージは答え 「でも、 御存知の筈ですが」と、紳士は云った。

です。 事で年中暇なしですよ。左様なら、お二人さん!」 自分達の主旨を押して追求したところで、とても無駄だと明 他人の仕事に干渉するには及ばない。私なぞは自分の仕

それで沢山のもの

気軽な気持で、再び仕事に取り掛った。

白に看て取ったので、紳士達は引き下がった。スクルージは急

に自分が偉くなったように感じながら、平生の彼よりはずっと

し出でながら、 ゆらゆら燃える松明を持って歩き廻った。

馬の前に立って、途中その馬を案内する御用を承わりたいと申

年数

その間にも霧と闇とはいよいよ深くなったので、人々は馬車

シック型の窓から何喰わぬ顔してスクルージを見下ろしていた を経た教会の塔は――その銅鑼声の古い鐘はいつも壁の中のゴ

るあの凍った頭の中で歯ががちがち噛み合ってでもいるように、

その塔も見えなくなった。そして、あの高い所にあ

後に顫えるような震声を曳いて、雲の中で一時間目毎、十五分

目毎の鐘を打った。寒さはいよいよ厳しくなった。大通りでは、

ぱちつかせたりしながらむらがっていた。水道の栓はひとり打

と子供達の一団が夢中になって手を煖めたり、

火焔の前に眼を

火鉢の中に火を沢山燃して置いて、その周囲に襤褸を来た男達

!地の隅で、二三の労働者が瓦斯管の修繕をして居た。そして、

カロル

を真赧にした。家禽屋だの食料品屋だのの商売は素晴らしい戯 パチ弾けている店々の明るさは、 になってしまった。 柊の小枝や果実が窓の中の洋灯の熱にパ

通りがかりの人々の蒼い顔

到底信じら

遣

って置かれたので、その溢れ出る水は急に凍って、厭世的な

カロル A CHRISTMAS CAROL 白くもない原則がこれと何かの関係があろうとは、 談になってしまった。すなわち取引とか売買とかいうような面 の用意をするように吩咐けた。 と膳部係とに、市長家として恥ずかしくないような、 市長閣下は堂々とした官邸の城砦の中で、何十人という料理番 ないような、 華やかな観世物になってしまったのであった。

クリスマス・

せられた詰らない仕立屋すら、

血腥い真似をしたと云うかどで市長から五シリングの罰金に処

また前週の月曜日酒に酔って、

聖降誕祭

買

いに駆け出して行った間に、

屋根裏の部屋で明日のプディン 痩せた女房と赤ん坊とが牛肉を

よいよ霧は深く、寒さも加わって来た。突き刺すような、

身に徹えるような、噛みつくような寒さであった。聖ダンスタ

グを掻き廻していた。

ンがいつもの武器を使う代りに、こんなお天気で一と撫でして、

悪魔の鼻をちょいと痺れさせてやったら、その時こそ実際悪魔

は大声挙げて咆吼したことでもあろう。骨が犬に咬まれるよう

に、飢えた寒さに咬みつかれ、もぐもぐ噛じられた、一つの尖っ

た若い鼻の持ち主がスクルージの鍵の穴から覗き込んで、聖降

誕祭の頌歌を彼に振舞おうとした。が、

神は貴方がたを祝福したまわん、

愉快そうな紳士方よ、

クリスマス・

勢いで簿記棒を引掴んだ。それがために歌唄いは仰天して、そ

と初めの文句を歌い出した刹那に、スクルージは非常に猛烈な

貴方がたを狼狽せしむる者は一としてなからん!

せて置いたまま遁げ出した。 の鍵の穴を霧と、それよりももっと主人と性の合った霜とに任

とうとう事務所の閉じる時刻がやって来た。厭々ながらスク

ルージはその腰掛から降りて、大桶の中に待ち構えていた書記

CHRISTMAS CAROL

クリスマス・

事でもないさ。で、そのために半クラウンを差引こうと云い出

君は酷い目に遭ったと思うだろう、きっとそうだろう

「都合は宜しくないさ」と、スクルージは云った。「また公平な

な! したら、

書記は微かに笑った。

カロル

「ご都合が宜しければ、貴方。」

「明日は丸一日欲しいんだろうね?」とスクルージは云った。

帽子を被った。

に、黙ってその事実の承認を与えた。

書記は早速蝋燭を消して

いのに一日の給料を払わせられる俺を酷い目に遭わせたとは考 「しかもだ」と、スクルージは云った、「君の方じゃ仕事もしな

毎年十二月二十五日に人の懐中物を掏り取るにしちゃ、まず 書記は一年にたった一度のことだと云った。

けながら云った。「だが、どうしたって丸一日休まずには置かな い言い訳だ」と、スクルージは大きな外套の顎までボタンを掛

ぶつぶつ云いながら出て行った。事務所は瞬く間に閉じられて いのだろう。明くる朝はその代りに一層早く出て来なさいよ。」 書記はそうしましょうと云うことを約束した。スクルージは

ぶらさせながら、(と云うのは彼は外套を持っていなかったから

しまった。そして、書記は白い襟巻の長い両端を腰の下でぶら

で。)聖降誕祭前夜のお祝いに、子供達の列の端に附いて、コー

ウンの自宅へ駆け出して行った。 それから目隠し遊びをしようと思って、全速力でカムデン・タ

ンヒルの大通りの氷った辷り易い道の上を幾度となく往復した。

スクルージは行きつけの陰気な居酒屋で、陰気な食事を済ま

した。そこにあった新聞をすっかり読んでしまって、あとは退

屈凌ぎに銀行の通帳をいじくっていたが、やがて寝に帰った。

彼はかつて死んだ仲間の所有であった部屋に住っていた。それ

は中庭の突き当りの陰気な一構えの建物の中にある薄暗い一組 ん坊の遊びをしながら、そこへ走り込んだまま、元の出口を忘 の室であった。この建物は、少年の頃に他の家々と一緒に隠れ

随分物凄いものになっていた。何しろ他の室は皆事務所に貸し ど、ここにある必要のないものであった。今はすっかり古びて、 れてしまったものに違いないと想像せずにはいられなかったほ

霜とは、その家の真黒な古い玄関の辺りにまごまごしていたが、 ちょうどそれは天気の神がじっと悲しげに考え込みながら、閾 の上に坐っているのかと思われる位であった。

庭は真暗で、その石の一つ一つをも知っている筈のスクルージ

てあって、スクルージの外には誰も住んで居ないのだから。中

ですら、已むを得ず手探りで這入って行った位であった。霧と

またスクルージは、そこに住っている間、朝に晩にそれを見て たと云う外に、別段変ったことはなかった。それは事実である。 いたと云うことも事実である。またスクルージは、倫敦市民のいたと云うことも事実である。またスクルージは、倫敦だり ところで、入口の戸敲きには、それは非常に大きなものであっ

も――引っ包めてもと云うのは少し大胆だが、倫敦市中の何人 何人とも、市の行政団体、市参事会、組合員などを引っ包めてだれ

とも同じように、所謂想像力なるものを余り持っていなかった

錠前に鍵を押し込んでから、それがいつの間にどうして変った 少しもマアレイの上に思いを致さなかったと云うことも心に留 めて置いて貰いたい。で、そうした上で、スクルージが、戸の の午後七年前に死んだ仲間のことを口にした切りで、それ以来 と云うことも事実その通りである。またスクルージは、この日

レイの顔と見たと云うことは、一体どうしたことであろうか、 と云うこともないのに、その戸敲きを戸敲きと見ないで、マア

それを説明の出来る人があったら、誰でもいいから説明して貰

マアレイの顔。それは中庭にある外の物体のように、見透か

せない闇の中にあるのではなく、真暗なあなぐらの中にある腐

それは怒ってもいなければ、猛々しい顔でもない。その昔マア 敗した海老のように、気味の悪い光を身の周りに持っていた。

カロル 血は赤児の時から恐ろしいというような感じは知らないで通し よりも、むしろその支配を超脱しているように思われた。 つの戸敲きであった。彼はどきりともしなかった、 スクルージがこの現象を眼を凝らして見ると、それはまた一

は嘘だ。が、しかし彼は一たび放した鍵に手を掛けて、頑強に

て来たが、今もその感じを意識しなかったなぞと云えば、それ

または彼の

顔の気味悪さは顔とは全然無関係で、

顔をぞっと怖毛の立つような気味の悪いものにした。が、その顔をぞっと怖毛の立つような気味の悪いものにした。が、その

ジを見遣った。

幽霊然たる額に幽霊然たる眼鏡を掻き上げて、じっとスクルー

頭髪は息か熱した空気でも吹きかけられている

レイが物を見る時の容子そっくりの容子をして、すなわちその

ように、へんてこに動いていた。そして眼はぱっちり開いてい

まるで動かなかった。その眼とどす黒い顔の色とはその

顔の表情の一部分という

だろうと、半ばそれを待ち設けてでもいるように、先ずその戸 下の方へ出っ張っているマアレイの弁髪を見て脅かされること |は戸を閉める前に、一寸躊躇して手を控えた。そして、廊

それを廻わした。それから中へ這入って蝋燭を点けた。

の背後を用心深く見廻わした。が、その戸の裏には、戸敲きを

閉めてしまった。 留めてあった螺旋と女螺旋との外には何もなかった。そこで彼 酒商の借りている地下のあなぐらの中のどの樽も、それぞれ特 は「ぷっ! ぷっ!」と云った。そして、その戸をぴっしゃり その響は雷鳴のように家の中に響き渡った。階上のどの室も、

有の反響を立てて高鳴りをしたように思われた。スクルージは

りをして、廊下を横切って、階段を上って行った。しかも緩や

反響なぞにおびえるような男ではなかった。彼はしっかり戸締

読者諸君は、六馬立ての馬車を駆って古い階子段を駆け上が または、

かに。歩いている間に蝋燭の心を切りながら。

新に議会を通過した法令の穴を潜って馬車を

駆るとか云うようなことを漠然と話していても宜しい。だが、

さは十分にあって、まだ余地がある位であった。それが恐らく

ることが出来ると云うことを云いたいのだ。そうするだけの広 れを横にして引き上げることも出来る、しかもそれを容易くす 私は誰でもあの階段の上に棺車を引き上げようと思えば上げら

しかも壁の方に横木をやり、欄干の方へ扉を向けて、そ

たろう。それだもの、スクルージの蝋燭ではかなり暗かったと 瓦斯灯の光りが射しても、十分にこの入口を照らしはしなかっ のを見たように思った原因でがなあろう。街上からは五六個の スクルージの薄暗がりの中で自分の前を自動棺車が上って行く

誰

にも想像がつこう。

暗闇は廉いものだ。 ・ジは、 彼はその重い戸を閉める前に、 、そんなことには少しも頓着しないで、上って

そして、

スクルージはそれが好き

彼もそうして見たくな

何事もなかった

であった。 が、

か検めようとして、室々を通り抜けた。

居間、

る位には、

十分その顔の追憶を持っていたのだ。

寝室、物置。

すべてが依然として元の通りになってい

卓子の下にも、

長椅子の下にも、

誰もいなかった。

煖炉に

は少しばかりの火が残っていた。

匙も皿も用意してあった。

(スクルージは鼻風を引いていた)の小鍋は炉房の棚の上

寝床の下にも、誰もいなかった。

押入の中にも誰もい

なかっ その中

にあっ

寝間着は胡散臭い恰好をして壁に懸かっていたが、

物置も普段の通りであった。古い煖炉の

にも誰もいなかった。

るばかりであった。 すっかり安心して、

彼は戸を閉めて、錠を下ろした。二重に

蓋と、古靴と、二個の魚籠と、三脚の洗面台と、火掻き棒があ

錠を下ろした、それは彼の習慣ではなかった。こうして先ず不

A CHRISTMAS CAROL

着を着て上靴を穿いて、寝帽を被った。それから粥を啜ろうと **意打ちを喰う恐れをなくして置いて、彼は頸飾を外した。寝間**

して煖炉の前に坐った。

前に和蘭のある商人が拵えた古い物で、周囲には聖書の中の物

な感じでも引き出すことは出来なかったのだ。煖炉はずっと以 しなければ、こんな一握の焚物からは暖かいと云うほんの僅か 寄って腰を下ろして、

れども無きが如きものであった。で、余儀なくその火の近くへ

長い間その上に伸しかかってい

そう

実際それは極めてとろい火であった。こんな厳寒の晩には有

クリスマス・ 達や、 する力を持っていたとしたら、どの瓦にも老マアレイの頭が写 取りとまりのない彼の考えの断片から取って、何かの絵を形成 うに現れて来て、総ての人間を丸呑みにしてしまった。 な雲に乗って空から降ってくる天の使者や、アブラハムや、ベ 語を絵模様にした、 し出されたことであろう。 の滑っこい瓦がいずれも最初は白無地に出来ていて、その表に かも七年前に死んだマアレイのあの顔が古えの予言者の鞭のよ インや、アベルや、パロの娘達や、シバの女王達、羽布団のよう ルシャザアや、牛酪皿に乗って海に出て行こうとしている使者 「馬鹿な!」と、スクルージは云った。そして、室の中をあち 幾百と云う彼の心を惹く人物がそこに描かれていた。 風変りな和蘭の瓦が敷き詰めてあった。カ

若しこ

こちと歩いた。

五六度往ったり来たりした後で、彼はまた腰を下ろした。彼

め に、この建物の最上階にある一つの室と相通ずるようになっ

ていた、この頃は使われない呼鈴であった。で、見上げた途端

いや、

カロル

最初は、

に鳴り出した。 じきに高く鳴り出した。そして、家の中のどの鈴も皆同じよう ほとんど音も立てないほど、極めて緩やかに揺れていた。が、 に、この呼鈴がゆらゆら揺れだしたので、彼は非常に驚いた。 不思議な何とも云われない恐怖の念に襲われた。

れは一時間も続いたように思われた。呼鈴は鳴り出したときと が続いたのは半分か一分位のものであったろう。が、そ

同じく、一斉に止んだ。その後に、階下のずっと下の方で、チャ

ランチャランと云う、ちょうど誰かが酒屋のあなぐらの中にあ

だと云われたのを聞いたことがあるように追想した。 の時スクルージは化物屋敷では幽霊が鎖を引き摺っているもの

あなぐらの戸はぶんと 唸りを立てて開いた。それから彼は前

よりも高くなったその物音を階下の床の上に聞いた。それから

階子段を上って来るのを、それから真直に彼の室の戸口の方へ

やって来るのを聞いた。

「誰がそれを本気に受けるものか。」

とは云ったものの、一瞬の躊躇もなく、それが重い戸を通り

「まだ馬鹿な真似をしてやがる!」と、スクルージは云った。

は、彼も顔色が変った。それが這入って来た瞬間に、消えかかっ 抜けて室の中へ、しかも彼の眼の前まで這入り込んで来た時に

胴 日 |じ顔 らなった。 洋袴に、 紛 れもない同じ顔であった。 長靴を着けた、

暗

ò

|幽霊だ!」とでも叫ぶように、ぱっと跳ね上がって、

焔はちょうど「私は彼を知っている!

マア

7

いた(蝋燭の)

弁髪や、

た。 た総は、 彼

の曳き摺って来た鎖は腰の周りに絡

上衣の裾や、

頭の髪と同じように逆立って

みついていた。

マアレイであった。

靴に附

弁髪を着けた、

は長いもので、ちょうど尻尾のように、彼をぐるぐる捲いて

箱や、

鍵 そ

処や、

海老錠や、

台帳や、

証券や、

鋼鉄で細工をした重

い財嚢

やで出来ていた。

彼の体躯は透き通っていた。

その

ため

スクルージは、

彼を観察して、

胴衣を透かして見遣りなが

5

上衣の背後に附いている二つの釦子を見ることが出来た位

れは(スクルージは精密にそれを観察して見た)、

聞いたことがあった。が、今までは決してそれを本当にしては スクルージはマアレイが腸を持たないと云われていたのを度々

であった。

いなかった。

うな影響を感じてはいたけれども、また頭から顎へかけて捲き 附けていた褶んだ半帛の布目に気が附いてはいたけれども――

はいたけれども、その死のように冷い眼の人をぞっとさせるよ

こんな物を捲き附けているのを彼は以前見たことがなかった、

それでもまだ彼は本当に出来なくって、我と我が感覚を疑

「どうしたね!」と、スクルージは例の通り皮肉に冷淡に云っ

げと「見遣って、それが自分の前に立っているのだとは承知して

いや、今でもそれを本当にはしなかった。彼は幽霊をしげし

た。「何ぞ私に用があるのかね。」 「沢山あるよ。」――マアレイの声だ、疑うところはない。

CHRISTMAS CAROL 「貴方は誰ですか?」

「じゃ、

「貴方は誰であったか」と、スクルージは声を高めて云っ

「誰であったかと訊いて貰いたいね。」

クリスマス・

「存生中は、

貴方は――

貴方は腰を掛けられるかね」と、スクルージはど 私は貴方の仲間、ジェコブ・マアレイだったよ。」

うかなと思うように相手を見ながら訊ねた。

「出来るよ。」

まで」と云おうとしたのだが、この方が一層この場に応わしい た。「幽霊にしては、いやにやかましいね。」彼は「些細なこと

と思って取り代えた。(註、「幽霊にしては」と「些細なことま

で」が原語では語呂の上の「しゃれ」になっているのである。)

「じゃ、お掛けなさい。」 スクルージがこの問を発したのは、こんな透明な幽霊でも椅

子なぞに掛けられるものかどうか、

ある。

弁解の必要を免れまいと感じたからである。ところが、

そして、それが出来ないという場合には、

彼には分らなかったからで

幽霊も面倒な

幽霊は

そんな事には馴れ切っているように、煖炉の向う側に腰を下ろ

クリスマス・

ると思っているのかね。」

「私の実在については、

お前さんの感覚以上にどんな証拠があ

「信じないさ」と、スクルージは云った。

「お前さんは私を信じないね」と、幽霊は云った。

「私には分らないよ」と、スクルージは云った。

「じゃ、何だって自分の感覚を疑うのか。」

カロル

した。

するものだからね。胃の工合が少し狂っても感覚を詐欺師にし てしまうよ。 お前さんは消化し切れなかった牛肉の一片かも知

「だって」と、スクルージは云った、「些細な事が感覚には影響

A CHRISTMAS CAROL 彼はただ自分の心を紛らしたり、恐怖を鎮めたりする手段とし 時は心中決して剽軽な気持になってもいなかった。実を云えば、 墓場よりも肉汁の気の方が余計にあるね。」 ものかも知れないよ。 れない。芥子の一点か、乾酪の小片か、生煮えの薯の砕片位の スクルージはあまり戯談なぞ云う男ではなかった。またこの ゜お前さんが何であろうと、

お前さんには

クリスマス あった。 云うのも、その幽霊の声が骨の髄まで彼を周章せしめたからで 秒でも黙って、このじっと据わった、どんよりと光のない 気の利いた事でも云って見ようとしたのであった。それと

CHRISTMAS CAROL 自身の地獄の風を身の周りに持っていると云うことも、 関わりそうに、スクルージは感じた。 ら非常に恐ろしい気がした。スクルージは自分が直接その風を

眼を見詰めて腰掛けていようものなら、それこそ自分の生命に

それに、その幽霊が幽霊

何 門か知

ع

受けたのではなかった。しかしそれは明白に事実であった。

云うのは、

ども、 「この楊子は見えるだろうね?」と、スクルージは今挙げたよ

カロル

でも吹かれているように、始終動いていたからである。

うな理由の下に、

クリスマス・

だの一秒間でもよいから、

早速突撃に立ち戻りながら、また一つにはた

幽霊の石のような凝視を側へ逸らし

たいと望みながら訊いた。

「見えるよ」と、

幽霊が答えた。

その毛髪や、着物の裾や長靴の総が、

竈から昇る熱気に

この幽霊は全然身動きもしないで腰掛けていたけれ

「でも、見えるんだよ」と、幽霊は云った。「見ていなくてもね。」 「楊子の方を見ていないじゃないか」と、スクルージは云った。

凄い、慄然とするような物音を立てて、その鎖を揺振ったので、 物の一隊に始終いじめられてりゃ世話はないや。馬鹿々々しい、 本当に馬鹿々々しいやい!」 みにしさえすれば可いのだ。そして、一生の間自分で拵えた化 スクルージは気絶してはならないと、しっかりと椅子に獅噛み 「なるほど!」と、スクルージは答えた。「私はただこれを丸呑 これを聞くと、幽霊は怖ろしい叫び声を挙げた。そして、物

もどんなに大きかったことであろう! 着いた。しかし幽霊が室内でこんな物を巻いているのはちと暖 その下顎がだらりと胸に重ね落ちた時には、彼の恐怖は前より か過ぎるとでも云うように頭からその繃帯を取り外したので、

「お助け!」と彼は云った。「恐ろしい幽霊様、どうして貴方は スクルージはいきなり跪いて、顔の前に両手を合せた。

私をお苦しめになるのだ?」

信ずるかどうじゃ?」 「信じます」と、スクルージは云った。「信じないでは居られま 「世間の欲に眼の暮れた男よ」と、幽霊は答えた。「お前は私を

せぬ。ですが、何故幽霊が出るのですか。また何だって私の許

へやって来るのですか。」

「誰しも人間というものは」と、幽霊は返答した。「自分の中に

ある魂が世間の同胞の間へ出て行って、あちこちとひろく旅行

ているのだ。世界中をうろつき歩いて、---

ああ悲しいかな!

ちに出て歩かなければ、死んでからそうするように申し渡され して廻らなければならないものだ。若しその魂が生きているう

来ない事柄を目撃するように、その魂は運命を定められている 幸福に転ずることも出来たろうが、今は自分の与かることの出 そして、この世に居たら共に与かることも出来たろうし、

の幻影のような両手を絞った。 のだよ。」 幽霊は再び叫び声を挙げた。そして、その鎖を揺振って、そ

云った。「どういう訳ですか。」 「私が存命中に鍛えた鎖を身に着けているのさ」と幽霊は答え 「貴方は縛られておいでですね」と、スクルージは顫えながら

前さんはこの鎖の型に見覚えがないかね。」 分の勝手で捲き附けたのだ。自分の勝手で身に着けたのだ。 た。「私は一輪ずつ、一ヤードずつ、拵えて行った。そして、自 スクルージはいよいよますます慄えた。

した。 引き立つようなことを云っておくれ、ジェコブよ。」 ジの洗礼名エベネザアも同様。)」と、彼は憐みを乞うように云っ 背負っているその頑丈な捲環の重さと長さを知りたいかね。そ た。「老ジェコブ・マアレイよ、もっと話しをしておくれ。気の の綱で取り巻かれているのじゃないかと、周囲の床の上を見廻 たからね。今は素晴らしく重い鎖になってるよ。」 れは七年前の聖降誕祭の前晩にも、これに負けないくらい重く て長かったよ。その後もお前さんは苦労してそれを殖やして来 「ジェコブ(註、これは猶太人に多い名であるそうな。スクルー スクルージは、もしか自分もあんな五六十尋もあるような鉄 しかし何も見ることは出来なかった。

「それとも」と、幽霊は言葉をつづけた、「お前さんは自分でも

「何も上げるものはないよ」と、幽霊は答えた。「そんなものは

も停まってることも出来ない。どこにもぐずぐずしてることも また私は自分の云いたいことを話す訳にも行かない。後もうほ んの少しの時間しか許されていないのだからね。私は休むこと 私の魂は私どもの事務所より外へ出たことがなかっ

他の世界から来るのだ、エベネザア・スクルージよ。そして、他

の使者がもっと質の違った人間の許へもって行くのよ。それに

た。 出来ない。 ---よく聴いておいでよ---生きてる間、

きするような長たらしい旅程が私の前に横わっているんだよ。」 の帳場の狭い天地より一歩も出なかった。そして、今や飽き飽 に両手を突っ込むのが癖であった。幽霊の云ったことをつくづ スクルージが考え込む時には、

ければ、立ち上がりもしなかった。

く考え運らしながら、今も彼はそうしていた。が、眼も挙げな

いつでもズボンのポッケット

私の魂は私ども

謙遜で丁寧ではあったが、事務的な口調で訊いた。 「極くゆっくりとやって来たのでしょうね。」と、スクルージは

「ゆっくりだ!」と、幽霊は相手の言葉を繰り返した。

「死んで七年」と、スクルージは考えるように云った。「その間

始終歩き通しでしょう?」

「始終だとも」と、幽霊は云った。「休息もなければ、安心もな

い。絶え間なく後悔に苦しめられてるんだよ。」 「では、よほど速く歩いてるのですか」と、スクルージは訊い

「風の翼に乗ってよ」と、幽霊は答えた。

スクルージは云った。

「それじゃ七年間には随分沢山の道程が歩かれたでしょう」と、

幽霊は、それを聞いて、もう一度叫び声を挙げた。そして、区

ような、怖ろしい物音を真夜中に立てて、鏈をガチャガチャと がそれを安眠妨害として告発しても差支えなかろうと思われる

は叫んだ、「不死の人々のこの世のためにせらるる不断の努力の

それぞれその性に合った働きをしている基督教徒の魂が、いず 知らないとは。どんな境遇にあるにせよ、その小さな範囲内で、 幾時代も、この世の受け得る善のまだことごとく展開し切らな いうちに、 永劫の常闇の中に葬られざるを得ないと云うことを

れも自分に与えられた人の為に尽す力の広大なのに比べて、そ いとは。一生の機会を誤用したことに対しては、いくら永い間 の一生の余りに短きに過ぐるを嘆じていると云うことを知らな

後悔を続けてもそれを償うに足りないと云うことを知らないと

う人間であったのだ!」 「だがしかし、お前さんはいつも立派な事務家でしたがね」と、

は! しかも私はそう云う人間であった!

ああ、私はそう云

スクルージは言い淀みながら云った。彼は今や相手の言葉を我

が身に当て嵌めて考え出したのである。

「慈善と、恵みと、堪忍と、博愛と、すべてが私のすべき事

海洋中の水一滴に過ぎなかったのだ。」幽霊は、これが有らゆる 務だったよ。商売上の取引なぞは、私の職務という広大無辺な 叫んだ。「人類が私の事務だったよ。社会の安寧が私の事務だっ 「事務だって!」と、幽霊はまたもや其の手を揉み合せながら

に伸ばしてその鎖を持ち上げた。そして、それを再び床の上に

どさりと投げ出した。

自分の無益な悲嘆の源泉であるぞと云わんばかりに、腕を一杯

きかかっているのだからね。」 くれるような貧しい家は無かったのか。」 を仰いで見なかったろう! 世の中にあの星の光が私を導いて 「よく聞いていなよ!」と、幽霊は叫んだ。「私の時間はもう尽 「はい、聞いていますよ」と、 スクルージは、幽霊がこんな調子で話し続けて行くのを聞い 非常に落胆した。そして、無性にがたがたと慄え出した。

ジェコブ君、お願いですよ。」 どうかお手柔らかに願いたい!

スクルージは云った。「ですが、 余り言葉を飾らないで下さい。

「どう云う理由で私がこうしてお前さんの眼に見えるような恰

語ることを許されていない。姿は見せなかったが、私は幾日も

好でお前さんの前に現れるようになったかと云うことは、私は

幾日もお前さんの傍に坐っていたのだよ。」 それは聞いて決して気持の好い話ではなかった。スクルージ

は慄え上った。そして、前額から汗を拭き取った。

「そうして坐っているのも、私の難行苦行の中で決して易しい

うことを教えて上げるためにやって来たのだ。つまり私の手で

は云った。「どうも有難う!」

「お前さんはお見舞いを受けるよ」と、幽霊は言葉を次いだ、

調べて上げた機会と望みがあるんだね、エベネザー君よ。」

「お前さんはいつも私には親切な友達でしたよ」とスクルージ

前さんにはまだ私のような運命を免れる機会も望みもあると云 方ではないよ」と、幽霊は言葉を続けた。「私は今晩ここへ、お

「三人の幽霊に。」スクルージの顔はちょうど幽霊の顎が垂れ下 がったと同じ程度に垂れ下がった。

は云った。 コブ君。」と、彼はおどおどした声で訊いた。 「三人の幽霊の訪問を受けなけりゃ」と、幽霊は云った、「到底 「私は 「それがお前さんの云った機会と望みのことなんですか、ジェ 「そうだ。」 -私はいっそ来て頂きたくないので」と、スクルージ

私の踏んだ道を避けることは出来ないよ。明日一時の鐘が鳴っ

たら、第一の幽霊が来るからそう思っていなさい。」

んかな、ジェコブ君」と、スクルージは相手の気を引いて見た。

「皆一緒に来て頂いて、一時に済ましてしまう訳には行きませ

「その明くる晩の同じ時刻には、第二の幽霊が来るからそう思っ

うこの上私と会おうと思いなさるな。そして、二人の間にあっ 止んだときに、第三の幽霊が来るからそう思っていなさい。

ていなさい。またその次ぎの晩の十二時の最後の打ち音が鳴り

たことを貴方自身のために記憶えて置くように、好く気を附け

取って、以前と同じように、 なさい!」 再び眼を挙げて見た。見ると、この超自然の訪客は腕一杯にぐ チリと云う音で、スクルージもそれと知った。彼は思い切って その顎が繃帯で上下一緒に合わさった時に、その歯の立てたガ この言葉を云い終わった時、幽霊は卓子の上から例の繃帯を

頭のまわりにそれを捲きつけた。

るぐるとその鎖を捲きつけたまま、直立不動の姿勢で彼と向い

合って立っているのであった。

幽霊はスクルージの前からだんだんと後退りして行った。そ

ジに傍へ来いと手招ぎした、スクルージはその通りにした。二

人が互に二歩の距たりに立った時、マアレイの幽霊はその手を

挙げて、これより傍へ近づかないように注意した。スクルージ

は立停まった。これは相手の云うことを聴いて立ち停まったと

ある。

ように出て行った。

しげな哀歌に声を合せた。そして、物寂しい暗夜の中へうかぶ

連絡のない悲嘆と後悔の響きが、何とも云われないほど悲しげ と云うのは、幽霊が手を挙げた瞬間に、空中の雑然たる物音が、 云うよりも、むしろ吃驚して恐れて立ち停まったのであった。

自らを責めるような慟哭の声が彼の耳に聞えて来たからで 幽霊は一寸耳を澄まして聴いていた後で、自分もその悲

空中は、落着きのない急ぎ足で彼方此方をうろつき廻り、そ

いて行った。彼は外を眺め遣った。

スクルージは、自分の好奇心に前後を忘れて、窓の所まで随

そのどれもこれもがマアレイの幽霊と同じような鎖を身につけ して、歩きながらも呻吟している妖怪変化で満たされていた。

ていた、中に二三の者は(これは有罪会社の輩かも知れない)一

白い胴服を着て、踵に素晴らしく大きな鉄製の金庫を引きずっ 命中スクルージに親しく知られて居たものも沢山あった。彼は、 緒に繋がれていた。一として縛られていないのはなかった。

ている一人の年寄の幽霊とは生前随分懇意にしていたのであっ れた見すぼらしい女を助けてやることが出来ないと云うので、 その幽霊は、下の入口の踏段の上に見えている赤ん坊を連

痛々しげに泣き喚いていた。彼等全体の不幸は、明かに、彼等

彼等を包んでしまったのか、彼には何れとも分らなかった。し にその力を失ったと云う所にあるのであった。 れ等の生物が霧の中に消え去ったのか、それとも霧の方で

が人事に携わってそれを善くしようと望んでいて、しかも永久

かし彼等も、その幽霊の声々も共に消えてしまった。そして、

めた。 と二重に錠が卸してあった。閂にも異常はなかった。彼は「馬 夜は彼が家に歩いて帰った時と同じようにひっそりとなった。 スクルージは窓を閉めた。そして、幽霊の這入って来た戸を検 それは彼が自分の手で錠を卸して置いた通りに、ちゃん

鹿々々しい!」と云おうとしたが、 それともあの世を一寸垣間見たためか、それとも幽霊の不景気 そして、自分の受けた感動からか、それとも昼間の労れからか、

口に出し掛けたまま已めた。

な会話のためか、それともまた時間のおそいためか知らないが、

非常に休息の必要を感じていたので、着物も脱がないで、その まま寝床へ這入って、すぐにぐっすりと寝込んだ仕舞った。

第一の精霊

クリスマス・

彼

が非常に驚いたことには、

重い鐘は六つから七つと続けて

打った、七つから八つと続けて打った。そして、正確に十二ま

した。

十五分鐘を四たび打った。で、彼は時の鐘を聞こうと耳を澄ま 貫いて見定めようと骨を折っていた。その時近所の教会の鐘が かない位暗かった。

ても、

その室の不透明な壁と透明な窓との見分けがほとんど附

彼は鼬のようにきょろきょろした眼で闇を

スクルージが眼を覚ましたときには、

寝床から外を覗いて見

の中に氷柱が這入り込んだものに違いない。十二時とは ついた時には二時を過ぎていた。時計が狂っているのだ。機械 で続けて打って、そこでぴたりと止んだ。十二時! 彼が床に はこの途轍もない時計を訂正しようと、自分の時打ち懐中

そして停まった。 時計の弾条に手を触れた。その急速な小さな鼓動は十二打った、 の晩の夜更けまで眠っていたなんて、そんな事はある筈がない。 「何だって」と、スクルージは云った、「全一日寝過ごして、次 何か太陽に異変でも起って、これが午の十二時だと云う

筈もあるまいて!」

むを得ず寝間着の袖で霜を拭い落した。で、ほんの少し許り見

探り探り窓の所まで行った。ところが、何も見えないので、已

そうだとすれば大変なことなので、彼は寝床から這い出して、

あちらこちらと走り廻っている人々の物音なぞは少しもなかっ まだ非常に霧が深く、耐らないほど寒くて、大騒ぎをしながら

ることが出来た。彼がやっと見分けることの出来たのは、ただ

たと云うことであった。若し夜が白昼を追い払って、この世界

を占領したとすれば、そう云う物音は当然起っていた筈である。

これは非常な安心であった。何故なら、勘定すべき日というも

のがなくなったら、「この第一振出為替手形一覧後三日以内に、 エベネザー・スクルージ若しくはその指定人に支払うべし」云々

は、単に合衆国の担保に過ぎなくなったろうと思われるからで

考えた、繰り返し繰り返し考えたが、さっぱり訳が分らなかっ

スクルージはまた寝床に這入った。そして、それを考えた、

た。考えれば考えるほど、いよいよこんぐらかってしまった。

た揚句、 マアレイの幽霊は無性に彼を悩ました。彼はよくよく詮議し 強い弾機が放たれたように、再び元の位置に飛び返って、 それは全然夢であったと胸の中で定めるたんびに、心

考えまいとすればするほど、ますます考えざるを得なかった。

り直さるべきものとして同じ問題を持ち出した。 「夢であったか、それとも夢ではなかったのか」と、始めから遣 て横たわっていた。その時突然、鐘が一時を打った時には、最 鐘が更に十五分鐘を三たび鳴らすまで、スクルージはこうし

初のお見舞いを受けねばならぬことを幽霊の戒告して行ったこ

眠られないことは天国に行かれないと同様であることを想えば、 とを想 したまま横になっていようと決心した。ところで、彼がもはや い出した。彼はその時間が過ぎてしまうまで、眼を覚ま

これは恐らく彼の力の及ぶ限りでは一番賢い決心であったろう。

うととして、時計の音を聞き漏らしたに違いないと考えた位で その十五分は非常に長くて、彼は一度ならず、我知らずうと

あった。とうとうそれが彼の聞き耳を立てた耳へ不意に聞えて

A CHRISTMAS CAROL

クリスマス・

「ヂン、ドン!」

「もう後十五分」と、スクルージは云った。

た、「しかも何事もない!」

「いよいよそれだ!」と、スクルージは占めたとばかりに云っ

カロル

「ヂン、ドン!」 「三十分過ぎ!」

来た。

「ヂン、ドン!」

「十五分過ぎ!」とスクルージは数えながら云った。

「ヂン、ドン!」

が閃き渡って、寝床の帷幄が引き捲くられた。 彼の寝床の帷幄は、私は敢て断言するが、一つの手で側へ引

彼

空洞な、

は時の鐘が鳴らないうちにかく云った。が、その鐘は今や

陰鬱な一時を打った。たちまち室中に光

き寄せられた。足下の帷幄でも、背後の帷幄でもない、

顔が向

いていた方の帷幄なのだ。彼の寝床の帷幄は側へ引き寄せられ

。そして、スクルージは、飛び起きて半坐りになりながら、帷

ど私が今読者諸君に接近していると同じように密接して。そし 幄を引いたその人間ならぬ訪客と面と面を突き合せた。ちょう

私

クリスマス・

れない。(老人と云ってもただの老人ではない)、一種の超自然

に似てると云うよりは老人に似てると云った方が可いかも知

それは不思議な物の姿であった――子供のような。しかも子

は精神的には諸君のつい手近に立っているのである。

ような、そう云う老人に似ているのである。で、その幽霊の頸 行って、子供の躯幹にまで縮小された観を呈していると云った

的な媒介物を通じて見られるので、だんだん眼界から遠退いて

持っているように見えた。極めて繊細に造られたその脚も足も、 くて筋肉が張り切っていた。手も同様で、並々ならぬ把握力を 上肢と同じく露出であった。 のまわりや背中を下に垂れ下がっていた髪の毛は、年齢の所為 でもあるように白くなっていた。しかもその顔には一筋の皺も そして、その腰の周りには光沢のある帯を締めていたが、 皮膚は瑞々した盛りの色沢を持っていた。

その光沢は実に美しいものであった。

幽霊は純白の長衣を身に着けてい

腕は非常に長

夏の花でその着物を飾っていた。が、その幽霊の身のまわりで

の柊の一枝を持っていた。その冬らしい表徴とは妙に矛盾した、

幽霊は手に生々した緑色

一番不思議なものと云えば、その頭の頂辺からして明煌々たる

下に挟んで持っている大きな消灯器を帽子の代りに使用していいもなくその幽霊が、もっと不愉快な時々には、今はその腋の なかった。と云うのは、その帯の今ここがぴかりと光ったかと た時には、これですらそれの有する最も不思議な性質とは云え 理由であった。 とは云え、スクルージがだんだん落ち着いてその幽霊を見遣っ

想うと、次には他の所がぴかりと輝いたり、 と思う所が次の瞬間にはもう暗くなったりするに伴れて、

と、今度は一本脚になり、また二十本脚になり、また頭のない二 ように幽霊の姿それ自体も、今一本腕の化物になったかと思う

また今明るかった

同じ

瞭然した部分が始終揺れ動いていた。で、それ等の消えていくはのい 本脚になり、また胴体のない頭だけになると云うように、その

いるうちに、

輪廓一つ見えなかったものだ。そして、それを不思議だと思っ か」と、スクルージは訊ねた。 部分は濃い暗闇の中に溶け込んでしまって、その中に在っては に瞭然として鮮明な元の姿に。 「左様!」 「貴方があのお出での前触れのあった精霊でいらっしゃいます 幽霊は再び元の姿になるのであった、元のよう

その声は静かで優しかった。彼の側にこれほど近く寄ってい

るのではなく、ずっと触れてでもいるように、へんてこに低かっ

「何誰で、またどういう方でいらっしゃいますか」と、スクルージはた

「ずっと古い過去のですか」と、スクルージはその侏儒のよう 私は過去の聖降誕祭の幽霊だよ。」

な身丈恰好に眼を留めながら訊いた。

お前さんの過去だよ。」

たとい誰かが訊ねたとしても、恐らくスクルージはその理由

の精霊に帽子を被せて見たいものだと云う特別な望みを抱いた。

を語ることが出来なかったろう。が、彼はどう云うものか、

で、それを被るように相手に頼んだ。

らせて来たものだ。

与える光明を消そうと思うのか。俗衆の我欲がこの帽子を拵え

長の年月の間にずっと私を強いて無理に額眉深にそれを被

お前さんもその一人だが、それだけでもう

「何!」と幽霊は叫んだ、「お前さんはもう俗世界の手で、

私の

た自分の一生の中いつの時代にも故意に精霊を侮辱した覚えな スクルージは、決して腹を立てさせるつもりではなかった、ま

沢山じゃないかね。」

クリスマス えているのを見て取ったに違いない。と云うのは、すぐにこう ぞはないと、うやうやしげに弁解した。それから彼は思い切っ 云ったからである。 があったろうと考えずにはいられなかった。精霊は彼がそう考 しかし一晩邪魔されずに休息した方が、それにはもっと利き目 「お前さんの安寧のためにだよ」と、幽霊は云った。 スクルージはそれは大変に有難う御座いますと礼を述べた。 何用あってここへはやって来たのかと訊ねた。 お前さんの済度のためだよ。さあいいか!」

こう云いながら、

幽霊はその頑丈な手を差し伸べて、彼の腕

をそっと掴まえた。

「さあ立て! 一緒に歩くんだよ。」

役にも立たなかったろう。婦人の手のように優しくはあったが、 たところで、自分は僅かに上靴と寝間着と夜帽しか着けていな 寝床が温かで、寒暖計はずっと氷点以下に降っていると抗弁し その把握には抵抗すべからざるものがあった。彼は立ち上がっ いると争ったところで、そんな事はスクルージに取っては何の いのだと抗言って見たところで、また当時自分は風邪を引いて 天気と時刻とが徒歩の目的に適していないと云ったところで、

クリスマス

てた、「ですから落ちてしまいますよ。」

「私は生身の人間で御座います」と、スクルージは異議を申立

り着いて哀願した。

た。が、精霊が窓の方へ歩み寄るのを見て、彼はその上衣に縋

手を載せながら云った。「そうすれば、お前さんはこんな事位で 「そこへ一寸私の手を当てさせろ」と幽霊はスクルージの胸に

ない、もっと危険な場合にも支えて貰われるんだよ。」 こう云っているうちに、彼等は壁を 突き抜けて、左右に畠

冬の日であった。 消えてしまった。 なった。その痕跡すら見られなかった。暗闇も霧もそれと共に の広々とした田舎道に立った。倫敦の町はすっかり消えてなく 「これは驚いた!」と、スクルージは自分の周囲を見廻して、両 「それは地上に雪の積っている、晴れた、冷い、

手を固く握り合せながら云った。「私はここで生れたのだ。子供

軽くてほんの瞬間的のものではあったが、この老人の触覚には

霊は穏かに彼を見詰めていた。

精霊が優しく触ったのは、

の時にはここで育ったのだ!」

る様々な香気に気が附いた。そして、その香りの一つ一つが、

尚まざまざと残っているように思われた。彼は空中に漂ってい

長い長い間忘れられていた、様々な考えや、希望や、喜びや、心 配と結び着いていた。

「お前さんの唇は慄えているね」と、幽霊は云った。「それにお

前さんの頬の上のそれは何だね。」

スクルージは平生に似合わず声を吃らせながら、これは面瘡

だと呟いた。そして、どこへなりと連れて行って下さいと幽霊

「お前さんこの道を覚えているかね?」と、精霊は訊ねた。

「目隠をしても歩けますよ。」

「覚えていますとも!」と、スクルージは勢い込んで叫んだ、

「あんなに長い年月それを忘れていたと云うのは、どうも不思

に頼んだ。

議だね!」と、

幽霊は云った。「さあ行こうよ。」

柱も、

木も一々見覚えがあった。

遥か彼方に橋だの、教会だの、

曲り紆った

び合った。 車や荷馬車に乗っかっている他の子供達に声を掛けていた。 歩いて行くうちに、 河だののある小さな田舎町が見え出した。折柄二三頭の毛むく い出したほど、 て来るのが見えた。 .等の子供達は皆上機嫌で、 らの小馬が、その背に男の子達を乗せて、二人の方へ駆け で、 広い田野が一面に嬉しげな音楽で満たされた位 仕舞には清々しい冬の空気までそれを聞

その子供達は、百姓の手に馭された田舎馬

互にきゃっきゃっと声を立てて喚

いて笑

「これはただ昔あったものの影に過ぎないのだ」と、

幽霊は云っ

た。「だから彼等には私達のことは分らないよ。」

スクルージは一々彼等を見覚えていて、その名前を挙げた。ど 陽気な旅人どもは近づいて来た。で、彼等が近づいて来た時、

うして彼は彼等に会ったのをあんなに法外に悦んだのか。彼等

が通り過ぎてしまった時、

いたのか、

「友達に置いてけぼりにされた、独りぼっちの子がまだそこに

「学校はまだすっかり退けてはいないよ」と、幽霊は云った。

今まで聖降誕祭が何か役に立ったことがあるかい。

で何だ?

嬉しさが込み上げて来たか。一体スクルージに取って聖降誕祭

聖降誕祭お目出とうがちゃんちゃら可笑しいやい!

誕祭お目出とうと言い交わすのを聞いた時、

何だって彼の胸に

るとて、十字路や間道で別れるに際して、彼等がお互いに聖降

彼の心臓は躍り上ったのか。各自の家路に向って帰

何だって彼の冷やかな眼に涙が燦め

残っているよ。」

スクルージはその子を知っていると云った。そして、彼は啜

り泣きを始めた。

彼等はよく覚えている小路を取って、大通りを離れた。する

と、間もなく屋根の上に風信機を頂いた小さな円頂閣のある、そ

その円頂閣に鐘の下がっている、どす赤い煉瓦の館へ近

もあった。広々とした台所もほとんど使われないで、その塵は づいて行った。それは大きな家であったが、また零落した家で

湿って苔蒸していた、窓も毀れていた、門も立ち腐れになって

鶏はくっくっと鳴いて、厩舎の中を威張りくさって歩い 馬車入れ小舎にも物置小舎にも草が一面にはびこって

た。

陰気な見附けの廊下に這入って、幾つも開け放しになった 室内も同じように昔の堂々たる面影を留めてはいなかっ

げて見せた。 が た。で、スクルージは一つの腰掛に腰を下ろして、長く忘れて 腰掛けて、 たが、喰う物も何もないのと、どこか似通うところがあった。 は寒々として何もなかった、それがあまりに朝はやく起きて見 の家の背後にある戸口の所まで行った。その戸口は二人の押す 家の中に潜んでいる反響も、天井裏の二十日鼠がちゅうちゅ たありし昔の憐れな我が身を見て泣いた。 るのが、 ままに開いて、彼等の前に長い、何にもない、陰気な室を展 彼等は、幽霊とスクルージとは、見附けの廊下を横切って、そ 一人の寂しそうな少年が微温火の前で本を読んでい 層それをがらんがらんにして見せた。その一つに 木地のままの樅板の腰掛と机とが幾筋にも並んで

室の戸口から覗いて見ると、どの室にも碌な家具は置いてなく、

冷え切って、洞然としていた。空気は土臭い匂いがして、場所

クリスマス・ カロル 男が、 見る眼には吃驚するほどありありとかつはっきりとした一人の 0 なかった。 は たばたするのも、いや、煖炉の中で火の撥ねる音も、一として の溶けた樋口の滴りも、元気のない白楊の 葉の落ち尽した枝の 「何だって、アリ・ババじゃないか!」と、スクルージは我を忘 彼の姿を指さして見せた。不意に外国の衣裳を身に着けた、 精霊は彼の腕に手を掛けて、読書に夢中になっている若い頃 なかった、 クルージの胸に落ちて涙ぐませるような影響を与えないもの 聞える溜息も、がら空きの倉庫の扉の時々忘れたようにば その窓の外側に立った。 帯に斧を挟んで、薪を積んだ一疋の驢馬の手綱を取りな また彼の涙を一層惜し気もなく流させないものは

う鳴いて取組み合いをするのも、背後の小暗い庭にある半分氷

れて叫んだ。「正直なアリ・ババの老爺さんだよ。そうだ、そう

ある聖降誕祭の時節に、あそこにいるあ

とも。 た時、 の独りぼっちの子がたった一人ここに置いてけぼりにされてい

を穿いたまま、ダマスカスの門前に捨てて置かれたのは、 来たのだ。可哀そうな子だな! それからあのヴァレンタイン れから魔鬼のために逆様に立たせて置かれた帝王の馬丁は。 か云う名前の男だったな! も」と、スクルージは云った、「それからあの乱暴な弟のオルソ 始めてあの老爺さんがちょうどああ云う風をしてやって あれあれあすこへ皆で行くわ!

眠っているうちに股引

何と

うなぞとしたのだ!」

それが嬉しい!

彼奴がまた何の権利があって姫君の婿になろ

あ

あすこに頭を下にして立っている!

好い気味だな。

僕は

貴方にはあれが見えませんか。

な事に自分の真面目な所をすっかり曝け出しているのを聞いた 彼のいかにも嬉しそうな興奮した顔を見たりしようものな

スクルージが笑うような泣くような突拍子もない声で、こん

「あすこに鸚鵡がいる!」と、スクルージは叫んだ。「草色の 本当に倫敦市の商売仲間は吃驚したことであろう。

体躯に黄色い尻尾、頭の頂辺から萵苣の ようなものを生やし

て。

あすこに鸚鵡がいるよ。可哀そうなロビン・クルーソーと、

彼が小船で島を一周りして帰って来た時、その鸚鵡は喚びかけ

ビン・クルーソー?』クルーソーは夢を見ていたのだと思った

『可哀そうなロビン・クルーソー、どこへ行って来たの、ロ

に金曜日が行く。小さな入江を目がけて命からがら駆け出して『ワラマデ

そうじゃなかった。鸚鵡だった、御存じの通りに。

行く、しっかり! おーい! しっかり!」

変りようで以て、昔の自分を憐れみながら、「可哀そうな子だ

それから彼は、平生の性質とは丸で似も附かない急激な気の

な!」と云った。そして、再び泣いた。 「ああ、ああして遣りたかったな」と、スクルージは袖口で眼

を拭いてから、衣嚢に手を突込んで四辺を見廻わしながら呟い た。「だが。もう間に合わないよ。」

です。昨宵私の家の入口で聖降誕祭の頌歌を歌っていた子供が 「何でもないんです」と、スクルージは云った。「何でもないん 「一体どうしたと云うんだね?」

ありましたがね。何か遣れば可かったとこう思ったんですよ、 それだけの事です。」 幽霊は意味ありげに微笑した。そして、「さあ、もっと他の聖

降誕祭を見ようじゃないか」と云いながら、その手を振った。

彼ひとり残っていたと云うことだけは、彼にも分っていた。 降誕祭の休日をするとて家へ帰って行ったのに、ここでもまた 破片が落ちて来て、その代りに下地の木片が見えるようになっかけら くなった。そして、部屋は幾分暗く、かつ一層汚くなった。羽 りしていた。スクルージは幽霊の方を見遣った。そして、悲し その通りに起ったのだと云うことは、他の子供達が皆楽しい聖 それがまったくその通りであったと云うことは、何事もかつて に分らないと同様に、スクルージにも分っていなかった、ただ 目板は縮み上がって、窓には亀裂が入った。天井からは漆喰の 彼は今や読書していなかった、落胆したように往ったり来た しかしどうしてこう云う事になったかと云うことは、読者

こう云う言葉と共に、昔のスクルージ自身の姿はずっと大き

げに頭を振りながら、心配そうに戸口の方をじろりと見遣った。

ん、兄さん」と喚び掛けた。 両腕を捲き附けて、幾度も幾度も相手に接吻しながら、「兄さ が箭を射るように飛び込んで来た。そして、彼の首のまわりに

その戸が開いた。そして、その少年よりもずっと年下の小娘

の子は云った。「一緒に自宅へ行くのよ、自宅へ!」自宅へ!」 けな手を叩いたり、身体を二つに折って笑ったりしながら、そ 「自宅へだって? ファンよ」と、少年は問い返した。 「ねえ兄さん、私兄さんのお迎いに来たのよ」と、その小っぽ

善くして下さるので、本当にもう自宅は天国のようよ! この間 に自宅へ、永久に自宅へよ。阿父さんもこれまでよりはずっと 「そうよ!」と、その子ははしゃぎ切って云った。「帰りっ切り

たから、私も気が強くなって、もう一度、兄さんが自宅へ帰っ

の晩寝ようと思ったら、それはそれは優しく物を言って下すっ

るように私を馬車へ乗せて下さったのよ。で、兄さんもいよい た、「そして、もう二度とはここへ帰って来ないのよ。でも、そ よ大人になるのね!」と、子供は眼を大きく見開きながら云っ の前に私達は聖降誕祭中一緒に居るのね。そして、世界中で一 て来てもいいかって訊いて見たのよ。すると、阿父さんは、あ 帰って来るんだともだって。そして、兄さんのお迎いに来

あまり小さかったので、また笑って爪先で立ち上りながら、やっ 番面白い聖降誕祭をするのね。」 「お前はもうすっかり大人だね、ファン!」と、少年は叫んだ。 彼女は手を打って笑った。そして、彼の頭に触ろうとしたが、

女に随って出て行った。

に彼を戸口の方へ引っ張って行った。で、彼は得たり賢しと彼 と彼を抱擁した。それから彼女はいかにも子供らしく一生懸命

ジを睨め附けた。そして、彼と握手をすることに依ってすっか り彼を慄え上がらせてしまった。それから彼は少年とその妹と

れた。

と怖しい声で呶鳴った。そして、その広間のうちに校長自身が現

校長は見るも怖ろしいような謙譲の態度で少年スクルー

誰かが玄関で「スクルージさんの鞄を下ろして来い、そら!」

校長はへんてこに軽い葡萄酒の容器と、へんてこに重い菓子の 古井戸と云っても可いような寒々しい最上の客間へ連れ込んだ。 を、それこそ本当にかつてこの世に存在した最も古井戸らしい そこには壁に地面が掛けてあり、窓には天体儀と地球儀とが置 一塊片とを持ち出して、若い人々にそれ等の御馳走を一人分ず いてあったが、両方とも寒さで蝋のようになっていた。ここで

を瘠せこけた下男に持たせてやった。ところが、馭者は、それ

つ分けて遣った。と同時に馭者のところへも『何物か』の一杯

で、子供達はただもう心から悦んで校長に暇を告げた。そして、 の革鞄はその時分にはもう馬車の頂辺に括り着けられていたの もう戴かない方が結構でと答えたものだ。少年スクルージ

は有難う御座いますが、この前戴いたのと同じ口のお酒でした

去った。廻転のはやい車輪は、常磐木の黒ずんだ葉から水烟の た」と、幽霊は云った、「だが、心は大きな児だよ!」 ように霜だの雪だのを蹴散らして行った。 それに乗り込んで、菜園の中の曲路を笑いさざめきながら駆り 「いつも脾弱な、一と吹きの風にも萎んでしまいそうな児だっ 「左様でした」と、スクルージは叫んだ、「仰しゃる通りです。

私はそれを否認しようとは思いません、精霊どの。いやもう決

「彼女は一人前になって死んだ」と、幽霊は云った、「そして、

子供達もあったと思うがね。」 「一人です」と、スクルージは答えた。

影法師のような荷車や馬車が道を争って、あらゆる実際の都市 うな往来の人が頻りに往ったり来たりしていた。そこにはまた ある都会の賑やかな大通りに立っていた。そこには影法師のよ す」と答えた。 「いかにも、」と、幽霊は云った。「お前さんの甥だ!」 彼等はその瞬間学校を後にして出て来たばかりなのに、今は スクルージは心中不安げに見えた。そして、

簡単に「そうで

クリスマス・ の喧 祭の季節であることは、 騒と雑閙とがあった。

幽霊はある商店の入口に立ち停まった。そして、スクルージ

街路には灯火が点いていた。

明白に分っていた。ただし夕方であっ

店の飾り附けで、

ここもまた聖降誕

こで丁稚奉公をして居たことがあるんですよ。」

彼等は中に這入って行った。ウエルス人の鬘(註、老人の被

自分の身丈が高かろうものなら、きっと天井に頭を打ち附けた る毛糸で編んだ帽子のこと。)を被った老紳士が、今二インチも

ろうと思われるような、丈の高い書机の向うに腰掛けているの

を一目見ると、スクルージは非常に興奮して叫んだ。 「まあ、これは老フェッジウィッグじゃないか! ああ!

ジウィッグがまた生き返った!」

た胴服をきちんと直した。靴の先から頭の頂辺まで、身体中揺 その時計は七時を指していた。彼は両手を擦った。たぶたぶし

老フェッジウィッグは鉄筆を下に置いて、時計を見上げた。

フェッ

肥った、愉快そうな声で呼び立てた―

振って笑った。そして、気持の好さそうな、滑らかな、巾のあ

「おい、ほら! エベネザア! ディック!」

今や立派な若者になっていたスクルージの前身は、仲間の丁

稚と一緒に、てきぱきと這入って来た。

「ディック・ウイルキンスです、確に!」と、スクルージは幽

霊に向って云った。 「なるほどそうだ。 あそこに居るわい。 彼奴 は私に大層懐いていたっけ、可哀そうに! やれ、やれ!」

う仕事なぞしないのだ。聖降誕祭だよ、ディック!

聖降誕祭

「おい、子供達よ」と、フェッジウィッグは云った。「今夜はも

ジウィッグは両手を一つぴしゃりと鳴らしながら叫んだ、「とっ だよ、エベネザア! さあ雨戸を閉めてしまえ」と、老フェッ

とと仕舞うんだぞ!」

しても信じないであろう。二人は戸板を持って往来へ突進した

読者はこれ等二人の若者がどんなにそれを遣っ附けたかを話

者が十二まで数え切らないうちに、競馬の馬のように息を切ら 六――戸板を嵌めて目釘で留めた――七、八、九――そして、読 ――一、二、三――その戸板を嵌めべき所へ嵌めた――四、五、

高い書机から跳ね降りながら叫んだ。「片附けろよ、子供達、こ しながら、家の中へ戻って来た。 「さあ来た!」と、老フェッジウィッグは吃驚するほど軽快に

出せ、エベネザア!」 こに沢山の空地を作るんだよ。さあ来た、ディック! 元気を

けようとして片附ける事の出来ないものもなかった。一分間で るんだから、彼等が片附けようとしないものもなければ、片附

片附けろだって!

何しろ老フェッジウィッグが見張ってい

てしまった。床は掃いて水を打たれた、洋灯は心を剪られた、 公的生活から解雇されたように、ことごとく包んで片附けられ

出来てしまった。動かすことの出来るものは、ちょうど永久に

薪は煖炉の上に積み上げられた。こうして問屋の店は、冬の夜

に誰しもかくあれかしと望むような、小ぢんまりした、温い、乾 いた明るい舞踏室と変った。

患者が五十人も集ったように、げえげえ云う音を立てて調子を あの高い書机の所へ上って、それを奏楽所にした。そして、胃病 人の提琴手が手に楽譜帳を持って這入って来た。そして、

好い女が這入って来た。三人のにこにこした可愛らしいフェッ 合せた。フェッジウィッグ夫人すなわちでぶでぶ肥った愛嬌の

る六人の若者が続いて這入って来た。この店に使われている若

ジウィッグの娘が這入って来た。その三人に心を悩まされてい

這入って来た。一人また一人と、追い追いに衆皆が這入って来 うなりしてことごと皆這入って来た。たちまち彼等は二十組に 小僧も、一軒置いて隣家の、これも女主人に耳を引っ張られた 別の親友だと云う牛乳配達と一緒に這入って来た。道の向う側 れば、引張って這入って来る者もあった。とにかくどうなりこ 不器用に這入って来る者もあった。押して這入って来る者もあ 入って来る者もあった。すんなりと這入って来る者もあれば、 と云うことが後で分かった女中の背後に隠れるようにしながら から来たと云う、主人から碌すっぽ喰べさせて貰わないらしい 中には極り悪そうに這入って来る者もあれば、威張って這

きの職工と一緒に這入って来た。料理番の女はその兄さんの特

い男や女もことごとく這入って来た。女中はその従弟の麺麭焼

分れた。室を半分廻って、また他の道を戻って来る、室の真中を

う始末だ。こんな結果になった時、老フェッジウィッグは舞踏 や否や、再び横へ逸れて行く。終いには先頭の組ばかりになっ 彼等を助ける筈のしんがりの組が一つも後に続かないと云

階を作ってぐるぐる廻って行く。前の先頭の組はいつも間違っ 降りて行くかと思えばまた上って来る、仲の好い組合せの幾段

た所でぐるりと曲って行く。

新たな先頭の組もそこへ到着する

ら顔 麦酒の大洋盃の中へ真赧になった顔を突込んだ。が、その盃か と叫んだ。すると、提琴手は、特にそのために用意された、黒 を止めさせるように両手を叩きながら、大きな声で「上出来!」 まだ踊子が一人も出てないのも構わず、直ぐさままたやり始め を出すと、休んでなぞ居られるものかと云わんばかりに、

て家へ連れ帰られたので、

ものだ。ちょうどもう一人の提琴手が疲れ果てて戸板に載せ

自分はその提琴手をすっかり負かし

調合葡萄酒

した真新しい人間でもあるように。

てしまうか、さもなければ自分が斃れるまでやり抜こうと決心

後で、 自分のやるべきことを心得ていると云う手合ですよ!)「サー・ 者や私なぞがこうしろああしろと命ずるまでもなく、ちゃんと 酒が 沢山に出た。が、当夜第一の喚び物は焼肉や煮物の出た きな一片の冷えた煮物が出た。それから肉饅頭が出た、また麦 ロージャー・ド・カヴァリー」(註、古風な田舎踊の名、当時非 提琴手が(巧者な奴ですよ、まあ聴いて下さい!---

も出て来る。)を弾き始めた時に出たのであった。その老フェッ 常に流行したものらしく、メレディスの「エゴイスト」の中に

が後に続いた。いずれも隅には置けない手合ばかりだ。 に対して、先頭の組を勤めようと云うのだ。二十三四組の踊手 でた。しかも、二人に取っては誂え向きの随分骨の折れる難曲

とばかりしていて、歩くなぞと云うことは夢にも考えていない

踊ろう

四倍あっても――

達なのだ。

が、彼等の人数が二倍あっても――おお、

老フェッジウィッグは立派に彼等の対手になれたろう、

ジウィッグ夫人にしてもその通りだ。彼女はと云えば、

の腓からは本当に火花が出るように思われた。その腓は踊のぱいは縁

えて貰いたい、私はそれを使って見せよう。フェッジウィッグ

かった。これでもまだ讃め足りないなら、もっと好い言葉を教

いう言葉のどういう意味から云っても、彼の相手たるに応わし

何人にも出来なかったに相違ない。老フェッジウィッグ夫

あらゆる部分において月のように光っていた。ある一定の時に

おいて、次の瞬間にその 腓 がどうなるか予言せよと云われて

を相手に懸けたまま、お叩頭をしたり、会釈をしたり、手を取 婦が踊の全部をやり通した時――進んだり退いたり、両方の手

そして、再びその位置に返ったりして、踊の全部をやり通した に再び足で立った。 たかと思われたほど巧者に飛び上った。そして、蹌踉きもせず り合ってその下をくぐったり、男の腕の下を女がくぐったり、 フェッジウィッグは「飛び上った」、――彼は足で瞬きをし

く男が出て行けば男、女が出て行けば女と云うように、一人々々 ジウィッグ夫妻は入口の両側に一人ずつ陣取って、誰彼の差別な

時計が十一時を打った時、この内輪の舞踏会は解散した。フェッ

挨拶した。で、こうして歓声が消え去ってしまった。そして、 総ての人が退散してしまった時、彼等はその二人にも同じ様に

握手を交して、聖降誕祭の祝儀を述べた。二人の丁稚を除いて、

二人の少年は自分達の寝床に残された。寝床は店の奥の帳場の

下にあった。

ていた。彼の心と魂とはその光景の中に入り込んで、自分の前 の間中ずっと、スクルージは本性を失った人のように振舞っ

身と一緒になっていた。彼は何も彼もその通りだと確信した、

燃え立たせながら、じっと自分を見詰めているのに気が附いた。

嬉しそうな顔が見えなくなった時、始めて彼は幽霊のことを想

い出した、幽霊が、その間ずっと頭上の光を非常にあかあかと

何も彼も想い出した、何も彼も享楽した。そして、何とも云わ

ない不思議な心の動乱を経験した。彼の前身とディックとの

図をした、二人は心底を吐露してフェッジウィッグを褒め立て 「些細ですって!」と、スクルージは問い返した。 精霊は二人の丁稚の云ってることに耳を傾けろと手真似で合

んなに有難がらせるのは。」

「些細な事だね」と、幽霊は云った、「あんな馬鹿な奴どもをあ

をほんの数ポンド費やしたばかりだ、高々三ポンドか四ポンド ているのであった。で、彼がそうした時、幽霊は云った。 「だってなあ! そうじゃないか。あの男はお前達人間の金子

だろうね。それが、これほど讃められるだけの金額かね。」 に激せられて、彼の後身ではない、前身が饒舌ってでもいるよ 「そんな事じゃありませんよ」と、スクルージは、相手の言葉

じゃありませんよ。あの人は私どもを幸福にもまた不幸にもす うに、我を忘れて饒舌った。「精霊どの、そんな事を云ってるん

る、楽しみにも、また苦しい労役にもする力を持っています。

る力を持っています。私どもの務めを軽くも、また重荷にもす

まああの人の力が言葉とか顔附きとかいうものに存しているに

うな、極く些細な詰まらないものの中に存しているにもせよで す、それがどうしたと云うのです? あの人の与える幸福は、そ れがために一身代を費やしたほど大したものなのですよ。」 もせよです、すなわち〆めることも勘定することも出来ないよ 彼は精霊がちらと此方を見たような気がして、口を噤んだ。

「なに、別段何でもありませんよ」と、スクルージは云った。 「どうしたのだ?」と、幽霊は訊ねた。

一語か二語云ってやることが出来たらとそう思ったので、それ 「いえ」と、スクルージは云った。「いえ、私の番頭に今一寸

「でも、何かあったように思うがね」と、幽霊は押して云った。

ませた。そして、スクルージと幽霊とは再び並んで戸外に立っ 彼がこの希望を口に出した時に、彼の前身は洋灯の心を引っ込

だけですよ。」

「私の時間はだんだん短くなる」と、

精霊は云った。「さあ急い

ていた。

だ!

この言葉はスクルージに話し掛けられたのでもなければ、

た彼の眼に見える誰に云われたのでもなかった。が、

たちまち

その効果を生じた。と云うのは、スクルージは再び彼自身を見

たのである。彼は今度は前よりも年を取っていた。

クリスマス・

の男であった。彼の顔には、まだ近年のような、

厳い硬ばった 壮年の盛り

.相は見えなかったが、浮世の気苦労と貪欲の徴候は既にもう

現われ掛けていた。その眼には、一生懸命な、

貪欲な、

落ち着

情について語ると共に、だんだん成長するその木(欲情の木)の きのない動きがあった。そして、それは彼の心に根を張った欲

影がやがて落ちそうな場所を示していた。

ら発する光の中にきらついていた。 ていた。その娘の眼には涙が宿って、過去の聖降誕祭の幽霊か 「それは何でもないことですわ」と、彼女は静かに云った。 は独りではなくて、喪服を着けた美しい娘の側に腰を掛け

私に取って代ったのですもの。これから先それが、若し私が傍 方に取っちゃ本当に何でもないことですわ。他の可愛いものが

嘆く理由はありませんわね。」

たりしてくれることが出来れば、私がどうのこうのと云って たらして上げようとしていた通りに、貴方を励ましたり慰

「どんな可愛いものがお前に取って代ったのかね」と、

彼はそ

れに答えて訊いた。 「金色のもの。」

優しく答えた。「貴方の他の希望は、そう云う世間のさもしい非 とする者ほど世間から手厳しくやっ附けられるものも他にない ど世間が辛く当たるものは他にない。それでいて金子を作ろう 「貴方はあまり世間と云うものを怖がり過ぎますよ」と、彼女は 「これが世間の公平な取扱いだよ」と、彼は云った。「貧乏ほ

皆呑み込まれてしまったんですね。私は貴方のもっと高尚な向 難を受ける恐れのない身になろうと云う希望の中に、ことごと 上心が一つずつ凋落して行って、到頭終いに利得と云う一番主

うじゃありませんか。」

要な情熱が貴方の心を占領してしまうのを見て来ましたよ。そ

私がそれだけ悧巧になったとして、それがどうだと云うのだ?

「それがどうしたと云うのだ?」と、彼は云い返した。「仮に

お前に対しては変っていないのだよ。」

彼女は頭を振った。

CHRISTMAS CAROL

「変っているとでも云うのかね。」

「私達二人の約束はもう古いものです。二人とも貧乏で、し

も二人が辛抱して稼いで、何日か二人の世間的運命を開拓する

日の来るまでは、それに満足していた時分に、その約束は出来

たものですよ。貴方は変りました。その約束をした時分は、

方は全然別の人でしたよ。」

クリスマス・

「私は子供だったのだ」と、彼はじれったそうに云った。

「貴方自身のお心持に聞いて御覧になっても、以前の貴方が今

の貴方でないことはお分りになりますわ」と、

彼女はそれに応

うだけで、もう十分で御座います。」 そして、その結果貴方との縁を切って上げることが出来ると云 たどんなに胆に徹えるほどこの事を考えて来たか、それはもう 云いますまい。私もこの事については考えに考えて来ました。 「私がこれまで一度でも破約を求めたことでもあるのか。」

「じゃ、何で求めたのだ?」 「口ではね。いいえ、そりゃありませんわ。」

私の愛情をいくらかでも価値あるもの、値打ちのあるものにし

の大きな目的として全然違った希望でです。貴方の眼から見て 「変った性貰で、変った心持で、全然違った生活の雰囲気で、そ

うとなさいますか。ああ、そんな事はとてもない!」 遣りながら云った、「貴方は今私を探し出して、私の手を求めよ たとしたら」と、少女は穏やかに、しかしじっくりと相手を見 ていた一切のものでです。この約束が二人の間にかつてなかっ 彼はこの推測の至当なのに、我にもあらず、屈服するように

と、彼女は答えた。「それはもう神様が御存じです! 私がこう な風に思っては居ないのだよ。」 見えた。が、強いてその感情を抑えながら云った。「お前はそん 「私も出来ることなら、そんな風に考えたくはないんですわ」

云うことを知ってるんですよ。まあ今日にしろ、明日にしろ、 く、かつ抵抗すべからざるものであるか、あるに違いないかと 云ったような真相を知った時には、(同時に)それがどんなに強

また昨日にしても、貴方が仮りに自由の身におなんなすったと

して、持参金のない娘を貴方がお選びになるなぞと云うことが、

私に信じられましょうか――その女と差向いで話しをなさる時 何も彼も欲得ずくで測って見ようと云う貴方がさ。そ

れとも、一時の気紛れから貴方がその唯一の嚮導の主義に背い

悔んだりなさるに違いないのを、私を知らないでしょうか。私 はちゃんと知っています。そして、貴方との縁を切って上げま

てその女をお選びになったところで、後ではきっと後悔したり

思うと、何だか本当にそうあって欲しいような気もしますがね。

「貴方にもこれは多少の苦痛かも知れない――これまでの事を

彼は何か云おうとした。が、彼女は相手に顔をそむけたまま

それはもう心から喜んで、昔の貴方に対する愛のために

再び言葉を続けた。

しかしそれもほんの僅かの間ですよ。僅かの間経てば、貴方は

棄しておしまいになるでしょうよ。まああんな夢から覚めて好 かったと云うように思ってね。どうかまあ貴方のお選びになっ

た生活で幸福に暮して下さいませ!」

彼女は男の前を去った。こうして、二人は別れてしまった。

すな! 「精霊どの!」と、スクルージは云った、「もう見せて下さいま

苦しめるのが面白いのですか。」

自宅へ連れて行って下さいませ。どうして貴方は私を

もう見たくありません。もう見せないで下さい!

が、毫も容赦のない幽霊は両腕の中に彼を羽翼締めにして、

「もう沢山です!」と、スクルージは叫んだ。「もう沢山です。

「もう一つ幻影を見せて上げるのだ!」と、幽霊は叫んだ。

綺麗でもない は別の光景でもあれば別の場所でもあった。

無理矢理に次に起ったことを観察させた。

が、

住心地よく出来た部屋であった。冬の

大層広くも

その娘は、

煖炉 の傍に一人の美しい若い娘が腰掛けていた。

分

の娘の向い側に、

一今では身綺麗な内儀になって腰掛けている

スクルージも同一人だと信じ切っていた位

彼女を見るまでは、

前

クリスマス・

か

れたる」

と題する短詩。)の羊の群とは違って、四十人の子供

であった。 な

あの有名な詩中

往、

ウォーヅウォースの

「弥生に書

うに活動するのだから溜まらない。

従ってその結果は信じられ 各一人の子供が四十人のよ

一人のように振舞うのではなく、

カロル

0

物音は申分のない騒々しさであった。と云うのは、

心に落着き

部屋の

单 0

の場面に出て来たあの少女とよく似ていた。

いスクルージには数え切れないほど大勢の子供がいたから

それは残酷に剥ぎ取られてしまった。私もあの山賊の一人にな なくその遊戯に加わったが、たちまち若い山賊どもに、

ながら、それを見て非常に喜んでいた。そして、娘の方は間も は見えない。それどころか、母親と娘とはきゃっきゃっと笑い ないほどの賑やかさであった。が、誰もそれを気にするように

それは

だ毛をむしゃくしゃにしたり、ぐんぐん引き解いたりはしない じて断じて。世界中の富を呉れると云っても、あの綺麗に編ん やるよ。とは云え、 ることが出来たら、どんな物でも呉れてやるね、きっと呉れて 私なら決してあんなに乱暴はしないね、断

積りだね。 たとい自分の生命を救うためだと云っても、私はそれを無理に

雛っ子連がやったように彼女の腰に抱き着くなんてことは、私

う奪くるようなことはしないね。冗談にも彼等、大胆な若い

それからあの貴重な小さい靴だが、神も照覧あれ!

に

は到底出来ないことだ。そんな事をすれば、

私はその罰とし

延びないものと予期しなければならない。 の周りに私の腕が根を生やしてしまって、もう再び真直に 私は堪らなく彼女の唇に触れたかったのだ。その唇を開

然も、

実際を白状す

A CHRISTMAS CAROL ると、

クリスマス・

価値を知っているほどの大人でありたかったのだ。

のもっとも重大な子供の特権を有しながら、

るその髪の毛を。一口に云えば、私は、

まあ白状するがね、こ

しかもその特権の

ち突貫がそれに続いて起って、彼女はにこにこ笑いながら、滅

ところが、今や入口の扉を叩く音が聞えた。すると、

のだ。

きたかったのだ。髪の毛を解いてゆるく波打たせて見たかった

その一インチでも価に積もれないほど貴重な記念品にな

がちの眼と睫毛を見詰めながら、しかも顔を赧らめさせずに置

せるために、彼女に言葉を懸けて見たかったのだ。その伏眼

ながら、その衣嚢に手を突き込んだり、茶色の紙包みを引奪っながら、 到、そして、何の防禦用意もない担夫に向って一斉に突撃が試み 物を背負った男を伴れて戻って来たのである。次には叫喚と殺 茶々々に着物を引き剥がされたまま、顔を火照らした騒々しい 入口の方へ引き摺られて行った。父親は、聖降誕祭の玩具や贈 群れの真中に挟まれて、やっと父親の出迎いに間に合うように、 それから椅子を梯子にして、その男の体躯に這い上り

たり、 包みが拡げられる度に、驚嘆と喜悦の叫声でそれが迎えられた。 をぽんぽん叩いたり、抑え切れぬ愛情で足を蹴ったりが続く! 赤ん坊が人形のフライ鍋を口に入れようとしているところを捕 襟飾りに獅噛み着いたり、頸の周りに抱き着いたり、背中

じゃったらしい、どうもそれに違いないのだと云うような、怖 えただの、木皿に糊づけになっていた玩具の七面鳥を呑み込ん

ろしい披露! ところが、これは空騒ぎに過ぎなかったと分っ

分の炉辺に腰を卸した時、スクルージは前よりも一層注意して 自分の方へ凭れ掛けさせながら、その娘やその母親と一緒に自 だん子供達とその感動とが客間を出て、長い間かかって一段ず 末の望みも多い娘が、自分を父と呼んで、己れの一生のやつれ 見守っていた。そして、ちょうどこの娘と同じように優雅で行 に這入ると、そのまま鎮まったとさえ云えば、沢山である。 そして、今やこの家の主人公が、さも甘ったれるように娘を 階子段をやっと家の最上階まで上って行って、そこで寝床

想

果てた冬の時代に春の時候をもたらしてくれたかも知れないと

い遣った時、彼の視覚は本当にぼんやりと霑んで来た。

「今日の午後、 「ベルや」と、良人は微笑して妻の方へ振り向きながら云った。

女は一息に附け加えた。「スクルージさんでしょう。」 よ」と、良人が笑った時に自分も一緒になって笑いながら、彼 「そのスクルージさんだよ。私はあの人の事務所の窓の前を通っ 「そんな事中てられるものですか。いえなに、もう分りました 「中てて御覧。」 「誰ですか。」 お前の昔馴染に出会ったよ。」

燭が点火してあったものだから、どうもあの人を見ない訳に行 たのだ。ところで、その窓が閉め切ってなくって、室の中に蝋

界中に全くの一人ぼっちで、私はきっとそうだと思うね。」

を聞いたがね。その室にあの人は一人で腰掛けていたよ

かなかったのさ。あの人の組合員は病気で死にそうだと云う話

「私にはもう見て居られません!」 見せたいろんな人の顔が妙な工合にちらちらとそこに現われて があの通りだからと云って、私を咎めては不可ないよ。」 「どうか他の所へ連れて行って下さい。」 こまでも幽霊と揉み合った。 お前さんに云って置いたじゃないか」と、幽霊は云った。「あれ いるような顔をして、じっと自分を見詰めているのを見て、ど 「どこかへ連れて行って下さい!」と、スクルージは叫んだ。 「これ等のものがこれまであった事柄の影法師だとは、私から 「貴方もどこかへ行って下さい! 「精霊どの!」と、スクルージは途切れ途切れの声で云った。 彼は幽霊の方へ振り向いた。そして、幽霊が、それまで彼に 私を連れ帰って下さい。も

う二度と私の所へ出て下さるな!」

クリスマス・ カロル A CHRISTMAS CAROL 身の力を籠めてそれを抑え附けていたけれども、 抗 ら地面 それを幽霊の頭の上に圧し附けた。 の全身を消化器の中に包まれてしまった。 彼は自分の身が疲れ果てて、とても我慢し切れない睡魔に圧 [来なかった。 は幽霊の頭の光が高く煌々と燃え立っているのを見た。 はしないのに、 霊はその下にへちゃへちゃと倒れた。 幽霊の自分の上に及ぼす勢力とその光とを朧げながら結び の上に一面の洪水となって流れ出すその光を隠すことが そ の消化器の帽を引っ奪って、 これが争闘と称ばれ得るものなれば 敵手がいくら努力してもびくとも動じないと

いきなり飛びかかって

が、スクルージは全

なおその下か

その結果、

精霊はそ

の争闘の間に――幽霊の方では少しも目に見えるような抵

――スクル

そし

ぐっすり寝込んでしまった。

倒されているのを意識していた。それだけなら可いが、なおそ

の帽子に最後の一と拈りを呉れた。それと同時に彼の手が緩ん

そして、ようよう寝床の中へよろけ込むか込まないうちに、

の上に自分の寝室の中に寝ていることも意識していた。

彼はそ

カロル

議を開こうと云う特別の目的のためには、随分際どい時に正気

ジェコブ・マアレイの媒介に依って派遣された第二の使者と会

段報告されんでも鐘がまた一時を打つところであるのを悟った。

頭を明瞭させようと床の上に起き直りながら、スクルージは別

素敵もない大きな鼾を掻いている最中に不図眼を覚まして、

第二の精霊

すと、どうも気味悪い寒さを背中に覚えたので、彼は自分の手 帷幄を引き寄せて這入って来るだろうかと、それが気になり出 でそれ等の窓掛を残らず側へ片寄せた。それからまた横になっ

に返ったものだと、彼は心の中で思った。が、今度の幽霊はどの

て、鋭い眼を寝台の周囲に放ちながら、じっと見張っていた。

と云うのは、彼も今度は精霊が出現するその瞬間に、こちらか

するようになっては耐らないと思ったからである。 ら戦いを挑んでやろうと思ったからで、不意を打たれて、戦々 如才がないと云うことと、常にぼんやりしていないと云うこ

とを自慢にしている、磊落なこせつかない質の紳士と云うものとを自慢にしている、磊落なこ、、、、、質

自分の能力の範囲の広大なことを表現するものである。なるほ

何でも覚悟していると云うようなことを云って、冒険に対する は、『字か素か』と云うような子供の遊戯から殺人罪に到るまで

スクルージのためにこれほど大胆不敵な真似は敢てしない

この両極端の間には、随分広大で包括的な問題の範囲があ

悟をしていたことを、赤ん坊と犀との間なら何が出て来てもそ 私は、 彼が不思議な出現物の可なり広い範囲に対して覚

諸君に向って要求することを意とするものではない んなに彼を驚かせなかったろうと云うことを信じて貰いたいと、

従って、鐘が一時を打って、何の姿も現われなかった時には、恐 ろしい戦慄の発作に襲われた。五分、十分、十五分と経っても、 たようなものの、無に対しては少しも覚悟が出来ていなかった。 ところで、スクルージはまず何物に対しても心構えはしてい

た時に、その寝台の上を流れ出したものである。そして、それ

何一つ出て来ない。その間彼は寝台の上に、

時計が一時を告げ 燃え立つような赤

どうしようとしているのか、さっぱり見当を附けることが出来

がただの光であって、しかもそれが何を意味しているか、何を

どう云う風にせねばならぬかと云うことを知って、またきっと ある実例に陥っているのじゃあるまいかと、怖ろしくもあった。 者ではない。当事者以外の者であるからである。 それを実行するであろうところのものは、常に難局の中にある に考え附いたことなのだ。と云うのはこういう難局に当っては それと知るだけの慰藉さえも持たないで、自然燃焼の興味 最後に彼も考え出した――それは読者や著者の私なら最初

最後に彼もこの怪しい光の本体と秘密とは隣室にあるの

じゃないか、更に好くその跡を辿って見ると、どうもその光は

---で、私は

上靴を穿いたまま戸口の方へ足を引き摺りながら歩み寄った。 生々した緑葉が垂れ下がって、純然たる森のように見えた。そ 名を喚んで、彼に中に這入れと命じた。彼はそれに従った。 考えがすっかり頭の中を占領すると、彼はそっと起き上がって、 の到るところに、きらきらとした赤い果実が露のように燦めい が、それが驚くべき変化を来していた。四方の壁にも天井にも それは自分の部屋であった。それに毛頭疑いはない。 スクルージの手が錠にかかったその刹那、耳慣れぬ声が彼の

そこから射して来るようだからと云うことを考え附いた。この

さながら無数の小形の鏡が散らかしてあるように見えた。スク ていた。柊や寄生木や蔦のぱりぱりする葉が光を照り返して、 ルージの時代にも、マアレイの時代にも、また幾十年と云う過ぎ

去った冬季の間にも、この化石したような冴えない煖炉がついぞ

え立つ松明を持っていたが、スクルージが扉の後から覗くよう 座を形造るように、床の上に積み上げられていた。この長椅子 などが各自の美味しそうな湯気を部屋中に漲らして、 李入り菓子、プラムプッディング 経験したことのないような、それはそれは盛んな火焔が煙突の中 に大きなツウェルブズ・ケーク、ポンス酒の泡立っている大盃 の上に、 いる林檎、 へぼうぼうと音を立てて燃え上っていた。七面鳥、鵞鳥、 野猪肉、 彼はその形において豊饒の角に似ないでもない一本の燃 見るも愉快な、 露気の多い蜜柑、 牡蠣の樽、 獣肉の大腿、 陽気な巨人がゆったりと構えて坐って 赤く焼けている胡桃、 仔豚、 甘くて頬の落ちそうな梨子、 腸詰の長い巻物、

一種の玉

桜色の頬をして

刻肉饅頭、

クリスマス・ して這入って来た時、 その光を彼に振り掛けようとして、高

くそれを差し上げた。

彼は今や以前のような強情なスクルージではなかった。で、 と好く俺を御覧よ、おい!」 スクルージはおずおず這入って、この幽霊の前に頭を垂れた。

「お這入り!」と、

幽霊は叫んだ。「お這入り! そして、もっ

霊

の眼は朗らかな親切らしい眼ではあったけれども、彼は眼を

てその眼にぶつかることを好まなかった。

「俺は現在の降誕祭の幽霊じゃ」と、精霊は云った。

なものを身にまとっていた。この着物は体躯の上にふわりと掛

毛皮で縁取った、濃い緑色の簡単な長衣、若しくは外套のよう

スクルージはうやうやしげな態度でそうした。

精霊は、白い

「俺を御覧

けてあるばかりで、その広やかな胸は丸出しになっていた。そ

の有様は、さもそんな人工的なものを用いて包んだり護ったり

長くかつゆるやかに垂れていた。ちょうどそのにこやかな顔、 花冠の外に、何一つ冠ってはいなかった。その暗褐色の捲毛は の頭には、ここかしこにぴかぴか光る氷柱の下がっている柊の

するには及ばないと威張っているようであった。上衣の深い襞

の下から見えているその足も、矢張り裸出しであった。

またそ

きらきらしている眼、開いた手、元気の好い声、打ち寛いだ態

而もその古い鞘は銹びてぼろぼろになっていた。 は古風な刀の鞘を捲いていた。が、その中に中味はなかった。 「お前さんはこれまで俺のような者を見たことがないんだね!」 快げな容子と同じようにゆるやかに。またその腰の周りに

「俺の一家の若い連中と一緒に歩いたことがなかったかね。若 決して御座いません」と、スクルージはそれに返辞をした。

精霊は叫んだ。

言葉を続けた。 に生まれた俺の兄さん達のことを云ってるんだよ」と、幽霊は

い連中と云っても、(俺はその中で一番若いんだから)この近年

「そんな事があったようには覚えませんが」と、スクルージは

御座います。御兄弟が沢山おありですか、精霊殿?」

云った。「どうも残念ながら一緒に歩いたことはなかったようで

「千八百人からあるね」と、幽霊は云った。

「恐ろしく沢山の御家族ですね、喰わせて行くにも」とスクルー

ジは口の中で呟いた。

に随いて行きましたが、現に今私の心にしみじみ感じている教 お気の向いた所へ連れて行って下さいませ。昨晩は仕様事なし

精霊殿!」と、スクルージは素直に云った、「どこへなりとも

現在の聖降誕祭の幽霊は立ち上がった。

うかそれに依って利するところのあるようにして下さいませ。」 「俺の上衣に触って御覧!」

訓を学びました。今晩も、何か私に教えて下さりますのなら、ど

握った。 スクルージは云われた通りにした。そして、しっかりそれを

禽も、 とく消え失せてしまった。同様に部屋も煖炉も、 イも、プッディングも、果物も、ポンス酒も、瞬く間にことご つ焔も、 家禽も、野猪肉も、獣肉も、豚も、 夜の時間も消えてしまって、二人は聖降誕祭の朝を都 寄生樹も、赤い果実も、蔦も、七面鳥も、

腸詰も、

鵞鳥も、 牡蠣も、パ

赤々と燃え立

ながら、暴々しい、しかし快活な、気持ちの悪くない一種の音

の往来に立っていた。街上では(寒気が厳しかったので)人々

各自の住家の前の舗石の上や、

屋根の上から雪をこそげ落し

て来て、人工の小さな吹雪となって散乱するのを見るのは 子に取っては物狂おしい喜びであった。

楽を奏していた。

屋根の上から下の往来へばたばたと雪が落ち

根の上の滑かな白い雪の蒲団と、

地面の上のやや汚れた雪

とに 対照して、家の正面は可なり黒く、窓は一層黒く見えた。

地上の雪の降り積った表皮は、

き返されて、

深い皺を作っていた。

その皺は、

幾筋にも大通り

荷馬車や荷車の重たい車輪に鋤

違って、 の岐かれている辻では、幾百度となく喰い違った上をまた喰い

厚い黄色の泥濘や凍り附いた水の中に、どれがどうと

縺れ合った深い溝になっていた。空はどん

半ばは凍った薄汚

見分けの附か

クリスマス・

よりして、極く短い街々ですら、半ばは溶け、

い霧で先が見えなくなっていた。そして、その霧の中の重い方

の分子は煤けた原子の驟雨となって、

あたかも大英国中の煙突

ない、

ら骨を折って発散しようとしてもとても覚束ないような陽気な れでいて、真夏の澄み渡った空気だの照り輝く太陽だのがいく この都の中にも、大して陽気なものは一つとしてなかった。

を吐き出してでもいるように降って来た。この時候にも、また がことごとく一致して火を点けて、思う存分心の行くままに烟

投げ合ったり、それが旨く中ったと云って、からからと笑った 屋根上の欄干から互いに呼び合ったり、時々は道化た雪玉 空気が戸外に棚引いていた。 これは幾多の戯談口よりも遥に性質の好い飛道具である と云うのは、屋根の上でどしどし雪を掻き落していた人々が、

まだ半分開いていた、果実屋の店は今日を晴れと華美を競って りしながら、陽気に浮かれ切っていたからである。鳥屋の店は

また中らなかったと云って、同じようにからからと笑った

膨れ過ぎて往来へごろごろ転がり出しているのもあった。 もあって、陽気な老紳士の胴衣のような恰好をしながら、戸口 の所にぐったりと凭れているのもあれば、

照り輝いていた。そこには大きな、円い、布袋腹の栗籠が幾つ

中気に罹ったように

そこ

真面 きで棚の上からそっと目配せしたり、吊り上げてある寄生樹を 葱があって、 人が寄生樹の下を通ると、それに接吻してもいいそうな。)そ つきながら、 はまた赤々と褐色の顔をして、広い帯を締めた西班牙種の玉 |目腐った顔で見遣ったりしていた。(註、聖降誕祭では婦 娘っ子が通りかかる度に、淫奔で狡猾そうな眼附 西班牙の坊さんのように勢いよく肥え太ってぴか

盛り上げられていた。そこにはまた葡萄の房が、店主の仁慈で、 こにはまた梨子だの、林檎だのが色盛りの三色塔のように高く

通りすがりの人が無料で口に露気を催すようにと、人目に立つ

色をして、 の中の古い小径や、

鉤にぶら下げられていた。そこにはまた榛の実が苔が附いて褐

山と積み上げられていた。

そして、その香気で、

枯れた落葉の中を踝まで没しながら足を引

き摺り引き摺り愉快に歩き廻ったことを想い出させていた。

こにはまた肉が厚く色の黒ずんだノーフオーク産の林檎があっ

クリスマス・

ぐると喘ぎながら廻っていた。

ずゆっくりした情熱のない昂奮の下に彼等の小さな世界をぐる

ると云うことを感知しているように見えた。

カロル

上れと切に懇願したり嘆願したりしていた。

これ等の精選した

そんな

食後に召

締った所で、

早く紙袋に包んでお持ち帰りになって、

蜜柑や檸檬の黄色を引き立たせたり、

その露気の多い肉の

果物の間には、

金魚銀魚が鉢に入れて出してあったが、

無神経

な血の運りの悪

い動物でも、

世の中には何事か起ってい

そして、

葡萄が沢山あって而も極上等に、巴旦杏が素敵に真白で、 らと音を立ててあちこち転がっているばかりではなかった。 ば た茶と珈琲の交じった香気が鼻に取って誠に有難かったり、 た撚糸がそれを捲いてある軸からぐるぐると活発に離れて来る まで降りて来て愉快な音を立てているばかりではなかっ かりではなかった。

また缶が手品を使っているようにからか

肉桂の 砂糖漬

た。

棒が長くかつ真直で、その他の香料も非常に香ばしく、 の果物が、極めて冷淡な傍観者でも気が遠くなって、

け

るばかりでもなかった。

またそれは無花果がじくじくとして

々して来るほどに、溶かした砂糖で固めたり塗したりされて

あ が皆この日の嬉しい期待に気が急いで夢中になってい を凝らしているばかりでもなかった。 そ のために入口で互いに突き当って転がった

和

らか

であったばかりでも、

ま

た仏蘭西梅が盛に飾り立てた箱

からほどの好い酸味を持って顔を赧めながら覗いてい

か

ŋ で

ま

た

は何でも彼

でも喰べる

に

好く、 そ れ

ま

た聖降誕祭

るば

よりも

t

るので しろお

柳

クリスマス・ カロル 食料 たり、 枝製 を幾度となく極上の機嫌で繰返しているのであった。 品 た心臓型の留め金は、 の籠を乱暴に押し潰したり、 屋 ま の主 たそれを取りに駆け戻って来たりして、 |人も店

帳 場

の上に買物を忘れて帰

同じ様な間違

た彼等自身の心臓で御座いと云わぬばかりに開放的にかつ生々

、なら聖降誕祭の鴉どもに啄いて貰うために、

表側に

懸け

の者 ϕ'

前

ζJ

る磨 同

時

般の方々に見て頂くために、 垂を背中で締め着けて

ま

た き

み

と働いていた。

呼び集めた。 彼等は、晴れ着を着飾って街一杯に群がりながら、

さもさも愉快そうな顔を揃えて、ぞろぞろと出掛けて来た。す

ると、

クリスマス・

蓋を取って、

けながら立っていた。

そして、

彼等が御馳走を持って通る毎に スクルージを自分の傍に惹き附

見えて、

彼は麺麭屋の入口に、

の貧しい人々の楽しそうな光景は、

痛く精霊の御意に適ったと

が自分達の御馳走を麺麭屋の店へ搬びながら出て来た。

同時に数多の横町、小径、名もない角々から、無数の人々

度か二度御馳走を搬んで来た人達が互に押し合いへし合いして

彼はその松明から彼等の上に二三滴の水を振

その松明がまた普通の松明ではなかった、と云うのは、

松明からその御馳走の上に香料を振りかけてやっ

喧嘩を始めた時、

んて恥かしいこったと云ったものだ。 なったものだ。彼等はまた、何しろ聖降誕祭の日に喧嘩するな その通りだとも!

その通りだとも!

りかけてやった。すると、彼等はたちまち元通りの好い機嫌に

れているように、 と表われていた。 それ等の御馳走やその料理の進行に伴うのどかな影がほんのり しかしどこの麺麭屋でもその竈の上の雪溶けの濡れた所には、 その内に鐘の音は止んだ。そして、麺麭屋の店も閉じられた。 つまりそこでは、どうやらその石まで料理さ 舗道が湯気を立てていたのである。

味でも附いていますのですか」と、スクルージは訊ねた。 「貴方が松明から振り掛けなさいますものには、何か特別の香

「それが今日のどんな御馳走にでもよく適うので御座いますか」

'ね。俺自身の香味だよ。」

と、スクルージは訊ねた。

「親切に出される御馳走なら、どんな御馳走にも適うのじゃ、貧

しい御馳走には特に適うんだね。」

クリスマス・

「俺が?」と、精霊は叫んだ。

いになるんですよ。彼等がとにかく御馳走を喰べられるのはこ

「七日目毎に貴方は彼等が御馳走を喫べる便宜を奪っておしま

せんよ。」

おうとしていられると云うことは、

私はどうも不思議でなりま

ならとにかく)貴方がこれ等の人々の無邪気な享楽の機会を奪

の周囲のいろいろな世界のありとあらゆる存在の中で、(他の物

「精霊殿!」と、スクルージは一寸考えた後で云った、「私ども

「そう云う御馳走は別けてもそれが入用じゃからね。」

「何故貧しい御馳走に特に適うので御座いますか。」

ジは云った。「そうじゃありませんかい。」 の日位なものだと云われているその日にですね」と、スクルー

「俺がだ!」と、精霊は叫んだ。 「貴方は七日目毎にこう云う場所を閉めさせようとしておいで

事になるんですよ。」 になるのでしょう?」と、スクルージは云った。「だから、同じ

「俺がそうしようと思ってるんだって?」と、精霊は大きな声

で云った。

「間違っていたら御免下さい。ですが、貴方のお名前で、少な

くとも貴方のお身内のお名前で、そう云う事をして居りますの

です」と、スクルージは云った。

ているような顔をしながら、情欲、驕慢、悪意、憎悪、嫉妬、頑

「お前方のこの世の中にはね」と、精霊は答えた、「俺達を知っ

もそいつ等は、かつて生きていたことがないように、俺達や、俺

我利の行いを俺達の名でやっている者があるんだよ。しか

根の下でも、どんな高荘な広間ででも振舞うことが可能であっ が、その巨大な体躯にも係らず、どんな場所にもらくらくとそ ように姿を現わさないで、町の郊外へ入り込んで行った。精霊 の身を適応させることが出来たと云うことは、また彼が低い屋 スクルージはそうすると約束した。それから彼等は前と同じ

て、その特質をスクルージは既に麺麭屋の店で気が附いていた く立っていたと云うことは、彼の顕著な特質であった。(そし たと同じように優雅に、その上いかにも神変不思議の生物らし

恐らくこの精霊が彼のこの力を見せびらかすことにおいて感ず 霊が真直にスクルージの書記の家へ出掛けて行ったのは、

のである。)

る快楽のためか、それでなくば彼の持って生れた親切にして慈

分の着物に捕まっているスクルージを一緒に連れて行った。

何となれば、

彼は実際出懸けて行った、そして自

クリスマス・

見よ!

称である。)の住居を祝福してやろうと立ち止まった。

考えても 一ボブは 彼は土

ボブは一週間に彼自身僅かに十五ボブ(註、

を振り掛けながら、ボブ・クラチット(註、ボブはロバートの愛 れから戸口の敷居の上でにっこり笑って、彼の松明から例の雫

曜日毎に自分の名前の僅かに十五枚を手に入れるばかりであっ

一シリングの俗称である。)を得るばかりであった。

かであった。

誠実なる性質と、総ての貧しき者に対する同情のため

悲深い、

その時クラチット夫人すなわちクラチットの細君は二度も裏

返しをした着物で、粗末ながらにすっかり身繕いをして、しかし

廉くて、六ペンスにしては好く見えるリボンで華やかに飾り立等

児の集まる公園に出懸けて自分の下着を見せたくて堪らなかっ

ながらいかにも華々しくめかし込んだのに嬉しくなって、流行 与したる私有財産)の襟の両端を自分の口中に啣えながら、我 鍋の中に肉叉を突込んだ。そして、恐ろしく大きな襯衣(この鍋の中に肉叉を突込んだ。そして、恐ろしく大きな襯衣(この

この祝儀として、 ボブが彼の子息にして嗣子なるピーターに授

ひろげた。一方では、子息のピータア・クラチットが馬鈴薯の いる二番目娘のベリンダ・クラチットに手伝わせて、食卓布を てて出て来た。そして彼女は、これもまたリボンで飾り立てて

タア・クラチット君を口を極めて褒めそやした。その間に彼は 分達のだと分ったと云って、きゃあきゃあ叫びながら躍り込ん 火を吹き熾していた。 て皮を剥いてくれと、大きな音を立てて鍋の蓋を叩き出すまで、 で)のろのろした馬鈴薯が漸く煮えくり返りながら、取り出し (襯衣の襟が咽喉を締めそうになっていたが、別段自慢もしない のと贅沢な考えに耽りながら、食卓の周囲を躍り廻って、ピー 女の児とは、麺麭屋の戸外で鵞鳥の匂いを嗅いだが、それが自 ね?」と、クラチット夫人は云った。「それからお前達の弟のち で来た。そして、これ等の小クラチット達はサルビヤだの葱だ 「それはそうと、お前達の大切の阿父さんはどうしたんだろう

た。さて、二人の一層小さいクラチット達、すなわち男の児と

びのティムもだよ! それからマーサも去年の基督降誕祭には

約三十分も前に帰って来ていたのにねえ。」 「マーサが来ましたよ、阿母さん!」と云いながら、一人の娘

がそこに現われた。 「マーサが来ましたよ、

阿母さん!」と、二人の小クラチット

是と世話を焼きたがって、相手のシォールだの帽子だのを代っ と云いながら、クラチット夫人は幾度も彼女に接吻したり、彼 どもは叫んだ。「万歳! こんな鵞鳥があるよ、マーサ!」 て取って遣ったりした。 「まあ、どうしたと云うんだね、マーサや、随分遅かったねえ!」

「昨夜のうちに仕上げなければならない仕事が沢山あったのよ」。

と、娘は答えた、「そして、今朝はまたお掃除をしなければなら

なかったのでねえ、阿母さん!」

「ああああ、来たからにはもう何も云うことはないんだよ」と、

先ずお煖まりな。本当に好かったねえ。」 クラチット夫人は云った。「煖炉の前に腰をお掛けよ。そして、

「いけない、いけない、阿父さんが帰っていらっしゃるところ

だ」と、どこへでもでしゃばりたがる二人の小さいクラチット

鉄の枠で両脚を支えていた。

「ええ、マーサはどこに居るのか」と、ボブ・クラチットは四辺

を見廻しながら叫んだ。

来た。可哀そうなちびのティムよ、彼は小さな撞木杖を突いて、

に着けていた。そして、ちびのティムを肩車に載せて這入って に継ぎを当てたり、ブラシを掛けたりした、擦り切れた服を身 総を除いて少くとも三尺はだらりと下げて、時節柄見好いよう。。

マーサは云われるままに隠れた。阿父さんの小ボブは襟巻を、

どもは呶鳴った。「お隠れよ、マーサ、お隠れよ。」

「まだ来ませんよ」と、クラチット夫人は云った。

トどもはちびのティムをぐいぐい引っ張って、鍋の中でぐつぐ た。「基督降誕祭だと云うのにまだ来ないって!」 そして、彼の両腕の中に走り寄った。その間二人の小クラチッ たくなかった。で、まだ早いのに押入れの戸の蔭から出て来た。 して云った。実際、彼は教会から帰る途すがら、ずっとティム の種馬になって、ぴょんぴょん跳ねながら帰って来たのであっ 「まだ来ない!」と、ボブは今まで元気であったのが急に落胆 マーサは、たとい冗談にもせよ、父親が失望しているのを見

つ煮えている肉饅頭の歌を聞かせてやろうと台所へ連れて行っ

ずボブが軽々しく人の云うことを本気にするのを冷かし、ボブ

「で、ティムはどんな風でした?」と、クラチット夫人は、先

はまた思う存分娘を抱き締めた後で、こう訊ねた。

う云うんだ、教会の中で衆皆が自分を見てくれれば可いと思っ 考え込んでしまったんだね。そして、誰も今まで聞いたことも た。何故なら自分は跛者だし、聖降誕祭の日に、誰が跛者の乞 ないような不思議な事を考えているんだよ。帰り途で、私にこ たよ。あんなに永く一人で腰掛けていたもので、どうやらこう 「黄金のように上等だった」と、ボブは云った。「もっと善かっ

とを想い出したら、あの人達も好い気持だろうからとこう云う 食を歩かせたり、盲人を見えるようにして下さったかと云うこ

んだよ。」

のティムも段々しっかりして達者になって来たと云った時には、 皆にこの話をした時、ボブの声は顫えていた。そして、ちび、

層それが顫えていた。

次の言葉がまだ云い出されないうちに、ちびのティムは彼の兄 の間ボブは袖口をまくり上げて――気の毒な者よ、あんな袖口 や姉に護られて、もう煖炉の傍の自分の床几に戻って来た。そ

せわしない、小さな撞木杖の音が床の上に聞えた。そして、

がこの上まで汚れようがあるか何ぞのように――ジン酒と檸檬

で鉢の中に一種の熱い混合物を拵えた。そして、それをぐるぐ

る掻き廻してから、とろ火で煮るために炉側の棚の上に載せた。

ピーター君と二人のちょこまかした小クラチットどもは鵞鳥を

取りに出掛けたが、間もなくそれを持って仰々しい行列を作っ

て帰って来た。

れに比べては、黒い白鳥も異とするに足りない――で、実際この

かも知れないような騒ぎが続いて起った。羽の生えた怪物、そ

あらゆる鳥の中で鵞鳥を最も稀有なものと、諸君が思われた

鈴薯を突き潰した。ベリンダ嬢はアップル・ソースに甘味をつ 煮立たせた。ピータア君はほとんど信じられないような力で馬 マーサは(湯から出し立ての)熱い皿を拭いた。ボブはち

家では鵞鳥がまずそれと同じようなものであった。クラチット

夫人は肉汁(前以て小さな鍋に用意して置いた)をシューシュー

けた。 びのティムを食卓の小さな片隅へ連れて行って、自分の傍に腰

べた。・ 掛けさした。二人の小クラチットどもは衆皆のために椅子を並 て貰う順番が来ないうちに早く鵞鳥が欲しいなぞと我鳴り立て た。そして、自分の席について見張りをしながら、自分達の盛っ 衆皆と云う中にはもちろん自分達の事も忘れはしなかっ

てはならないと思って、口の中一杯に匙を押込んでいた。到頭

夫人が大庖丁を手に取って、ゆるゆるとそれを一遍並み見渡 .皿が並べられた。食前のお祈りも済んだ。それからクラチッ さと云い、香気と云い、大きさと云い、廉価なことと云い、皆一 がこれまで料理されたとは思われないなぞと云った。その軟か こんな鵞鳥は決して有りっこがなかった。ボブはこんな鵞鳥

たくクラチット夫人が、(皿の上に残った小さな骨の破片をつ

で補えば、家中残らずで喰べるに十分の御馳走であった。まっ

同の嘆称の題目であった。アップル・ソースと潰した馬鈴薯と

ラチット夫人は肉饅頭を取り上げて持って来ようと、独りでそ うとうそれを喰べ切れなかったのだ! それでも各自は満腹し 別けても小さい者達は眼の上までサルビヤや葱に漬かって ところが、今度はベリンダ嬢が皿を取り換えたので、ク

くづく見遣りながら、)さも嬉しそうに云った通り、彼等はと

す際に、 られることなぞとても我慢が出来なかったほど、彼女は神経質 になっていたのである。 の部屋を出て行った――肉饅頭を取り出すところを他の者に見 仮りにそれが十分火が通っていなかったとしたら! それが壊れでもしたら!

チットどもが蒼白になってしまったような仮定である。あらゆ

れを盗んで行ったとしたら――想像しただけで、二人の小クラ に夢中になっていた間に、何人かが裏庭の塀を乗りこえて、そ

仮りにまた一同の者が鵞鳥

取り出

る種類の恐怖が想像された。

やッ! 素晴らしい湯気だ!

肉饅頭は鍋から取り出された。

合せた料理屋とカステラ屋のまたその隣りに洗濯屋がくっつい ているような臭いだ! それが肉饅頭であった! 一分と経た

ないうちに、クラチット夫人は這入って来た――真赧になって、

が、得意気ににこにこ笑いながら――火の点いた四半パイント の半分のブランディでぽっぽと燃え立っている、そして、その頂

ように、 辺には聖降誕祭の柊を突き刺して飾り立てた、斑入りの砲弾の

て来た。

き払って、自分はそれを結婚以来クラチット夫人が遣り遂げた

素敵な肉饅頭だ! ボブ・クラチットは、しかも落着

いかにも硬くかつしっかりした肉饅頭を持って這入っ

成功の最も大なるものと思う旨を述べた。クラチット夫人は、

ついて何とか彼とか云った。が、何人もそれが大人数の家庭に いていたことをうち明けようと思うとも云った。各自それに

ら、それこそ頭から異端である。クラチットの家の者で、そん 取っては、どう見ても小さな肉饅頭であるなぞと云うものもな ければ、そう考えるものもなかった。そんな事を云おうものな

な事を暗示して顔を赧らめないような者は一人だってなかった

とうとう御馳走がすっかり済んだ、食卓布は綺麗に片附けら

に、十能に一杯の栗が火の上に載せられた。それからクラチッ 味見をしたところ、申分なしとあって、林檎と蜜柑が食卓の上 れた。煖炉も掃除されて、火が焚きつけられた。壺の調合物は

トの家族一同は、ボブ・クラチットの所謂団欒(円周)、実は半

円のことであるが、それを成して、煖炉の周囲に集った。そし ボブ・クラチットの肱の傍には家中の硝子器と云う硝子器

A CHRISTMAS CAROL

が飾り立てられた――すなわち水飲みのコップ二個と、

クリスマス・

福して下さいませ。」

家族の者一同はそれに和した。

「さあ皆や、一同に聖降誕祭お目出とう。

神様よ、私どもを祝

た。

カロル

出したり、パチパチ音を立てて割れた。それからボブは発議し

を注いでしまった。その間火の上にかかった栗はジウジウ汁を

物をなみなみと受け入れた。ボブは晴れ晴れしい顔附きでそれ

れ等の容器は、それでも、黄金の大盃と同様に壺から熱い

カスタード用コップ一個と。

柄のな

「神様よ、私ども一同を祝福したまわんことを」と、皆の一番

後からちびのティムが云った。 彼は阿父さんの傍にくっついて自分の小さい床几に腰掛けて

いた。ボブは彼の痩せこけた小さい手を自分の手に握っていた。

あたかもこの子が可愛くて、しっかり自分の傍に引き附けて置

誰か自分の手許から引き離しやしないかと気遣ってで

変されないで、このまま残っているものとすれば、あの子は死

に保存されてあるのが見えるよ。これ等の幻影が未来の手で一

「私にはあの貧しい炉辺に空いた席と、主のない撞木杖が大切

ぬだろうね。」

ながら云った。「ちびのティムは生きて行かれるでしょうか。」

「精霊殿!」と、スクルージは今までに覚えのない興味を感じ

もいるように。

は答えた、「あの子をここに見出さないだろうよ。で、それがど いるとすれば、俺の種族の者達はこれから先何人も」と、精霊 「ああ云う幻影が未来の手で変えられないで、

な精霊殿よ、あの子は助かると云って下さい。」

そのまま残って

「いえ、いいえ」と、スクルージは云った。「おお、いえ、親切

方がいい。そして、過剰な人口を減らした方が好い。」 うしたと云うのだい? あの児が死にそうなら、いっそ死んだ 垂れた。そして、後悔と悲嘆の情に圧倒された。 「人間よ」と、精霊は云った、「お前の心が石なら仕方ないが、 スクルージは精霊が自分の言葉を引用したのを聞いて、頭を

くない口癖は慎んだが可いぞ。どんな人間が生くべきで、どん どこにその過剰があるかを自分で見極めないうちは、あんな好 少しでも人間らしい心を持っているなら、過剰とは何か、また

くと、急いでその眼を挙げた。 弟どもの間に生命が多過ぎるなぞとほざくのを聞こうとは!」 者であるスクルージさんよ、私はあなたのために祝盃を上げま がら地面の上に眼を落とした。が、自分の名が呼ばれるのを聞 る値打ちのない者かも知れないのだぞ! 天の眼から見れば、この貧しい男の伜のような子供が何百万人 の虫けらのような奴が、塵芥の中に蠢いている饑餓に迫った兄 「スクルージさん!」と、ボブは云った。「今日の御馳走の寄附 スクルージは精霊の非難の前に頭を垂れた。そして、 それよりもまだお前の方が一層下らない、

顫えな

「御馳走の寄附者ですって、本当にねえ」と、クラチット夫人

な人間が死ぬべきか、それをお前が決定しようと云うのかい。

おお神よ、

草葉の上 一層生き

は真赧になりながら叫んだ。「本当に此辺へでもあの人がやって

え! あの人のことだから、それでも美味しがって存分喰べる 来て見るがいい、思いさま毒づいて御馳走してやるんだのにね

ことでしょうよ。」

それに聖降誕祭だよ。」 「ねえ、お前」と、ボブは云った。「子供達が居るじゃないか!

「スクルージさんのような、憎らしい、けちん坊で、残酷で、情 「たしかに聖降誕祭に違いありませんわね」と、彼女は云った。

を知らない人のために祝盃を上げてやるんですから。貴方だっ

せんわ、可哀相に。」

「ねえ、お前」と、ボブは穏かに返辞をした。「基督降誕祭だよ。」

てそう云う人だとは知っているじゃありませんか、ロバート。

いいえ、何人だって貴方ほどよくそれを知っている者はありま

新年お目出度う! あの人はさぞ愉快で幸福でしょうよ、きっ とねえ。」 めじゃないんですよ。彼に寿命長かれ! 聖降誕祭お目出度う、 を祝いましょうよ」と、クラチット夫人は云った。「あの人のた 「私も貴方のために、また今日の好い日のためにあの人の健康 子供達は彼女に倣って祝盃を挙げた。彼等のやったことに真

投げられた。そして、それは全五分間も消えずに残っていた。 彼の名前が口にされてからと云うもの、一座の上に暗い陰影が 実が籠っていなかったのは、これが始めてであった。ちびのティ ていなかった。スクルージは実際この一家の食人鬼であった。 ムも一番後から祝盃を挙げた。が、彼は少しもそれに気を留め

が附いたと云う単なる安心からして、前よりは十倍も元気には

その影が消えてしまうと、彼等はスクルージと云う毒虫の片

半入ることなどを一同の者に話して聞かせた。二人の少年クラ チットどもはピータアが実業家になるんだと云って散々に笑っ 口の心当りがあることや、それが獲られたら、

しゃいだ。ボブ・クラチットはピータア君のために一つの働き

毎週五シリング

うに、カラーの間から煖炉の火を考え深く見詰めていた。 取ったら、一つ何に投資してやろうかと考え込んででもいるよ た。そして、ピータア自身は、その眩惑させるような収入を受

から婦人小間物商のつまらない奉公人であったマーサは、

がどんな種類の仕事をしなければならないかとか、一気に何時

夫人と一人の華族様とを見たが、その貴公子は「ちょうどピー もりだとか云うことを話した。また、彼女はこの間一人の伯爵

明日の朝はゆっくり骨休めをするために朝寝坊をするつ

明日は休日で一日自宅に居る

自分 それ

間働かなければならないかとか、

たとい読者がその場に居合せたとしても、もう彼の頭を

タア位の身丈恰好であった」とも話した。ピータアはそれを聞

等は固より立派な家族ではなかった。彼等は身綺麗にもしてい 歌った歌を唄うのを聞いた。彼は悲しげな小さい声を持ってい やがて一同はちびのティムが雪の中を旅して歩く迷児のことを たものだ。その間栗と壺とは絶えずぐるぐると廻されていた。 見ることは出来なかったほど、自分のカラーを高く引張り上げ これには別段取り立てて云うほどのことは何もなかった。 そして、それを大層上手に唄った。

衣服は乏しかった。ピータアは質屋の内部を知っていたかも知 なかった。 彼等の靴は水が入らぬどころではなかった。

であった、感謝の念に満ちていた、お互に仲が好かった、そし

ない、どうも知っているらしかった。けれども、彼等は幸福

彼等の

滴りの中に一層晴れやかに見えた時、スクルージは眼を放たず しかも別れ際に精霊が例の松明から振り掛けてやった煌々たる て今日に満足していた。で、彼等の姿がぼんやりと淡くなって、 闰 の時分にはもう段々暗くなって、雪が可なりひどく降って の者を見ていた、特にちびのティムを最後まで見ていた。

客間や、その他あらゆる種類の室々で音を立てて燃え盛ってい る煖炉の輝かしさと云ったら凄じかった。此方では、チラチラ 来た。で、スクルージと精霊とが街上を歩いていた時、台所や、 「焔が、煖炉の前で十分に焼かれている熱い御馳走の皿や、

引き下ろされようとしている深紅色の窓掛と一緒になって、小 寒気と暗黒とを閉め出すために、一たびは開いても直ぐにまた

ぢんまりした愉快な晩餐の用意を表わしていた。彼方では、

中の子供達が自分達の結婚した姉だの、兄だの、従兄だの、伯父

雪の中に走り出していた。

だの、

叔母だのを出迎えて、自分こそ一番先に挨拶をしようと、

また彼方には、

皆頭巾を被って毛皮

の長靴を履いた一群の美しい娘さんが、一度にべちゃくちゃ饒

数から判断したとすれば、どの家も仲間を待ち設けたり、 舌りながら、 の半分までも石炭の火を積み上げたりしてはいないで、 ているのである。 は災禍なるかな そこへ彼等がぽっと上気しながら這入って来るのを見た独身者 ところで、読者にして若しかく親しい集会に出掛けて行く人 軽々と足を運んで、近所の家に出掛けて行った。 -手管のある妖女どもよ、彼等はそれを知っ

ないだろうと思われるかも知れない。

どの家にも祝福あれや! いかにその胸幅を露き出

かに精霊は欣喜雀躍したことぞ!

客様がそこへ着いても、一人も自宅にいて出迎えてくれる者は

折角お 煙突

りあらゆる物の上に、その晴れやかで無害な快楽をその慈悲深 しにして、大きな掌をひろげたことぞ! そして、手のとどく限

灯

地ででもあったかのように、荒い石の怖ろしく大きな塊がそち 夢にも知らなかったけれども。 人は冬枯れた物寂しい沼地の上に立った。そこには巨人の埋葬 てて笑ったものだ――聖降誕祭の外に自分の伴侶があろうとは 行く点灯夫ですら、今宵をどこかで過すために好い着物に代え ていたが、その点灯夫ですら精霊が通りかかった時には声を立 ところで、今や精霊から一言の警告もなかったのに、突然二

た。いや、結氷が水を幽閉して置かなかったら、きっとそうし こちに転っていた。水は心のままにどこへでも流れ拡がってい

ていたであろう。苔とはりえにしだと、粗い毒々しい雑草の外 は何も生えていなかった。西の方に低く夕陽が一筋火のよう

- 真赤な線を残して消えてしまった。それが一瞬間荒漠たる四

辺の風物の上に、陰惨な眼のようにあかあかとぎらついていた

「ここはどう云う所で御座いますか」と、スクルージは訊ねた。 「鉱夫どもの住んでいるところだよ、彼等は地の底で働いてい

の濃い暗闇の中に見えなくなってしまった。

だんだん低く、低くその眼を顰めながら、やがて真暗な夜

るのだ」と、精霊は返辞をした。「だが、彼等は俺を知っている

御覧!」

軒の小屋の窓から灯火が射していた。そして、それを目懸

真赤な火の周りに集っている愉快そうな一団の人々を見附けた。 けて二人は足早に進んで行った。泥土や石の壁を突き抜けて、

されがちな声で、一同の者に聖降誕祭の歌を唄ってやっていた。 それは彼が少年時代の極く古い歌であった。一同の者は時々声 ていた。その爺は不毛の荒地をたけり狂う風の音にとかく消圧 またその下の曾孫達と一緒に、祭日の晴着に美々しく飾り立て

非常に年を取った爺と媼とが、その子供達や、孫達や、それから

きっと銷沈してしまった。 出て声を高めた。が、彼等が止めてしまうと、爺さんの元気も を和して歌った。彼等が声を高めると、爺さんもきっと元気が 精霊はここに停滞してはいなかった、スクルージをして彼の

着衣に捕まらせた、そして、沼地の上を通過しながら、さてどこ へ急いだか。海へではないか。そうだ、海へ。スクルージは振

ているのを見て慄然とした。水は自分の擦り減らした恐ろしい り返って、自分達の背後に陸の突端を、怖ろしげな岩石が連っ

海

A CHRISTMAS CAROL 聾いてしまっ る物凄 一岸から幾浬か離れて、 い暗礁の上に、ぽっつりと寂しげな灯台が建てられ た。

一年中荒れ通しに波に衝かれ揉まれ

と烈しく押し寄せていたが、その水の轟々たる響には彼の耳も 洞窟の中に逆捲き怒号して狂奔して、この地面を下から覆そう

7

海藻の大きな堆積がその土台石に絡まり着いて、

海鳥

ていた。

は

-海藻が

水から生れたように、

風から生れたかとも想わ

るような―

同じように、

7

クリスマス・

が、

に一条の輝かしい光線を射出した。向い合せに坐っていた荒削

ていた、それが厚い石の壁に造られた風窓から物凄い

海の上

こんな所でさえ、灯光の番をしていた二人の男が火を焚

その灯台の周囲を舞い上ったり、

舞い下ったりし

彼等がその上をすくうようにして飛んでいる波と

そして、彼等の一人、しかも年長者の方が――古い船の船首に ついている人形が傷められ瘢痕づけられているように、 'めに顔中傷められ瘢痕づけられた年長者の方が、それ自身本

風雨の

酒の盃に酔って、お互いに聖降誕祭の祝辞を述べ合ったものだ。 りの食卓越しに、ごつごつした手を握り合せながら、彼等は火

うとある一艘の船の上に降りた。二人は舵車を手にした舵手や、 来暴風雨のような、頑丈な歌を唄い出した。 ころに拠れば、どの海岸からも遙かに離れているので、とうと .び精霊は真黒な、絶えず持ち上げている海の上を走り続け -どこまでも、どこまでも――彼がスクルージに云ったと

船首に立っている見張り人や、当直をしている士官達の傍に立っ

幽霊のように見えた。しかしその中の誰も彼もが聖降誕祭の

各自それぞれの配置についている彼等の姿は、いずれも暗

でありし昔の降誕祭の話を――それには早く家郷へ帰りたいと

云う希望が自然と含まれているが、その希望を加えて話したり していた。

起きていようが

誰も彼

歌を口吟んだり、聖降誕祭らしいことを考えたり、または低声

掛けていた。そして、ある程度まで今日の祝いを共に楽しんで もこの日は一年中のどんな日よりも、より親切な言葉を他人に 眠っていようが、善い人であろうが悪い人であろうが、 そして、その船に乗っている者は、

喜んでいることをよく承知していた。 遣ると共に、またその遠方の人達も自分のことを想い出して そして、誰も彼も自分の心に懸けている遠方の人達を想

秘密であるところの未だ知られない奈落の上に拡がっている寂

い暗い闇を貫いて、どこまでも進んで行くと云うことは、何

風

の呻きに耳を傾けたり、

またはその深さは死の様に深遠な

が自分の甥の笑い声だと知ることは、そして、一つの晴れやか スクルージに取って大きな驚愕に相違なかった。しかも、それ られている間に、一つの心からなる笑い声を聞くと云うことは、

と云う厳粛なる事柄であるかと考えたりして、こうして気を取

甥をじっと眺めているのであった。 ジに取って一層大いなる驚愕であった。で、その精霊はいかに な、乾いた、明るい部屋の中に、自分の傍に微笑しながら立って も相手が気に適ったと云うような機嫌の好さで以て、その同じ いる精霊と一緒に自分自身を発見すると云うことは、スクルー

は!」と、スクルージの甥は笑った。「は、は、は!」

おいて恵まれている男を知るような機会があったら、そんな機 「 は ! 若し読者諸君にしてこのスクルージの甥よりはもっと笑いに

会はありそうにもないが、(万々一あったとしたら、)私の云い

その人と知己になりましょうよ。 たいものだと。 疾病や悲哀に感染がある一方に、世の中には笑いや上機嫌ほ 「私にその男を紹介して下さい、私はどうかして

得ることはただこれだけである、(曰く)私もまたその男を知り

ど不可抗力的に伝染するものがないと云うことは、物事の公明

て脇腹を抑えたり、頭をぐるぐる廻したり、途方もない蹙め面に にして公平なるかつ貴き調節である。スクルージの甥がこうし

顔を痙攣らせたりしながら笑いこけていると、スクルージの姪

た。 に当るその妻もまた彼と同様にきゃっきゃっと心から笑ってい

クリスマス

それから一座の友達どもも決して敗けは取らないで、どっ

「あの人は聖降誕祭なんて馬鹿らしいと云いましたよ、本当に

はッ、

はッ、はッ、は、は、

は!

の声を上げて笑い崩れた。

さ」と、スクルージの甥は云った。「あの人はまたそう信じてい

立たしそうに云った。こう云う婦人達は愛すべきかな、彼等は 「一層好くないことだわ、フレッド」と、スクルージの姪は腹

何でも中途半端にして置くと云うことはない。いつでも大真面

る、吃驚したような、素敵な顔をして接吻されるために造られ 彼女は非常に美しかった。図抜けて美しかった。えくぼのあ

「である。

たかと思われるような――確にその通りでもあるのだが

豊

な、極めて晴れやかな一対の眼を持っていた。引括めて云えば、 たものだ。それからどんな可憐な少女の頭にも見られないよう な可愛らしい斑点があって、それが笑うと一緒に溶けてしまっ かな小さい口をしていた。頤の辺りには、あらゆる種類の小さ

人はそれで何等の善い事もしない。それで自分の居まわりを気 あの人を悪く云うことはありませんよ。」 また自然にそれだけの報いがあるでしょうから、何も私が彼是 だが、そうは行かないんですね。ですが、あの人の悪い事には 彼女は気を揉ませるなとでも云いたいような女であった。しか 「あの人の財産はあの人に取って何の役にも立たないのだ。あの スクルージの姪は云い出して見た。「少なくとも、貴方は始終私 が本当の所でさ。そして、もっと愉快で面白い人である筈なん し世話女房式な、おお、どこまでも世話女房式な女であった。 にはそう仰しゃいますわ。」 「へんなお爺さんですよ」と、スクルージの甥は云った。「それ 「あの方はたいへんなお金持なのでしょう、ねえフレッド」と、 「それがどうしたと云うの?」と、スクルージの甥は云った。

云った。スクルージの姪の姉妹も、その他の婦人達も皆同意見 たないんだからね。」 して遣ろうと――はッ、は、は! そう考えるだけの満足も持 私もうあの人には我慢出来ませんわ」と、スクルージの姪は

持ちよくもしない。いや、あの人はそれで行く行く僕達を好く

怒れないんだよ。あの人の可厭なむら気で誰が苦しむんだい? はあの人が気の毒なのだ。僕は怒ろうと思っても、あの人には いつでもあの人自身じゃないか。たとえばさ、あの人は僕達が であると云った。 「いや、僕は我慢出来るよ」と、スクルージの甥は云った。「僕

と云うのだい? 大層な御馳走を喫べ損ったと云う訳でもない

嫌いだと云うようなことを思い附く。するともう、ここへ来て

緒に飯も喫べてくれようとはしない。で、その結果はどうだ

ね。 」

他の人達も皆そう

カロル だと云った。そして、彼等は今御馳走を喰べたばかりで、食卓 れなければならなかった。 すわ」と、スクルージの姪は相手を遮った。 の甥は云った。「だって、僕は近頃の若い主婦達に余り大した信 ていたのであるから、十分審査官の資格を具えたものと認定さ の上に茶菓を載せたまま、洋灯を傍にして煖炉の周囲に集まっ 「なるほど! そう云われれば僕も嬉しいね」と、スクルージ あの方は大層結構な御馳走を喰べ損ったんだと思いま

クリスマス・

問題に対して意見を吐く権利がないと返辞したからであった。

けていた。と云うのは、独身者は悲惨な仲間外れで、そう云う

トッパーはスクルージの姪の姉妹達の一人に明らかに眼を着

「いていないのだからね。トッパー君、君はどう思うね?」

用を置

まで云ったことがない。本当に可笑しな人よ!」 手を敲きながら云った。「この人は云い出した事を決してお終い

なくて、レースの半襟を掛けた肥った方が――顔を真赧にした。 これを聞いて、スクルージの姪の姉妹――薔薇を挿した方じゃ

先を仰しゃいよ、フレッド」と、スクルージの姪は両

は香気のある醋酸でそれを防ごうと一生懸命にやって見たけれ の感染を防ぐことは不可能であったので――肥った方の妹など スクルージの甥はまた夢中になって笑いこけた。そして、そ -座にある者どもは一斉に彼のお手本に倣った。

「僕はただこう云おうと思ったのさ」と、スクルージの甥は云っ

ない快適な時間を失ったことになると云うのですよ。確かにあ はね、僕が考えるところでは、些ともあの人の不利益にはなら た。「あの人が僕達を嫌って、僕達と一緒に愉快に遊ばない結果

は毎年こう云う機会をあの人に与える積りですよ。だって僕は の人は、あの黴臭い古事務所や、塵埃だらけの部屋の中に自分 一人で考え込んでいたんじゃ、とても見附けられないような愉 な相手を失っていますね。

。あの人が好こうが好くまいが、

あの人は死ぬまで聖

嫌はいかがですか』と訪ねて行くのを見たらね。いや、 戦する――僕が上機嫌で、来る年も来る年も、『伯父さん、御機 く考え直さない訳にゃ行かないでしょうよ――僕はあの人に挑 降誕祭を罵っているかも知れない。が、それについてもっと好 あの人が気の毒で耐らないんですからね。 な書記に五十ポンドでも遺して置くような心持にして遣れた

彼

昨日あの人の心を顛動させて遣ったように思うんだよ。」

がスクルージの心を顛倒させたなぞと云うのが可笑しいと

それだけでも何分かの事はあった訳だからね。

それに、

あの憐

立ての好い人で、とにかく彼等が笑いさえすれば何を笑おうと 同の哄笑を 余り気に懸けていなかったので、自分も一緒になって笑って一 励ますようにした。そして、愉快そうに瓶を廻わ

云って、今度は一同が笑い番になった。が、彼は心の底から気

パーは巧妙な唄い手らしく最低音で唸って退けたものだが、そ 彼等は音楽好きの一家であったから。そして、グリーやキャッ した。 れを唄いながら、格別前額に太い筋も立てなければ顔中真赧に チを唄った時には、仲々皆手に入ったものであった。殊にトッ お茶が済んでから、一同は二三の音楽をやった。と云うのは、

なりもしなかった。スクルージの姪は竪琴を上手に弾いた。そ

いもの、二分間で覚えてさっさと口笛で吹かれそうなもの)を して、いろいろな曲を弾いた中に、一寸した小曲(ほんの詰らな

事柄が残らず彼の心に浮んで来た。彼の心はだんだん和いで来 鳴り渡ったとき、その精霊がかつて彼に示して呉れたすべての 帰ったあの女の子が好くやっていたものであった。この一節が い出させて貰った通りに、寄宿学校からスクルージを連れに そして、 数年前に幾度かこの曲を聴くことが出来たら、

弾

いたが、これはスクルージが過去の聖降誕祭の精霊に依って

カロル 自身の手で自分の幸福のために人の世の親切を培い得たかも知 はジェコブ・マアレイを埋葬した寺男の鍬に頼らずして、 ・なかったと考えるようになった。 彼等も専ら音楽ばかりして、その夜を過ごしはしなかっ

自

子供になるのも好い事であるからである。そして、それには、そ 暫時すると、彼等は罰金遊びを始めた。と云うのは、時には

の偉大なる創立者自身が子供であるところからして、聖降誕祭の

私の意見では、彼とスクルージの甥との間にはもう話は済んで ていたと信じないと同様にまったくの盲目であるとは信じない。 いるらしい。そして、現在の聖降誕祭の精霊もそれを知ってい

時が一番好い。まあ、お待ちなさい。まず第一には目隠し遊び

があった。もちろんあった。私はトッパーがその靴に眼を持つ

も随いて行った。彼はいつでもその肥った娘がどこに居るかを がら呼吸が出来なくなったりして、彼女の行く所へはどこへで り返したり、洋琴に打っ突かったり、窓帷幄に包まって自分な たものであった。火箸や十能に突き当たったり、椅子を引っく わした様子というものは、誰も知らないと思って人を馬鹿にし るのである。彼がレースの半襟を掛けた肥った方の妹を追い廻

諸君がわざと彼に突き当りでもしようものなら(彼等の中には実

知っていた。彼は他の者は一人も捕へようとしなかった。若

ているような素振りをして見せたことであろうが、

直ぐにまたその肥っ

それは

際やったものもあった)、彼も一旦は諸君を捕まえようと骨折っ

諸君の理性を侮辱するものであろう、 た娘の方へ逸れて行ってしまったものだ。彼女はそりゃ公平で

分らない、いや、そればかりでなく、彼女の指に嵌めた指環だ

の頸の周りにつけた鎖だのを抑えて見て、やっと彼女であるこ

らず、

らせたり、 彼は彼女を捕まえた。そして、 れからあとの彼の所行というものは全く不埒千万なものであっ 云うような振りをしたのは、彼女の頭飾りに触って見なけりゃ と云うのは、彼が自分に相手の誰であるかが分からないと 彼は逃げ場のない片隅へ彼女を追い込めてしまった。そ

いと幾度も呶鳴った。実際それは公平でなかった。が、

彼を遣り過ごそうとばたばた藻掻いたりしたにも係

彼女が絹の着物をさらさらと鳴

到頭

とを確かめる必要があるような振りをしたのは、卑劣とも何と

その片隅では精霊とスクルージとが彼女の背後に近く立ってい 心地のよい片隅に大きな椅子と足台とで楽々と休息していた。 スクルージの姪はこの目隠し遊びの仲間には入らないで、居 が、彼女は罰金遊びには加わった。そして、アルファベッ

ト二十六文字残らずを使って自分の愛の文章を見事に組み立て 同じようにまた『どんなに、いつ、どこで』の遊びでも彼女

したら、

は偉大な力を見せた。そして、彼女の姉妹達もトッパーに云わ

随分敏捷な女どもには違いないが、その敏速な女ども

行われていることの興味に引かれて、自分の声が彼等の耳に何 こに居たろうが、彼等は皆残らずそれをやった。そして、スク んで見ていたものだ。若い者年老った者、合せて二十人位はそ を散々に負かして退けた。それをまたスクルージの甥は内心喜 ルージもまたそれをやった。と云うのは、彼も今(自分の前に)

製の一番よく尖った針でも、ぼんやりだと自分で思い込んでい 等の響も持たないことをすっかり忘れて、時々大きな声で自分 るスクルージほど鋭くはないのだから。 何故ならば、めど切れがしないと保険附きのホワイトチャペル の推定を口にした。そして、それがまた中々好く中ったものだ。

い。で、彼はお客が帰ってしまうまでここに居させて貰いたい こう云う気分で彼がいたのは、精霊には大層気に適ったらし

と子供のようにせがみ出したほど、精霊は御機嫌の好い体で彼

半時間、

を見詰めていた。が、それは罷りならぬと精霊は云った。

「今度は新しい遊戯で御座います」と、スクルージは云った。 精霊殿、たった半時間!」

それは Yes and No と云う遊戯であった。その遊戯ではスク

質問に、それぞれその場合に応じて、Yes とか No とか返辞をす ルージの甥が何か考える役になって、他の者達は、彼が彼等の

その衝に当って浴びせられた、てきぱきした質問の銃火は、 るだけで、それが何であるかを云い当てることになった。彼が

からして一つの動物について考えていることを誘き出した。

にはされていない、また誰かに引廻わされている訳でもない、

倫敦に住んでいて、街も歩くが、見世物

た時には話しもする、

猛な動物であった、時々は唸ったり咽喉を鳴らしたりする、

れは生きている動物であった、

何方かと云えば不快な動物、

長椅子から立ち上って床をドンドン踏み鳴らさずに居られない

知っていますよ。」

「じゃ何だね?」と、フレッドは叫んだ。

「貴方の伯父さんのね、スクル――ジさん!」

確かにその通りであった。一同はあっと感嘆これを久しゅう

た。

が、とうとう例の肥った娘が同じように笑い崩れながら呶鳴っ ほどに、何とも云いようがないほどくすぐられて面白がった。

「私分かりましたわ! 何だかもう知っていますよ、フレッド!

れべきものであった。「否」と否定の返辞をされては、折角その

不都合だよ。ちょうど今手許に薬味を入れた葡萄酒が一瓶ある はあった。 考えを転向させるに十分であったからねと抗議した者もあるに からね。さあ、始めるよ、『スクルージ伯父さん!』」 方へ気が向き掛けていたとしても、スクルージ氏から他の方へ フレッドは云った。「それであの人の健康を祝って上げないじゃ 「あの人は随分僕達を愉快にしてくれましたね、本当によ」と

「あの老人がどんな人であろうが、あの人にも聖降誕祭お目出 「宜しい! スクルージの伯父さん!」と、彼等は叫んだ。

度う、新年お目出度う!」と、スクルージの甥は云った。「あの

人は僕からこれを受けようとはしないだろうが、それでもまあ

なった。で、若し精霊が時間を与えてくれさえしたら、今の返 スクルージ伯父は人には知らないままで気も心も浮々と軽く

差し上げましょうよ、スクルージの伯父さん!」

礼として自分に気の附かない一座のために乾盃して、

えない言葉で彼等に感謝したことであろう。が、その全場面は、

誰にも聞

彼の甥が口にした最後の一語がまだ切れない間に掻き消されて

しまった。そして、彼と精霊とはまたもや旅行の途に上った。

彼等は多くを見、遠く行った。そして、いろいろな家を訪問

したが、いつも幸福な結果に終った。精霊が病床の傍に立つと、

病人は元気になった。異国に行けば、人々は故郷の近くにあっ

な希望を仰いで辛抱強くなった。貧困の傍に立つと、それが富

施療院でも、病院でも、牢獄でも、あらゆる不幸

悶え苦しんでいる人の傍に行くと、彼等は将来のより大き

裕になった。

カロル

スクルージはこれについて疑いを抱いていた。と云うのは、聖 クルージにその教訓を垂れたのであった。 「れが只の一夜であったとすれば、随分長い夜であった。が、

しまうようなことがないからして、彼はその祝福を授けて、ス ない権勢をたのんで、しっかり戸を閉めて、精霊を閉め出して の隠棲において、そこでは虚栄に満ちた人が自分の小さな果敢

降誕祭の祭日全部が自分達二人で過ごして来た時間内に圧縮さ

段々年を取った、眼に見えて年を取って行った。スクルージは この変化に気が附いていたが、決して口に出しては云わなかっ スクルージはその外見が依然として変らないでいるのに、精霊は れてしまったように見えたからである。また不思議なことには、

ら十二日目の夜お別れとして行うもの。)を出た時に、二人は野

が、到頭子供達のために開いた十二夜会(註、聖降誕祭か

A CHRISTMAS CAROL

「精霊の寿命はそんなに短いものですか?」と、スクルージは

訊ねた。

答えた。「今晩お仕舞いになるんだよ。」 「この世における俺の生命は極くみじかいものさ」と、

精霊は

「今晩ですって!」と、スクルージは叫んだ。

「今晩の真夜中頃だよ。お聴き! その時がもう近づいている

鐘

さい」と、スクルージは精霊の着物を一心に見詰めながら云っ

「こんな事をお訊ねして、若し悪かったらなにとぞ勘弁して下

の音はその瞬間に十一時四十五分を報じていた。

た。「それにしても、何かへんてこな、貴方のお身の一部とは思

と云うのが精霊の悲しげな返辞であった。「これを御覧よ。」 われないようなものが、 「そりゃ爪かも知れないね、これでもその上に肉があるからね。」 あれは足ですが、それとも爪ですか。」 裾から飛び出しているようで御座いま

精霊はその着物の襞の間から、二人の子供を取り出した。哀

賤しげな、怖ろしい、ぞっとするような、悲惨な者ども

着いた。 であった。二人は精霊の足許に跪いて、その着物の外側に縋り

「おい、こらッ、これを見よ! この下を見て御覧!」 彼等は男の児と女の児とであった。黄色く、瘠せこけて、ぼ

ち切れるように肥らせて、活き活きした色でそれを染めるべき 謙遜して平這っている。のんびりした若々しさが彼等の顔をは ろぼろの服装をした、顔を蹙めた、欲が深そうな、しかも自屈

通じて、人類のいかなる変化も、いかなる堕落も、 附けながら白眼んでいた。不可思議なる創造のあらゆる神秘を が玉座についても可いところに、悪魔が潜んで、見る者を脅し をつねったりひねったりして、ずたずたに引裂いていた。 ところに、 それがいかなる程度のものであっても、この半分も恐ろ 老齢のそれのような、古ぼけた皺だらけの手がそれ

見せられたので、彼は綺麗なお子さん達ですと云おうとしたが、 い不気味な妖怪を有しなかった。 スクルージはぞっとして後退りした。こんな風にして子供を

いかなる逆

、天使

言葉の方で、そんな大それた嘘の仲間入りをするよりはと、自

分で自分を喰い留めてしまった。

「精霊殿、これは貴方のお子さん方ですか。」スクルージはそれ

以上云うことが出来なかった。

的のためにそれを承認するがいい。 霊は片手を町の方へ伸ばしながら叫んだ。「そして、それを教え あり書いてあるからね。それを否定して見るがいい!」と、精 悪いものにするがいい! そして、その結果を待っているがい てくれる者をそしるがいい。それでなければ、お前の道化た目 まだその書いたものが消されずにあるとすれば、『滅亡』とあり 二人ながらに気を附けよ、彼等の階級のすべての者を警戒せよ。 云った。「彼等は自分達の父親を訴えながら、俺に縋り着いてい 「彼等は避難所も資力も持たないのですか」と、スクルージは 特にこの男の子に用心するがいい、この子の額には、若し この男児は無知である。この女児は欠乏である。彼等

そして、そしてそれを一層

「これは人間の子供達だよ」と、精霊は二人を見下ろしながら

精霊は彼自身の云った言葉を繰返し

なかった。 はないのかな。」 ながら、 アレイの予言を想い出した。そして、 「監獄はないのかね」と、 鐘は十二時を打った。 スクルージは周囲を見廻わしながら精霊を捜したが、見当ら これを最後に彼の方へ振り向いて云った。「共同授産場

カロル

最後の鐘の音が鳴り止んだ時、

眼を挙げながら、

地面に 頭巾

彼は老ジェコブ・マ

沿って霧のように彼の方へやって来る、着物を着流して、

を被った厳かな幻影を見た。

クリスマス・

第四章

最後の精霊

ているように思われたからである。 精霊は真黒な衣に包まれていた。その頭も、顔も、姿もそれ

精霊は自分の動いているその空気中へ陰鬱と神秘とを振り撒い

の傍に近く来た時、スクルージは地に膝を突いた。何故ならば、

幽霊は徐々に、厳かに、黙々として近づいて来た。それが彼

に隠されて、前へ差し伸べた片方の手を除いては、何にも眼に

見えるものとてなかった、この手がなかったら、夜からその姿 ることも困難であったろう。 を見別けることも、それを包囲している暗黒からそれを区別す 彼はそれが自分の傍へ来た時、その精霊の背が高く堂々とし

充されたのを感じた。それ以上は彼も知らなかった。と云うの

に居ると云うことのために、自分の心が一種厳粛な畏怖の念に

ていることを感じた。そして、そう云う不可思議なものがそこ

座いますね」と、スクルージは言葉を続けた。「そうで御座いま している事柄の幻影を私に見せようとしていらっしゃるので御 「貴方はこれまでは起らなかったが、これから先に起ろおうと 精霊が頭を傾げでもしたように、その衣の上の方の部分はその 精霊は返辞をしないで、その手で前の方を指した。 スクルージは云った。 精霊殿?」

襞の中に一瞬間収縮した。これが彼の受けた唯一の返辞であっ

た。

は云え、この押し黙った形像に対しては脚がぶるぶる顫えたほ

スクルージもこの頃はもう大分幽霊のお相手に馴れていたと

自分の方では極力眼を見張って見ても、幽霊の片方の手と一団 待って落ち着かせて遣ろうとでもするように、一寸立ち停まっ ないことを発見した。精霊も彼のこの様子に気が附いて、少し の薄黒い経帷子の背後では、幽霊の眼が自分をじっと見詰めて の大きな黒衣の塊の外に何物をも見ることが出来ないのに、あ が、スクルージはこれがためにますます具合が悪くなった。

るのだと思うと、 漠然とした、何とも知れない恐怖で身体中

た幽霊の中で貴方が一番怖ろしゅう御座います。しかし貴方の

「未来の精霊殿!」と、彼は叫んだ。「私は今までお目に懸かっ

がぞっとした。

前に真直に向けられていた。 葉を懸けて下さいませんでしょうか。」 それも心から有難く思ってするので御座います。どうか私に言 と望んで居りますので、貴方のお附合をする心得で居ります、 精霊は何とも彼に返辞をしなかった。ただその手は自分達の また私も今までの私とは違った人間になって生活したい

目的は私のために善い事をして下さるのだと承知して居ります

霊殿!」 尊い時間で御座います。私は存じています。御案内下さい、 「御案内下さい!」と、スクルージは云った。「さあ御案内下さ 夜はずんずん経ってしまいます。そして、私に取っては

スクルージはその著物の影に包まれて後に随いて行った。彼は

精霊は前に彼の方へ近づいて来た時と同じように動き出した。

その影が自分を持ち上げて、ずんずん運んで行くように思った。

と云うのは、むしろ市の方で二人の周囲に忽然湧き出して、自 二人は市内へ這入って来たような気がほとんどしなかった、

ら進んで二人を取り捲いたように思われたからである。が、(い

持っている大きな黄金の刻印を弄ったりしていた。その他スク

例の手が彼等を指差しているのを見て、彼等の談話を聴こうと

精霊は実業家どもの小さな一群の傍に立った。スクルージは

ルージがそれまでによく見掛たような、いろいろな事をしてい

人どもの集っている中にいた。商人どもは忙しそうに往来した ずれにしても)彼等は市の中心にいた。すなわち取引所に、商

話しをしたり、時計を眺めたり、何やら考え込みながら自分の

り、衣嚢の中で金子をざくざく鳴らせたり、幾群れかになって

進み出た。 「いや」と、恐ろしく頤の大きな肥った大漢が云った。「どちら

A CHRISTMAS CAROL う一人の男が非常に大きな嗅煙草の箱から煙草をうんと取り出 が死んだってことを知っているだけですよ」 にしても、それについちゃ好くは知りませんがね。ただあの男 「いつ死んだのですか」と、もう一人の男が訊ねた。 「だって、一体いかがしたと云うのでしょうな?」と、 「昨晩だと思います。」

しながら訊いた。「あの男ばかりは永劫死にそうもないように

思ってましたがね。」

またも

クリスマス・

「一体あの金子はいかがしたのでしょうね?」と、鼻の端に雄の

「そいつは誰にも分りませんね」と、最初の男が欠呻まじりに

た。 七面鳥のえらのような瘤をぶらぶら下げた赤ら顔の紳士が云っ

「それも聞きませんでしたね」と、頤の大きな男がまた欠呻を

しながら云った、「恐らく同業組合の手にでも渡されるんでしょ

うよ。(とにかく) 私には遺して行きませんでしたね。私の知っ

ているのはこれっきりさ。」

この冗談で一同はどっと笑った。

葬者があると云うことは全然聞かないからね。どうです、我々

「極く安直なお葬でしょうな」と、同じ男が云った。「何しろ会。ををまく、ともらい

で一団体つくって義勇兵になっては?」

「お弁当が出るなら行っても可いがね」と、

鼻の端に瘤のある

わせて貰わなくっちゃね。」

紳士は云った。「だが、その一人になるなら、喰わせるだけは喰

だね」と、 「ふうむ、して見ると、諸君のうちでは結局僕が一番廉潔なん 同また大笑いをした。 最初の話手は云った。「僕はこれまでまだ一度も黒い

いからね。

手嚢を嵌めたこともなければ、お葬礼の弁当を喫べたこともな

しかし誰か行く者がありゃ、僕も行きますよ。考え

僕は決してあの人の一番親密な友人でなかったとは

立ち話しをしている二人の人を指した。スクルージは今の説明

[霊はだんだん進んである街の中へ滑り込んだ。幽霊の指は

めるために精霊の方を見遣った。

しまった。スクルージはこの人達を知っていた。で、説明を求

話手も聴手もぶらぶら歩き出した。そして、他の群へ混って

のですからね。や、いずれまた。」

云えませんよ。途で会えば、いつでも立ち停って話しをしたも

はこの中にあるのだろうと思って、再び耳を傾けた。

彼はこの人達もまたよく知り抜いていた。 彼等は実業家であっ

た。大金持で、しかも非常に有力な。彼はこの人達からよく思

われようと始終心掛けていた。つまり商売上の見地から見て、

厳密に商売上の見地から見て、よく思われようと云うのである。

りをなさいませんでしたかね。」

「聖降誕祭の季節なら、これが順当でしょう。時に貴方は氷滑

ありませんか、ええ?」

ましたね、あの地獄行きがさ。ええ?」

「そうだそうですね」と、相手は返辞をした。「随分お寒いじゃ

「ところで」と、最初の男が云った。「彼奴もとうとうくたばり、

「や、今日は?」と、片方が挨拶した。 「や、今日は?」と、一人が云った。

なら!」

「いえ、いいえ。まだ他に考えることがありますからね。

CHRISTMAS CAROL

|初スクルージは精霊が外見上こんな些細な会話に重きを置

いているのにあきれかえろうとしていた。が、これには何か隠

ろうかとつくづく考えて見た。あの会話が元の共同者なるジェ れた目算があるに違いないと気が附いたので、それは多分何であ

コブの死に何等かの関係があろうとはどうも想像されない、と

にそれが当て嵌まろうとも、彼自身の改心のために何か隠れた

の当て嵌まりそうな者は一人も考えられなかった。しかし何人

云うのは、それは過去のことで、この精霊の領域は未来である

それかと云って、自分と直接関係のある人で、

あの会話

掛りを与えてくれるだろうし、またこれ等の謎の解決を容易に 心した。と云うのは、彼の未来の姿の行状が自分の見失った手 してくれるだろうと云う期待を持っていたからである。 自分の影像が現われたら、特にそれに注意しようと決

聞いたことや見たことは一々大切に記憶えて置こうと決心した。 教訓が含まれていることは少しも疑われないので、彼は自分の

がいつもそこに出掛けている時刻を指していたけれども、玄関 の居馴れた片隅には他の男が立っていた。そして、時計は自分 彼は自分の姿を求めて、その場で四辺を見廻わした、が、自分

中に生活の一変を考え廻らしていたし、またその変化の中では から流れ込んで来る群衆の中に自分に似寄った影も見えなかっ とは云え、それはさして彼を驚かさなかった。何しろ心の

新たに生れた自分の決心が実現されるものと考えてもいたし、

彼が考えに沈んだ探究から眼を覚ました時、

望んでもいたからである。

静かに黒く、精霊はその手を差し伸べたまま彼の傍に立ってい

き具合と自分に対するその位置から推定して、 は鋭く自分を見詰めているなと思った。そう思うと、彼はぞっ

例の見えざる眼 精霊の手の向

と身顫いが出て、ぞくぞく寒気がして来た。

二人はその繁劇な場面を捨てて、

い方面へ這入り込んで行った。スクルージも兼てそこの見当も、

踏み入れたことはなかった。 またこの好くない噂も聞いてはいたが、今までまだ一度も足を

の数の下肥溜めがあると同じように、疎らに家の立っている街

醜くかった。路地や拱門路からは、

それだけ

住宅もみすぼらしいものであった。人々は半ば裸体で、酔払っ

その往来は不潔で狭かった。店も

て、だらしなく、

市中の余り人にも知られな

胸の悪くなるような臭気と、塵埃と、生物とを吐き出し そして、その一廓全体が罪悪と汚臭と不幸とでぷんぷ

ん臭っていた。

Ō

いかがわしい罪悪の巣窟の奥の方に、

葺卸屋根の下に、

骨類、脂のべとべとした腸屑(わたくず)などを買入

厢の出張った店があって、そこでは鉄物や、古襤褸

内部の床の上には、銹ついた鍵だの、

釘だの、鎖だ

の低 、空壜、

れていた。

種類の鉄の廃物が山の様に積まれてあった。

とを好 蝶番いだの、鑪だの、秤皿だの、分銅だの、その他あらゆる まないような秘密が醜い襤褸の山や、

自分の売買する代物の間に坐り込んでいた。この男は一本の綱 炭煖炉を傍にして、七十歳に近いかとも思われる白髪の悪漢が

の墓場の中に育まれかつ隠されていた。

腐った脂身の塊 何人も精査するこ

古煉瓦で造った

外の冷たい風を防いでいた。そして、穏やかな隠居所にぬくぬ 暖まりながら、呑気に烟草を喫かしていた。

の上に懸け渡した種々雑多な襤褸布を穢くるしい幕にして、戸

スクルージと精霊とがこの男の前に来ると、

ちょうどその時

で来た。が、その女がまだ這入ったか這入り切らぬうちに、もう 一人の女が大きな包みを持って店の中へこそこそと這入り込ん

緒にどっと笑い出した。

打捨って置いても、どうせ日傭い女は一番に来るのだ」と、最

が一緒になって、ぽかんとあきれ返っていたが、やがて三人一

人を見て同じように吃驚した。暫時は、煙管を啣えた老爺まで た。二人の女も互に顔見合せて吃驚したものだが、この男は二 の女のすぐ後から褪げた黒い服を来た一人の男が随いて這入っ 一人の女が同じように包みを抱えて這入って来た。そして、こ

初に這入って来た女は叫んだ。「どうせ二番目には洗濯婆さん

あ待て、俺が店の戸を閉めるまでよ。ああ、何と云うきしむ戸 うずっと以前から一々断らないでもそこへ通られるようになっ 煙管を離しながら云った。「さあ居間へ通らっしゃい。お前はもパイプ ているんだ。それから自余の二人も満更知らぬ顔ではない。ま 「お前方は一番好い場所で出会ったのさ」と、老ジョーは口から この店にも店自身に緊着いてるこの蝶番いのように錆

の骨ほど古びた骨はここにもないからね。ははは!

俺達は皆

びた鉄っ片れは他にありゃしねえよ、本当にさ。それにまた俺

そして、持っていた煙管の羅宇で燻っている洋灯の心を直しな その老爺は階段の絨緞を抑えて置く古い鉄棒で火を掻き集めた。 ね。さあ居間へお這入り。さあ居間へ!」 この職業に似合ってるさ、まったく似合いの夫婦と云うものだ 居間というのは襤褸の帷幄の背後になっている空間であった。

がら(もう夜になっていたので、)再びその煙管を口へ持って 彼がこんな事をしている間に、既にもう饒舌ったことのある

女は床の上に自分の包みを抛り出して、これ見よがしの様子を

て、他の二人を馬鹿にしたようにしゃあしゃあと見やりながら。 しながら床几の上に腰を下ろした――両腕を膝の上で組み合せ

「で、どうしたと云うんだね! 何がどうしたと云うんだえ、え

えディルバアのお主婦さん?」と、その女は云った。「誰だって

うだったんだよ。」 自分のためを思ってする権利はあるのさ。あの人なんざ始終そ 「そりゃそうだとも、実際!」と、洗濯婆は云った。「何人もあ

う御座んさあね、お婆さん、誰が知ってるもんですか。それに の人以上にそうしたものはないよ。」 「じゃ、まあそう可怖そうにきょろきょろ立っていなくとも好

此方だってお互に何も弱点の拾いっこをしようと云うんじゃない。 とは一緒に云った。「もちろんそんな積りはないとも。」 いでしょう、そうじゃないかね。」 「そうじゃないともさ!」と、ディルバーの主婦さんとその男

まさか死んだ人が困りもしないだろうしねえ。」

なのさ。これ位僅かな物を失くしたとて、誰が困るものかね。

「それなら結構だよ」と、その女は呶鳴った。「それでもう沢山

「死んでからも、これが身に着けていたかったら、あの因業親

爺がさ」と、例の女は言葉を続けた。「生きている時に、何故人

間並にしていなかったんだい? 人間並にさえしてりゃ、お前、

えた。「なに、もっと他の品に手が着けられたら、大丈夫お前さ

「もう少し酷い罰が当てて貰いたかったねえ」と、例の女は答

ん、もう少し酷い罰を当てて遣ったんだよ。その包みを解いて

云った。「あの人に罰が当ったんだねえ」

「まったくそりゃ本当の話だよ」と、ディルバーの主婦さんは

後の息を引き取らなくたってねえ。」

者はある筈だよ、ああして一人ぽっちであそこに寝たまま、最

いくら死病に取り憑かれたからとて、誰かあの人の世話位する

お互様に他人の物をくすねて

別段罪にやならな

おくれな、

明白と云うが可いのさ。私ゃ一番先だって構やしない。 ジョー爺さんや。そして、値段をつけて見ておくれ

・やね。 たことは好く承知しているんだからねえ。 が、二人の仲間にも侠気があって、仲々そうはさせて置かな さあ包みをお開けよ、ジョー。」

組 は を攀じ登って、自分の分捕品を持ち出した。 かった。禿げちょろの黒の服を着けた男が真先駆けに砦 な かった。 れに安物の襟留めと、これだけであった。 印刻が一つ二つ、鉛筆入れが一個、

、それは量高の物

の裂目

袖口ボタンが

爺さんの手で一々検められ、

値踏みされた。

爺さんはそれぞれ

品物はジョー

の品に対して自分がこれだけなら出してもいいと云う値段を壁

何もないと見ると、その総額を締め合せた。

の上に白墨で記した。そしていよいよこれだけで、後にはもう

類、少し許りの衣裳、旧式の銀の茶匙二本、一挺の角砂糖挟み、 それに長靴二三足。彼女の勘定も前と同じように壁の上に記さ ディルバーの主婦さんがその次であった。上敷とタウェルの

「俺は婦人にはいつも余計に出し過ぎてね。これが俺の悪い癖

どと云って、まだこれを決着しないものにする気なら、俺は折

は云った。「これがお前さんの勘定だよ。この上一文でも増せな

またそれがために損ばかりしているのさ」と、ジョー老爺

女が云った。 角奮発したのを後悔して、半クラウン位差引く積りだよ。」 つもの結び目を解いてからに、大きな重そうな巻き物になった 「さあ、今夜は私の荷物をお解きよ、ジョーさん。」と、最初の ジョーはその包みを開き好いように両膝を突いて、幾つも幾

何だか黒っぽい布片を引き摺り出した。 して、笑いながら返辞をした、「寝台の帷幄だよ。」 「ああ!」と、例の女は腕組みをしたまま、前へ屈身むように 「こりゃ何だね?」と、ジョーは云った。「寝台の帷幄かい。」 「お前さんもまさかあの人をあそこに寝かしたまま、環ぐるみ

そっくりこれを引っ外して来たと云う積りじゃなかろうね。」と、

「そうだよ、そう云う積りなんだよ」と、その女は答えた。「だっ

ジョーは云った。

云った。「今にきっと一身代造るよ。」 込めるような、そんな遠慮はしない積りだよ、ジョーさん、お な場合に、あの爺さんのようなあんな奴のためにその手を引っ て、いけないかね。」 「そうさ、私も手を伸ばすだけで何がしでもその中に握れるよう 「お前さんは身代造りに生れついてるんだねえ」と、ジョーは

前さんに約束して置いても可いがね」と、例の女は冷やかに返 答した。「その油を毛布の上へ垂らさないようにしておくれよ。」 「あの人のでなけりゃ、誰のだと云うんだよ」と、女は答えた。 「あの人の毛布かね」と、ジョーは訊ねた。

「あの人も(ああなっては)毛布がなくたって風邪を引きもしま

いじゃないか、本当の話がさ。」

「まさか伝染病で死んだんじゃあるまいね、ええ?」と、老ジョー

さ。これが彼奴の持っていた一番上等のだからね。また実際好 穴一つ見附ける訳にゃ行かないだろうよ、擦り切れ一つだって じゃないんだからね。ああ! その襯衣が見たけりゃ、お前さ までも彼奴の周りをうろついているほど、彼奴のお相手が好き 「そんな事でもありゃ、いくら私だってこんな物のためにいつ はむざむざと打捨ってしまうところなんだよ。」 んの眼が痛くなるまで好く御覧なさいだ。だが、いくら見ても、 は仕事の手を止めて、(相手を)見上げながら云った。 い物だよ。私でもこれを手に入れなかろうものなら、他の奴等 「打捨るってどう云うことなんだい?」と、老ジョーは訊ねた。 「そんな事はびくびくしないでも可いよ」と、女は云い返した。 「彼奴に着せたまま一緒に埋めてやるのに極まってらあね」と、

その女は笑いながら答えた。「誰か知らんが、そんな真似をする

馬鹿野郎があったのさ。でも、(良い按排に) 私が(それを見附 けて、)もう一度脱がして持って来ちまったんだよ。そんな目

く見える筈はないよ。」 的には には(麻の襯衣)同様しっくり似合うものね。彼奴があの(麻 キャリコなんてえものは何にだって役に立ちはしないよ。 の)襯衣を着ていた時見っともなく見えたよりも、見っともな スクルージは慄然としながらこの対話に耳を傾けていた。 (キャリコで沢山さ。)キャリコで間に合わなかったら、

死骸

カロル

の老爺さんの洋灯から出る乏しい光の下に、銘々の分捕品を取

り捲いて、

を売買する醜怪な悪鬼どもであったとしても、

彼等が坐っていた時、

彼はたとい、

彼等が死骸其者 よもこれより烈

例

しくはあるまいと思われるほどの憎悪と嫌忌の情を以てそれを

見やったものだ。

と、笑った。「これが事の結末でさあね。彼奴が生きていた時分と、笑った。「これが事の結末でさあね。彼奴が生きていた時分 の上に銘々の所得を数え立てた時に、例の女は「はッ、はァ!」 誰でも彼でも脅かして傍へ寄せ附けなかったものだが、そ

老ジョーが銭の入っているフランネルの嚢を取り出して、床

のお蔭で死んでから私達を儲けさしてくれたよ。はッ、はッ、

ように私もなるかも知れませんね。今では、私の生活もそちら えながら云った。「分りました。分りました。この不幸な人間の の方へ向いて居ります。南無三、こりゃどうしたのでしょう!」 「精霊殿!」と、スクルージは頭から足の爪先までぶるぶると顫

目の前の光景が一変したので、彼はぎょっとして後へ退った。

も何もない露出しの寝床である。その寝床の上には、ぼろぼろ 彼は今やほとんど一つの寝床に触れようとしていたのだ。帷幄

云わないが、畏ろしい言葉でそれが何物であるかを宣言してい

の敷布に蔽われて、

何物かが横わっていた。それは何とも物は

の部屋は非常に暗かった、どんな風の部屋であるか知りた

るりと見廻わしては見たが、少しでも精密に見分けようとする

いと思う内心の衝動に従って、スクルージはその部屋の中をぐ

薄白い光が真直に寝床の上に落ちた。するとその寝床の上に、

には余りに暗かった。戸外の空中に昇りかけた(朝の太陽の)

何も彼も剥ぎ取られ、奪われて、誰一人見張っている者もなけ

れば、泣いてやる者もなく、世話の仕手もないままで、この男

クリスマス・

の死体が横わっていた。

死体の頭部を指していた。覆い物は、

一寸それを持ち上げただ

そのびくともしない手は

スクルージは精霊の方を見やった。

自分にないと同様に、この覆い物を引き剥くるだけの力がどう にも造作ないことだと云うことにも気が附いた、結局そうした いとも思って見た。が自分の傍からこの精霊を退散させる力が

恐怖をもてその祭壇を装飾せよ。こは汝の領国なればなり。

かすことは出来ないし、その目鼻立ちの一つでも見苦しいもの からは、その髪の毛一本たりとも汝の恐ろしき目的のために動 がらしかし愛されたる、尊敬せられたる、名誉づけられたる頭 を設えよ。そして、汝の命令のままになるような、さまざまの

お、冷たい、冷たい、硬直な、怖ろしい死よ、ここに汝の祭壇

しても彼にはなかった。

部を露出しただろうと思われるほど、いかにもぞんざいに当て がわれていた。彼はその事について考えた。そうするのがいか

にすることは出来ない。何もそれはその手が重くて、放せば再

またその心臓も脈も静かに動

鷹揚で、 優しかった

実であったからである。その心は勇敢で、暖かで、 かないからではない。否、その手は生前気前よく、

からである。そして、その脈搏は真の人間のそれであったから

斬れよ、死よ、

斬れよ!

そして、

彼の善行がその傷

何等の声がスクルージの耳にこれ等の言葉を囁いたのではな から飛び出して、永遠の生命を世界中に種蒔くのを見よ!

葉を聞いた。

かも彼は寝床の上を見やった時に、まざまざとこんな言

彼は考えた、万一この人間が今生き返ることが出

貪欲か、冷酷な取引か、差し込むような苦しい心遣いか。こう 来たとしたら、先ず第一に考えることはどんな事であろうかと。

云うものは彼を結構な結果に導いてくれた、まったくね!

うな、 離れたところで、ここで得た教訓は忘れませんよ、それだけは えて見るだけの勇気がなかった。 落ち着かないでそわそわしているのか、スクルージはとても考 私の云うことを信じて下さい。さあ参りましょう!」 れ等のものは死の部屋に在って何を欲するのか、何をそんなに は暗い空虚な家の中に寝ていた。一疋の猫が入口の戸を引掻い ていた、炉石の下ではがりがり噛じっている鼠の音がした。こ 「精霊殿!」と、彼は云った。「これは恐ろしい所です。ここを ところが、精霊はまだじっと一本の指でその頭部を指してい 一人の男も、一人の女も、一人の子供も持たないで、彼

とで優しくしてくれた、そして、その優しい一言を忘れないた

私はこの人に親切にして上げるんだ」と云って呉れるよ

「この人はこう云うことで私に親切にしてくれた、ああ云うこ

ばそうしたいのですがね。ですが、私にはそれだけの力がない の中にあったら」と、スクルージはもうこの上見てはいられな のです、精霊殿。それだけの力がないのです。」 いような気持で云った。「なにとぞその人を私に見せて下さい。 「もう解りました」と、スクルージは返辞をした。「私も出来れ 「この男が死んだために少しでも心を動かされたものがこの都 またもや精霊は彼の方を見ているらしかった。 お願いで御座います!」

精霊殿、

それを引いた時には、そこに昼間の部屋が現われた。そ

精霊は一瞬間彼の前にその真黒な衣を翼のように拡げた。

そ

の部屋には、一人の母親とその子供達とが居た。

その女は誰かを待っているのであった。それも頻りに物案じ

気疲れで、滅入り切ったような顔をした男であった。が、今や 針仕事をしようとしても手に着かなかったりした。そして、(傍 ような、容易ならぬ喜びの表情であった。 とに思って、抑えようと努めてはいるが、どうも圧え切れない その顔には著しい表情が現われていた、自分ながら恥かしいこ していたからである。 上がったり、窓から戸外を眺めたり、柱時計を眺めたり、 口に彼女の良人を迎えた。良人と云うのは、まだ若くはあるが、 で)遊んでいる子供達の声を平気で聞いていられないほど苛々 やっと待ち焦れていた戸を敲く音が聞えた。彼女は急いで入

その男は炉の側に自分のためにとて蓄って置かれてあった御

顔に待ち侘びているのであった。と云うのは、彼女が部屋の中

を頻りに往ったり来たりして、何か音のする度に吃驚して飛び

時には

馳走の前に腰を下ろした。それから彼女がどんな様子かと力な

げに訊いた時に、(それも長い間沈黙していた後で、)彼は何と

返辞をしたものかと当惑しているように見えた。

「それとも悪いのですか。」

「好かったのですか」と、彼女は相手を助けるように云った。

「悪いんだ」と、彼は答えた。

クリスマス・

みのない訳ではありませんよ。」

「気の折れるどころではないのさ」と、彼女の良人は云った。

みはありますわ! 万一そんな奇蹟が起ったのなら、決して望 「あの人の気が折れれば」と、彼女は意外に思って云った、「望

「いや、まだ望みはあるんだ、キャロラインよ。」

「私達はすっかり身代限りですね?」

「あの人は死んだんだよ。」

我慢強い女であった。 いと思った。そして、 が、 両手を握ったまま、そうと口走った。次

彼女の顔つきが真実を語っているものなら、彼女は温和しい

彼女はそれを聞いて、心の中に有難

まったく真実のことだったんだね。ただ病気が重いと云うだけ 毒がった。が、 れを私は単に私に会いたくない口実だと思ったんだが、それは 私があの人に会って、一週間の延期を頼もうとした時にさ。そ の瞬間には、 「昨宵お前に話したあの生酔いの女が私に云ったことね、それ、 なかったんだ、その時はもう死にかけていたんだよ。」 彼女も神の宥免を願った。そして、(相手を)気の 最初の心持が彼女の衷心からの感情であった。

クリスマス・ 意が出来るだろうよ。たとい出来ないにしても、あの人の後嗣 「そりゃ分からないよ。だが、それまでには、こちらも金子の用 「それで私達の借金は誰の手に移されるんでしょうね?」

がまたあんな無慈悲な債権者だとすれば、よっぽど運が悪いと

キャロライン!」 出来るだけその心持を隠すようにはしていたが、二人の心は

だんだん軽くなって行った。子供達は解らないながらもその話

は

だんだん晴れ晴れして来た。そして、これこそこの男の死ん

を聞こうとして、鳴りを鎮めて周囲に集まっていたが、その顔

だために幸福になった家庭であった。この出来事に依って惹起

された感情の中で、

精霊が彼に示すことの出来た唯一のものは

喜悦のそれであった。

たあの暗い部屋がね、精霊殿、いつまでも私の眼の前にちらつ さいな」と、スクルージは云った。「でないと、今しがた出て来

「人の死に関係したことで、何か優しみのあることを見せて下

精霊は彼の平生歩き馴れた街々を通り脱けて、 歩いて行く間に、

いているでしょうからね。」

、スクルージは自分の姿を見出そうと

彼を案内して

クリスマス・

册

は非常に静かにしていた。

「『また孩子を取りて、彼等の中に立てて、さて・・・・』」

母親と娘達とは一生懸命に針仕事をしていた。が、

確かに彼等

カロル

まって坐っていた。

トの家に這入った。すると、

彼等は前に訪問したことのある貧しいボブ・クラチッ

母親と子供達とは煖炉の周りに集

チットどもは立像のように片隅にじっと塊まって、自分の前に

かであった。非常に物静かであった。例の騒がしい小クラ

の本を拡げているピータアを見上げながら腰掛けていた。

彼方此方を見廻わしたものだ。が、どこにもそれは見附からな

るか。

とがその閾を跨いだ時に、その少年がその言葉を読み上げたも

スクルージはそれまでどこでこう云う言葉を聞いたことがあ

彼はそれまでそれを夢に見たこともなかった。彼と精霊

のに違いない。だが彼はどうしてその先を読み続けないのか。

母親は卓子の上にその仕事を置いて、顔に手を当てた。

「どうも色が眼にさわってねえ」と、彼女は云った。

ああ、可哀そうなちびのティムよ!

「もう快くなりましたよ」と、クラチットの主婦さんは云った。

た。「だが、阿父さんはこの四五日今までよりは少しゆっくり歩

帰りの時分には、どんな事があっても、どんよりした眼をお目に 「蝋燭の光では、黒い物は眼を弱らせるね。私は、阿父さんがお

かけまいと思ってるんだよ。そろそろもうお帰りの時分だね。」

「過ぎた位ですよ」と、ピータアは前の書物を閉じながら云っ

云った、それもしっかりした元気の好い声で――それは一度慄 彼等はまたもやひっそりとなった。が、漸くにして、彼女は

えただけであった。

ものだがねえ、それもずいぶん速くさ。」 「阿父さんは好くちびのティムを肩車に乗せてお歩きになった

「僕もおぼえています」と、ピータアは叫んだ。「たびたび見ま

したよ。-

が皆覚えているのであった。

「わたしも覚えていますわ」と、他の一人が叫んだ。つまり皆

「何しろあの児は軽かったからね」と、彼女は一心に仕事を続

おいでだったので、肩車に乗せるのが些とも苦にならなかった けながら、再び云った。「それに阿父さんはあの児を可愛がって

実際彼には慰安者(註、原語では襟巻と慰安者の両語相通ず。 のだよ、些とも。ああ阿父さんのお帰りだ!」 彼女は急いで迎えに出た。そして、襟巻に包まった小ボブ――

が必要であった、可哀そうに――が這入って来た。彼のために

お茶が炉棚の上に用意されていた。そして、一同の者は誰が一

気に懸けないで頂戴ね、泣かないで下さいね」とでも云うよう

それぞれその小さい頬を彼の顔に押し当てた――「阿父さん、 て見た。その時二人の小クラチットどもは彼の膝の上に乗って、 番沢山彼にそのお茶の給仕をするかと、めいめい先を争ってやっ

して、クラチットのお主婦さんや娘どもの出精と手ばやさとを

にも機嫌よく話しをした。彼は卓子の上の縫物を見やった。そ ボブは彼等と一緒に愉快そうであった。そして、家内中の者

ね? ロバート」と、彼の妻は云った。 ろうよと云ったものだ。 の日と定められたものらしい。)のずっと前に仕上げてしまうだ 「日曜日ですって! それじゃあなたは今日行って来たんです

褒めた。(そんなに精を出したら、)日曜日(註、この日が葬式

かったんだがね。あの青々した所を見たら、お前もさぞ晴れ晴 「ああそうだよ」と、ボブは返辞をした。「お前も行かれると好

来なかったのだ。それを我慢することが出来るようなら、彼と あ小さい、小さい子供よ」と、ボブは叫んだ。「私の小さい子供 私は日曜日にはいつもあそこへ行く約束をあの子にしたよ。あ れしたろうからね。なに、これから度々見られるんだ。いつか 彼は急においおい泣き出した。どうしても我慢することが出

てしまったことであろう。 はその室を出て、階段を上って二階の室へ這入った。そこ

その子供とは、恐らくは彼等が現在あるよりもずっと遠く離れ

には景気よく灯火が点いて、聖降誕祭のお飾りが飾ってあった。

けていたらしい形跡があった。憐れなボブはその椅子に腰を下 子が置いてあった。そして、つい今し方まで誰かがそこに腰掛 そこにはまた死んだ子の傍へくっ附けるようにして、一脚の椅

ろした。そして、少時考えていた後で、やや気が落ち着いた時、

彼は死んだ子の冷たい顔に接吻した。こうして彼は死んだもの

クリスマス・

て降りて行った。

はまだ針仕事をしていた。ボブはスクルージの甥が非常に親切

同の者は煖炉の周囲にかたまって話し合った。娘達と母親

はもう仕方がないと諦めた。そして、再び晴れやかな気持になっ

たことがないのだが、今日途中で会った時、自分が少し弱ってい にしてくれたと一同の者に話した。彼とはやっと一度位しか会っ

るのを見て、――「お前も知っての通り、ほんの少し許り弱って いたんだね」と、ボブは云った。——何か心配なことが出来たの

かと訊いてくれた。「それを聞いて」と、ボブは云った。「だっ

訳を話したのさ。すると、『そりゃ本当にお気の毒だね、クラ チット君、貴方の優しい御家内のためにも心からお気の気だと あの方はとても愉快に話しをする方だものね、そこで私も

を知っているんだろうね?

私には分からないよ。」

「何を知っているのですって、貴方?」

思うよ』と云って下さった。時に、どうしてあの人がそんな事

た。

「だって、お前が優しい妻だと云うことをさ」と、ボブは答え

さるのかと思われる位だったよ。」 嬉しかったんだよ、親切がさ。 さったのさ。私がそんなに喜んだのは、なにもあの方が私達の が私の住居です。なにとぞ御遠慮なく来て下さい』と云って下 気の毒で』と、あの方は云って下すったよ。それから『何か貴 知ってて貰いたいね。『貴方の優しい御家内のためには心からお ために何かして下さることが出来るからってえんじゃない。 方のお役に立つことが出来れば』と、名刺を下すってね、『これ ムのことを好く知ってでもいらして、それで私達に同情して下 「本当に好い方ですね」と、クラチットの主婦さんは云った。 「よく云ってくれた、ピータア」と、ボブは叫んだ。「誰でも それもないことはないが、それよりもただあの方の親切が

実際あの方は私達のちびのティ

「誰でもそんなことは知ってますよ」と、ピータアは云った。

と一緒になって、別に世帯を持つようになるのだわね。」 な気がするんだがね。」 んは云った。 「そして、それから」と、娘の一人が叫んだ。「ピータアは誰か 「まあ、あれをお聞きよ、ピータア」と、クラチットの主婦さ お聞きよ――何かピータアに好い口を見附けて下さるよう

「馬鹿云え!」と、ピータアはにたにた笑いをしながら云い返

した。 「まあまあ、そう云うことにもなるだろうよ」と、ボブは云っ

あるだろうがね。しかし何日どう云う風にして各自が別れ別れ

た。「いずれその間にはさ、もっとも、それにはまだ大分時日が

になるにしても、きっと家の者は誰一人あのちびのティムのこ

だ。

が――いかにも我慢強くて温和しかったことを思い出せば、そ 「そしてね、皆はあの子が――あんな小さい、小さい子だった

う安々と家の者同志で喧嘩もしないだろうし、またそんな事を

して、あのちびのティムを忘れるようなこともないだろうねえ、

私はそう思ってるよ。」

た一同の者が叫んだ。

「いいえ、決してそんな事はありませんよ、阿父さん!」と、ま

「私は本当に嬉しい」と、親愛なるボブは叫んだ。「私は本当に

と彼自身とは握手した。ちびのティムの魂よ、汝の子供らしき 二人の少年クラチットどもも彼に接吻した。そして、ピータア 嬉しいよ。」 クラチットの主婦さんは彼に接吻した、娘達も彼に接吻した、

本質は神から来れるものなりき。

すが、どうしてかは私には分かりませぬ。私どもが死んでるの を見たあれは、どう云う人間だか、なにとぞ教えて下さいませ。」 る時間が近づいたような気がいたします。そんな気はいたしま 「精霊殿!」と、スクルージは云った。「どうやら私どもの別れ |来の聖降誕祭の精霊は前と同じように――もっとも、前と

違った時ではあったがと、彼は考えた。実際最近に見た幻影は、

もあるように見えなかった――実業家達の集まる場所へ彼を連 すべてが未来のことであると云う以外には、その間に何の秩序

際精霊は何物にも足を留めないで、今所望された目的を指して

れていった。が、彼自身の影は少しも見せてくれなかった。実

の方で一寸待って貰うように頼んだものだ。 でもいるように、一直線に進んで行った。とうとうスクルージ

云った。「私が商売をしている場所で、しかも長い間やっている

事になっていますか。なにとぞ見せて下さいませ!」 「その家は向うに御座います」と、スクルージは絶叫した。「何故 精霊は立ち停まった。その手はどこか他の所を指していた。

貴方は他所を指すのですか。」

所で御座います。その家が見えます。未来における私はどんな

「只今二人が急いで通り過ぎたこの路地は」と、スクルージは

頑として仮借する所のない指は何の変化も受けなかった。

スクルージは彼の事務所の窓の所へ急いで、中を覗いて見た。

家具が前と同じではなかった。椅子に掛けた人物も彼自身では

それは矢張り一つの事務所ではあった。が、彼のではなかった。

彼はもう一度精霊と一緒になって、自分はどうしてまたどこ 精霊は前の通りに指さしていた。

へ行ってしまったかと怪しみながら、精霊に随いて行くうちに、

停って、四辺を見廻した。 到頭二人は一つの鉄門に到着した。彼は這入る前に、一寸立ち

墓場。ここに、その時、彼が今やその名を教えらるべきあの

不幸なる男は、その土の下に横わっていたのである。それは結

葭に蔽われていた。

な場所であった。

死の産物であった。

ようになっていた。そして、満腹のために肥え切っていた。誠

また余りに人を埋め過ぎるために息の塞る その雑草や葭は植物の生の産物ではなく、 四面家に取りかこまれて、生い茂る雑草や

に結構な場所であった!

精霊は墓の前に立って、その中の一つを指差した。

ぶる慄えながらその方に歩み寄った。 る所はなかった。 而も彼はその厳粛な姿形に新しい意味を見出

精霊は元の通りで寸分変

彼はぶる

したように畏れた。

「貴方の指していらっしゃるその石の傍へ近づかないうちに」

これ等は将来本当にある物の影で御座いましょうか、それ スクルージは云った、「なにとぞ一つの質問に答えて下さ

ともただ単にあるかも知れない物の影で御座いましょうか。」

精霊は依然

として自分の立って居る傍の墓石の方へ指を向

クリスマス・

けていた。

た結果に到達する――それは前以て分りもいたしましょう」と、

「人の行く道は、それに固守して居れば、どうしてある定まっ

スクルージは云った。「が、その道を離れてしまえば、結果も変

うだと仰しゃって下さいな!」 るものでしょう。貴方が私にお示しになることについても、そ

精霊は依然として動かなかった。

CHRISTMAS CAROL

をついて叫んだ。

「いえ、精霊殿、おお、いえ、いいえ!」

名前を読んだ。

その墓石の上に、「エベネザア・スクルージ」と云う自分自身の そして、指の差す方角へ眼で従いながら、打捨り放しにされた

スクルージはぶるぶる慄えながら、精霊の方に這い寄った。

「あの寝床の上に横わっていた男は私なのですか」と、彼は膝

精霊の指は墓から彼の方に向けられた、そしてまた元に返っ

指は矢張りそこにあった。

だ。 間には断じてなりませんよ。で、若し私に全然見込みがないも はこうやって精霊様方とお交りをしなかったら、なった筈の人 「善良なる精霊殿よ」と、彼は精霊の前の地に領伏しながら言 「精霊殿!」と、彼はその衣にしっかり噛じりつきながら叫ん この時始めてその手は顫えるように見えた。 **「お聞き下さい! 私はもう以前の私では御座いません。** 何故こんなものを私に見せて下さるのです?」

葉を続けた。「貴方は私のために取り做して、私を憐れんで下さ

保証して下さいませ!」

その親切な手はぶるぶると顫えた。

います。

お示しになったあの幻影を一変することが出来ると云うことを

私はまだ今後の心を入れ代えた生活に依って、貴方が

て見せます。 「私は心の中に聖降誕祭を祝います。そして、一年中それを守っ 私は過去にも、現在にも、未来にも(心を入れ代

CHRISTMAS CAROL

えて)生きる積りです。三人の精霊方は皆私の心の中にあって

出すような真似はいたしません。おお、この墓石の上に書いて

力を入れて下さいましょう。皆様の教えて下すった教訓を閉め

ある文句を拭き消すことが出来ると仰しゃって下さい!」

の余りに、彼は精霊の手を捕えた。

精霊はそれを振り

精霊は縮まって、ひしゃげて、小さくなって、一つの寝台の上

差上げながら、彼は精霊の頭巾と着物とに一つの変化を認めた。

自己の運命を引っ繰り返して貰いたさの最後の祈誓に両手を

霊を引き留めた。が、精霊の方はまだまだ強かったので、彼を 放とうとした。が、彼も懇願にかけては強かった。そして、精

刎ね退けた。

第五章

支えになってしまった。

台も彼自身のものなら、部屋も彼自身のものであった。 そうだ!しかもその寝台の柱は彼自身の所有であった。

も結構で嬉しいことには、彼の前にある時が、その中で埋め合

せをすることの出来るような、

彼自身のものであった。

別けて

寝

、また未来においても

「私は過去においても、現在においても、

クリスマス・

生きます!」と、スクルージは寝台から這い出しながら、以前

の言葉を繰り返した。「三人の精霊は私の心の中に在って皆力

の事のためには、神も聖降誕祭の季節も、褒め讃えられてあれ を入れて下さるに違いない。おお、ジェコブ・マアレイよ。こ

からに!」 彼

私は跪いてこう申上げているのだ、老ジェコブよ、跪いて

精霊と啀み合っていた際、彼は頻りに啜り泣きをしていた。そ れ途切れになって、思うように口が利けない位であった。先刻 は自分の善良な企図に昂奮し熱中するのあまり、声まで途切

のために彼の顔は今も涙で濡れていた。

「別段引き千断られてはいないぞ」と、スクルージは両腕に寝

台の帷幄の一つを抱えながら叫んだ。「別段引き千断られては いないぞ、鐶も何も彼も。みんなここにある――私もここに居

だって、消せば消されないことはないのだ。うむ、消されると

る――(して見ると、)ああ云う事になるぞと云われた物の影

もきっと消されるとも!」

その間彼の手は始終忙しそうに着物を持て扱っていた。それ

させたものだ。 き違えたりして、ありとあらゆる目茶苦茶のことに仲間入りを を裏返して見たり、上下逆様に着て見たり、引き千断ったり、置

酔漢のように眼が廻る。皆さん聖降誕祭お目出度う! 軽い、天使のように楽しく、学童のように愉快だよ。俺はまた コーンそっくりの様子をして見せたものだ。「俺は羽毛のように 「どうしていいか分からないな!」と、スクルージは笑いなが 同時にまた泣きながら喚いた。そして、靴下を相手にラオ

ようよう!」

の皆さんよ、新年お目出度う! いよう、ここだ!

彼は居間の中へ跳ね出した。そして、すっかり息を切らしな

ほーう! 世界中

がら、今やそこに立っていた。

「粥の入った鍋があるぞ」と、スクルージはまたもや飛び上がっ

あすこからジェコブ・マアレイの幽霊は這入って来たのだ! こ の隅にはまた現在の聖降誕祭の精霊が腰掛けていたのだ! この

て、煖炉の周りを歩きながら呶鳴った。「あすこに入口がある、

窓から俺は彷える幽霊どもを見たのだ! 何も彼もちゃんとし ている、何も彼も本当なのだ、本当にあったのだ。はッ、はッ、

な笑いであった、この上もなく華やかな笑いであった。そして、 実際あんなに幾年も笑わずに来た人に取っては、それは立派

これから続く華やかな笑いの長い、長い系統の先祖になるべき

笑いであった!

「どれだけ精霊達と一緒に居たのか、それも分らない。俺には何

「今日は月の幾日か俺には分らない」と、スクルージは云った。

にも分らない。俺はすっかり赤ん坊になってしまった。いや、

たい位のものだ。 彼 はその時教会から打ち出した、今まで聞いたこともないよ 快い鐘の音に、その恍惚状態を破られた。カーン、カー いよう!

気

に懸けるな。そんな事構わないよ。

俺はいっそ赤ん坊になり

ほう!

いよう、ここだ!」

うな、

A CHRISTMAS CAROL ハンマー。ヂン、ドン、ベル。ベル、ドン、ヂン。ハンマー、

カーン、カーン。おお素敵だ! 窓の所へ駆け寄って、彼はそれを開けた。そして、

素敵だ!

した。

賑やかしい、冷たい朝であった。一緒に血も踊り出せとばかり、

ピューピュー風の吹く、

冷たい朝であった。

神々

甘い新鮮な空気。楽しい鐘の音。

おお素敵だ! 金色の日光。

クリスマス・

だ!

「今日は何かい」と、スクルージは下を向いて、

日曜の晴れ着

霧もなければ、靄もない。

澄んで、晴れ渡った、陽気な、

頭を突き出

を着た少年に声を掛けた。恐らくこの少年はそこいらの様子を 見にぼんやり這入り込んで来たものらしい。

「ええ?」と、少年は驚愕のあらゆる力を籠めて聞き返した。

「私はそれを失わずに済んだ。精霊達は一晩の中にすっかりあれ せんか。」 「今日!」と、少年は答えた。「だって、基督降誕祭じゃありま 「基督降誕祭だ!」と、スクルージは自分自身に対して云った。 「今日は何かな、阿兄さん」と、スクルージは云った。

を済ましてしまったんだよ。何だってあの方々は好きなように

出来るんだからな。もちろん出来るんだとも。もちろん出来る

んだとも。いよう、阿兄さん!」

「いよう!」と、少年は答えた。

「一町おいて先の街の角の鳥屋を知っているかね」と、スクルー

「知っているともさ」と、少年は答えた。

―小さい方

と話しをするのは愉快だよ。ああそうだよ!「阿兄さん!」 取った七面鳥が売れたかどうか知っているかね。 子じゃ! どうだい、君はあそこに下がっていた、あの賞牌を の賞牌つき七面鳥じゃないよ、大きい方のだよ?」 「何て愉快な子供だろう!」と、スクルージは云った。「この子 「悧巧な子じゃ!」と、スクルージは云った。「まったくえらい 「なに、あの僕位の大っかいのかい」と、少年は聞き返した。

クリスマス・ それを買って来ておくれ。」 「下がってるって?」と、スクルージは云った。「さあ行って、 「今でもあそこに下がっているよ」と、少年は答えた。

「御戯談でしょ」と、少年は呶鳴った。

ように云っておくれな。そうすりゃ、

あ行って買って来ておくれ。そして、ここへそれを持って来る

私が使の者にその届け先

「いや、いや」と、スクルージは云った。「私は真面目だよ。さ

は一シリング上げるからね。五分経たないうちに、その男と一 を指図してやれるからね。その男と一緒に帰ってお出で、君に

緒に帰って来ておくれ、そうしたら半クラウンだけ上げるよ。」

少年は弾丸のように飛んで行った。この半分の速力で弾丸を

打ち出すことの出来る人でも、引金を握っては一ぱし確かな腕

を持った打ち手に相違ない。

ら、スクルージは両手を擦り擦り腹の皮を撚らせて笑った。「誰

「ボブ・クラチットの許へそれを送ってやろうな」と、云いなが

二倍も大きさがあるだろうよ。ジョー・ミラー(註、「ジョー・ から贈って来たか、相手に分っちゃいけない。ちびのティムの

見ようとしたことがなかった。いかにも正直な顔附きをしてい 眼を着けた。 えながら、表の戸口を開けるために階子段を降りて行った。そ は手でそれで撫でながら叫んだ。「俺は今までほとんどこれを こに立って、その男の到着を待っていた時、彼は不図戸敲きに 「俺は生きてる間これを可愛がってやろう!」と、スクルージ

た。やあ! ほう! 今日は!

聖降誕祭お目出度う!」

まったく素晴らしい戸敲きだよ! いよう。七面鳥が来

それは確かに七面鳥であった。こいつあ自分の脚で立とうと

きと折れてしまうだろうよ。 分も経たない間に、その脚は、封蝋の棒のように、中途からぽ、

しても立てなかったろうよ、この鳥は。(立ったところで、)一

「だって、これをカムデン・タウンまで担いじゃとても行かれま

くす笑いを圧倒するものは、ただ彼が息を切らしながら再び椅 ら、七面鳥の代を払った。くすくす笑いながら、馬車の代を払っ た。くすくす笑いながら少年に謝礼をした。そして、そのくす い」と、スクルージは云った。「馬車でなくちゃ駄目だろうよ。」 彼はくすくす笑いながら、それを云った。くすくす笑いなが

あまりくすくす笑って、とうとう泣き出した位であった。 子に腰掛けた時のそのくすくす笑いばかりであった。それから、 彼の手はいつまでもぶるぶる慄え続けていたので、髯を「剃

るのも容易なことではなかった。髯剃りと云うものは、たとい

あろう。 の上に膏薬の一片でも貼って、それですっかり満足したことで

ものだ。だが、彼は(この際)鼻の先を切り取ったとしても、そ それをやりながら踊っていない時でも、なかなか注意を要する

彼は上から下まで最上の晴れ着に着更えた。そして、とうと

う街の中へ出て行った。彼が現在の聖降誕祭の幽霊と一緒に出

も嬉しそうな微笑を湛えて通行の誰彼を眺めていた。彼は、一 ていた。で、スクルージは手を背後にして歩きながら、いかに て見た時と同じように、人々は今やどしどしと街上に溢れ出し

口に云えば、抵抗し難いほど愉快そうに見えた。そのためか、

三四人の愛嬌者が、「旦那お早う御座います! 聖降誕祭お目出

「今まで聞いたあらゆる愉快な音響の中でも、この言葉が自分の 度う!」と声を掛けた。その後スクルージは好く云ったものだ。

耳には一番愉快に響いた」と。 まだ遠くも行かないうちに、向うから例の恰服の好い紳士が

こちらへやって来るのを見た。前の日彼の事務所へ這入って来

クリスマス・

「スクルージさんでしたか。」

か。

まったく御親切に有難う御座いましたね。

を取りながら云った。「今日は?

昨日は好い工合に行きました

聖降誕祭お目出

と訊いたあの紳士である。二人が出会したら、あの老紳士がど

て、「こちらはスクルージさんとマアレイさんの商会ですね?」

みを覚えた。而も彼は自分の前に真直に横わっている道を知っ んな顔をして自分を見るだろうかと思うと彼は胸にずきりと傷

ていた。そして、それに従った。

「もしもし貴方」と、スクルージは歩調を早めて老紳士の両手

前ですが、どうも貴方には面白くない感じを与えましょうね? 「そうですよ」と、スクルージは云った。「仰しゃる通りの名

不払いになっている分が含まれているんですがね。で、その御 それだけお願いしたいので。もっとも、それには今まで何度も うに叫んだ。「スクルージさん、そりゃ貴方本気ですか。」 座いますがね――」ここでスクルージは何やら彼の耳に囁いた。 ですが、まあどうか勘弁して下さい。それから一つお願いが御 「なにとぞ」と、スクルージは云った。「それより一文も欠けず、 「まあ驚きましたね!」と、かの紳士は呼吸が絶えでもしたよ

うな御寛厚なお志に対しましては、もう何と申上げて宜しいや 面倒を願われましょうか。」 「もし貴方」と、相手は彼の手を握り緊めながら云った。「かよ

私には――」

に! う御座います。幾重にもお礼を申上げますよ。それではお静か でいることは明白であった。 「有難う御座います」と、スクルージは云った。「本当に有難 「伺いますとも」と、老紳士は叫んだ。そして、彼がその積り 彼は教会へ出掛けた。それから街々を歩き廻りながら、あち

こちと忙しそうにしている人々を眺めたり、子供の頭を撫でた

り、乞食に物を問い掛けたり、家々の台所を覗き込んだり、窓

ものだと云うことを発見した。彼はこれまで散歩なぞが――い を見上げたりした。そして、何を見ても何をしても愉快になる

家に向けた。 ようとは夢にも想わなかった。午後になって、彼は歩みを甥の

や、どんな事でもこんなに自分を幸福にしてくれることが出来

彼は近づいて戸を敲くだけの勇気を出す前に、何度も戸口を

通り越したものだ。が、勇を鼓してとうとうそれをやっ附けた。

「御主人は御在宅かな」と、スクルージは出て来た娘に云った。

本当に。

好い娘だ! 「いらつしゃいます。」 「どこにおいでかね」と、スクルージは訊いた。

「食堂にいらっしゃいます、奥様と御一緒に。それでは、お二

う食堂の錠の上に片手を懸けながら云った。「すぐにこの中に這

「有難うよ。御主人は俺を知ってだから」と、スクルージはも

階に御案内申しましょう。

カロル ああ胆が潰れた!

卓は大層立派に飾り立てられていた。) と云うのは、こう云った なものであるからである。 ような若い世帯持ちと云うものは、こう云う事に懸けてはいつ クルージは、一寸の間、足台に足を載せたまま片隅に腰掛けて でも神経質で、何も彼もちゃんとなっているのを見るのが所好 「フレッド!」と、スクルージは云った。 甥の嫁なる姪の驚き方と云ったら!

があっても、そんな真似はしなかったであろう。

「ああ吃驚した!」と、フレッドは叫んだ。「そこへ来たのは

いた彼女のことを忘れてしまったのだ。でなければ、どんな事

何誰です?」 私だよ。伯父さんのスクルージだよ。御馳走になりに来たん お前入れて呉れるだろうね、フレッド!」 彼は腕を振り千断られないのが切め

えた。 まい。 た妹が這入って来た時も、そうであった。来る人来る人皆がそ もなくなっていた。これほど誠意の籠った歓迎はまたと見られ てもの仕合せであった。五分間のうちに、彼はもう何の気兼ね 入れて呉れるだって! 彼の姪は(彼が夢の中で見たと)すっかり同じように見 トッパーが這入って来た時も、そうであった。

クリスマス・ 和合、 うであった。 ―晴―ら―し― 素晴らしい宴会、素晴らしい勝負事、

くからそこに出掛けた。先ず第一にそこへ行き着いて、

しかも明くる朝早く彼は事務所に出掛けた。

おお実際彼は早

後れて

素晴らしい

あの肥っ

- い幸福

!

の一生懸命になった事柄であった。

来るボブ・クラチットを捕えることさえ出来たら!

そして、彼はそれを実行した、然り、彼は実行した! 時計は

九時を打った。ボブはまだ来ない。十五分過ぎた。まだ来ない。

彼は定刻に後るること正に十八分と半分にして、やっとやって

来た。スクルージは、例の大桶の中へボブの這入るところが見

られるように、合の戸を開け放したまま腰掛けていた。

彼は戸口を開ける前に帽子を脱いだ。襟巻も取ってしまった。

彼は瞬く間に床几に掛けた。そして、九時に追い着こうとでも

しているように、せっせと鉄筆を走らせていた。

かね。」

にして唸った。「どう云う積りで君は今時分ここへやって来たの

「いよう!」と、スクルージは成るたけ平素の声に似せるよう

「誠に相済みません、旦那」と、ボブは云った。「どうも遅なり

「遅いね!」と、スクルージは繰り返した。 「実際、遅いと思う

まあ君ここへ出なさい。」

から現われながら弁解した。「二度と」もうこんな事は致しませ

「一年にたった一度の事で御座いますから」と、ボブは桶の中

んから。どうも昨日は少し騒ぎ過ぎたのですよ、旦那。」

「では、真実のところを君に云うがね、君」と、スクルージは

云った。「俺はもうこんな事には一日も耐えられそうにないよ。

ボブはよろよろとして、再び桶の中へ蹣跚き込んだ。「そこでだ

ね、俺は君の給料を上げてやろうと思うんだよ。」

そこでだね」と続けながら、彼は床几から飛び上がるようにし

相手の胴衣の辺りをぐいと一本突いたものだ。その結果、

を歩いている人々に助けを喚んで、狭窄衣でも持って来て貰お それで以ってスクルージを張り倒して、抑え附けて、路地の中

ボブは顫え上がった。そして、少し許り定規の方へ近寄った。

うと咄嗟に考えたのである。

中を軽く打ちながら、間違えようにも間違えようのない熱誠を 「聖降誕祭お目出とう、ボブ君!」と、スクルージは相手の背

籠めて云った。「この幾年もの間俺が君に祝って上げたよりも 一層目出たい聖降誕祭だよ、ええ君。俺は君の給料を上げて、

君 !

う一つ炭取りを買って来るんだよ、ボブ・クラチット君!」

火を拵えなさい。それから四の五の云わずに大急ぎでも

を飲みながら君の家のことも相談しようじゃないか、ええボブ

午後になったら、すぐにも葡萄酒の大盃を挙げて、それ

困っている君の家族の方々を扶けて上げたいと思っているのだ

てなかったような、あるいはこの好い古い世界の中の、 第二の父となった。彼はこの好い古い都なる倫敦にもかつ 。そして、実際は死んでいなかったちびのティムに取って

の約束を実行した。いや、それよりも無限に多くのものを実行

スクルージは彼の言葉よりももっと好かった。彼はすべてそ

いかなる好い古い都にも、町にも、村にもかつてなかったよ

その他

彼はその人々の笑うに任せて、少しも心に留めなかった。彼は うな善い友達ともなれば、善い主人ともなった、また善い人間 始めにはきっと誰かが腹を抱えて笑うものだ、笑われぬような この世の中では、どんな事でも善い事と云うものは、 ともなった、ある人々は彼がかく一変したのを見て笑った。が、

る。

事柄は一つもないと云うことをちゃんと承知していたからであ

その起り

そして、そんな人間はどうせ盲目だと知っていたので、彼

等がその盲目を一層醜いものとするように、他人を笑って眼に たからである。彼自身の心は晴れやかに笑っていた。そして、 皺を寄せると云うことは、それも誠に結構なことだと知ってい かれに取ってはそれでもう十分であったのである。

あの人こそそれを好く知っているのだと云うようなことが、彼 彼はその後ずっと禁酒主義の下に生活した。そして、若し生き について終始云われていた。吾々についても、そう云うことが ている人間で聖降誕祭の祝い方を知っている者があるとすれば、 彼と精霊との間にはそれからもう何の交渉もなかった。が、

ちびのティムも云ったように、神よ。 吾々を祝福し給え――吾々 本当に云われたら可かろうに――吾々総てについても。そこで、

総ての人間を!

後註

A CHRISTMAS CAROL 74 ٦١ L° II は底本では は底本では

六 Ŧî. 「 高 世 の 」 「壁を」 「しげしげと」 「ぶんと」は底本では「ふんと」 は底本では「塵を」 は底本では「萵苔の」 は底本では「しけじけと」

カロル

九 八 七 「麦酒が」 「駆け出して」 「依然」 「哄笑を」は底本では「洪笑を」 は底本では は底本では「麦酒か」 は底本では 「騙け出して」

クリスマス・

「苦悶」

は底本では「若悶」

<u>一</u> 五 74 「二度と」は底本では「二廣と」 「髯を」は底本では「髪を」 「遅なり」は底本では「遅なわり」

底本:「クリスマス・カロル」岩波文庫、岩波書店

1929 (昭和 4) 年 4 月 20 日初版発行 1936 (昭和 11) 年 1 月 10 日 10 刷

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

その際、以下の置き換えをおこないました。

「憫れ→あきれ、彼処→あそこ、恰→あたか、塞→あなぐら、或→ある、吩咐け→いいつけ、雛 も \rightarrow いえども、如何 \rightarrow いか、如何 \rightarrow いかが、幾許 \rightarrow いくら、何時 \rightarrow いつ、毎 \rightarrow いつ、愈々 \rightarrow いよ いよ、吋→インチ、泛ぶ→うかぶ、恭々しい→うやうやしい、笑靨→えくぼ、於て→おいて、晩 い→おそい 彼処→かして 目→かつ 賞て→かつて 廉→かど 乾度→きっと 擽られ→くす ぐられ、此奴→こいつ、踰える→こえる、此処→ここ、悉く→ことごとく、此の→この、是迄→ これまで、嘸→さぞ、薩張り→さっぱり、消遥い→さまよい、併し→しかし、直き→じき、蔵う →しまう、志→シリング、殿→しんがり、掬う→すくう、即ち→すなわち、凡て→すべて、其奴 \rightarrow そいつ、其処 \rightarrow そこ、謗る \rightarrow そしる、哮り \rightarrow たけり、慥か \rightarrow たしか、但し \rightarrow ただし、忽ち \rightarrow た ちまち、恃んで→たのんで、些っとも→ちっとも、恰度→ちょうど、就て→ついて、就いて→つ いて、即いて \rightarrow ついて、突慳貪 \rightarrow つっけんどん、兎ある \rightarrow とある、何奴 \rightarrow どいつ、何処 \rightarrow どこ、 M→ところ、沖も→とても、兎に角→とにかく、乍併→ながらしかし、何卒→なにとぞ、成程→ なるほど、成る程→なるほど、夢って→はびこって、疾い→はやい、夙く→はやく、汎く→ひろ く. 変梃→へんてこ. 殆ど→ほとんど、磅→ポンド、真逆→まさか、益々→ますます、又→ま た、亦→また、真個→まったく、迄→まで、侭→まま、見窄らしい→みすぼらしい、寧ろ→むし ろ、簇って→むらがって、齎して→もたらして、勿論→もちろん、尤も→もっとも、八釜しい→ 余つ程→よっぽど、余程→よほど、踰け→よろけ」

以下は、章の初出にルビを補いました。

「廉《やす》い、 廉《やす》くて、倫敦《ロンドン》、西班牙《スペイン》、機衣《シャツ》」 ※丸括弧内に示された「註」は、底本ではすべて割註となっています。

※疑問点への対処にあたっては、改版された 1938 (昭和 13) 年 2 月 5 日 13 刷を参照しました。

入力:大久保ゆう

校正:松永正敏

2002 年 12 月 22 日作成

2009 年 7 月 26 日修正

青空文庫作成ファイル:

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫(http://www.aozora.gr.jp/)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。